

# 「現代子ども学」公開講座 講演集録

第1号

2012年3月



千葉敬愛短期大学  
総合子ども学研究所

## 目 次

「現代子ども学」公開講座 講演集録の発刊に寄せて

千葉敬愛短期大学 総合子ども学研究所 所長 吉村真理子

### 【現代子ども学公開講座】

- 第1回 「子どもはみんなインフォメーション・シーカー」 …………… 1  
講師 一色伸夫 先生
- 第2回 「21世紀の子ども観 -赤ちゃん学の立場から-」 …………… 11  
講師 小西行郎 先生
- 第3回 「子どものウソは『嘘』か  
-創造的想像力を育てる大人の役割-」 …………… 23  
講師 内田伸子 先生
- 第4回 「からだの成長とこころの発達  
-子ども学から考える-」 …………… 37  
講師 小林 登 先生
- 第5回 「子どもの心に寄り添うとは」 …………… 51  
講師 柴田愛子 先生

## 「現代子ども学」公開講座 講演集録の発刊に寄せて

千葉敬愛短期大学 総合子ども学研究所  
所長 吉村真理子

この度、千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所より、「現代子ども学」公開講座講演集録第1号を刊行することになりました。

本学では、保育所・幼稚園・小学校の連携が求められていることに鑑み、2009年度より新規科目として、本学専任教員全員がオムニバス形式で担当する「現代子ども学Ⅰ」（1年後期履修）と「現代子ども学Ⅱ」（2年前期履修）を立ち上げました。そして、それぞれの講義のなかの各1回を、学外の先生をお招きする公開講座の形式とし、学生と教職員一同が見識を広げ深める機会とするだけでなく、市民の方々にも広く開放させていただいております。この「現代子ども学」公開講座のうち、第1回から第5回までの講演を収録させていただいたものが、本講演集録でございます。

「現代子ども学」に関しましては、2011年度より、「現代子ども学Ⅰ」を「子どもが育つ」、「現代子ども学Ⅱ」を「子どもを育てる」という視点で講義内容の体系化をいたしました。

この2つの視点は、第4回公開講座において、「からだの成長とこころの発達」と題してご講演いただいた小林登先生の「子ども学」の理念にご示唆をいただいたものです。小林先生は、子どもをめぐる問題はもはや、小児科医だけでも、教育・心理の専門家でも不十分であるとし、子どもを対象とする学問の専門家がパラダイム転換をし、学際的な研究の場を形成する必要があると主張されてこられました。そして、その場を形成する理念的な支柱として提唱したのが「子ども学」であり、小林先生の「子ども学」は「生物学的存在としての子どもが生まれながらにもっている育つ力」と、家庭や社会のもつ「社会的存在としての子どもを育てる力」を新しい立場からとらえるものとなりました。

本学でも「子どもの発達と学びの連続性」及び「教育と保育の一体性」の十分な理解のもとに「トータルな子ども観」を培う「総合子ども学」の学びを学生に提供することが重要であると認識し、本学の教育方針として標榜しております。本学は、子どもの側からの視点を大切にし、子どもをありのままに受容する姿勢を堅持しつつ、子どもを多くの学問領域から総合的に見つめることのできる、初等教育者・保育者の育成に努めることにより、今後も地域に貢献して参りたいと考えます。

最後になりましたが、「現代子ども学」公開講座の開催につきまして、大変ご尽力いただきました講師の先生方をはじめ、ご来学いただきました多くの参加者の皆様方に、心より御礼申し上げます。これからも、本講座が、地域の子どもの健やかな心身の成長を願い、地域の方々と本学学生、教職員とが、子どもについての学びを共有し、交流させていただく貴重な機会となり得ますよう、是非、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いに存じます。

## 第1回

「子どもはみんなインフォメーション・シーカー」

(2009年11月24日)

一色伸夫先生

甲南女子大学 人間科学部 総合こども学科 教授  
国際子ども学研究センター 所長

## 第1回「子どもはみんなインフォメーション・シーカー」

**一色先生：**今日は1年生が中心だと伺いまして、私は甲南女子大学での授業は2年生、3年生、4年生の授業で、1年生は持っていません。今日は若い人たち、そして地域の方々をご参加ということで、非常に緊張しております。よろしくお願いします。

今日はお招きいただきまして、本当にありがとうございます。お役に立てるかどうか分かりませんが、一生懸命お話をしていきたいと思っています。

36年間、NHKで子ども向け番組、そして子どもの番組等々をいろいろプロデュース、ディレクションしてきました。そして、「子ども学」という、日本で一番最初に子ども学と名前を付けた大学は、実は甲南女子大学なのです。ただし、私が名前を付けたのではなく、東京大学の小児科の先生だった小林登先生という方が付けました。やはり、今皆さん方も例えば小児保健、発達心理、教育社会学とか、いろいろな方面から子どもの問題を勉強されているのだらうと思います。ただし、学問の世界で言う、子どもの問題の研究というのは、その学問の領域の方法論で見て、そこから見た子どもということで科学的に正しい、事実であるということが言えます。しかし、子どもというのは、そういう方法論で見ない子どもという面もいろいろ持っているわけです。そうすると学問というのは、例えば自然科学系、社会科学系とか、いろいろな学問があります。そういったところで、それぞれが自分の領域ではこうだ、こうだと言っていくと、生きている子どもはどうなってしまいますか。切り刻まれてしまいます。やはり生きている子どもがそこにいる、その子どもがどうだということを、学問のほうをきちんと見極めていかなければいけません。学問ありきではないということで、子どもをまず中心に置いて、学問を総合的にとらえ直すことです。具体的には、例えば自然科学系からの学問、社会科学系の学問、そういったものも文理融合という言葉聞いたことがある方もいらっしゃると思います。総合的にとらえていかなければいけません。このようなことで、1998年に国際子ども学研究センターという、日本で初めて「子ども学」という名前を付けたセンターができました。それから10年経ち、今ではこちらの学校でも新しく「子ども学」という名前を付けた、新しい科目がで

き上がりました。

そういう意味では全国で六十数カ所の「子ども」と名前が付く、学科とか学部ができ上がっています。ということなので、皆さま方ほとんどの多くの学生の方は、これから小さい子どもさんたちを相手に専門家として、子どもを育てていくようなお仕事に就く方だと伺っています。そういう意味で、「子ども学」ということで、子どものことをきちんと理論的にも、それから実際に子どもたちと触れ合って、経験的にもそれを学んでいっていただきたいと思います。

さて、あまり堅苦しいことばかり言っているとあれですので、先ほど先生から、私は子どもメディア学ということを中心に研究をしていると紹介がありました。少しこの映像を見ていただきます。視聴覚メディアというものの特徴はいったい何だろうかということで、この映像を見ていただきたいと思います。

これは仙台の天文台です。天文台からここに、270、300、490、600メートルとどんどん上に上がって行っています。まだまだ天文台のところだけです。それから今青葉城から仙台市が見えてきました。仙台市からどこまでもどんどん、どんどん広がっていき、海が見えてきました。太平洋です。そして、それをどんどん、どんどん、どんどん、ずうーっと引いていくと、日本が見えてきました。日本から青い地球、毛利さんはこういう映像を見てきたのです。青い地球、ここからどんどん行くと、どんどん、どんどん、どんどん行くと太陽系になってきます。

どんどん行った。太陽系のところで地球に近いのは何でしたか。これが太陽系です。それから太陽系からさらにどんどん進んで行くと……それで太陽系銀河が入っているところから、さあここからは皆さん方のメルヘンの部分で、1年に1回、織姫と彦星が出会うみたいな、そういう世界に入ってきます。はいはい、どんどん、それで太陽系よりもどんどん行くと、その次は何になるんでしたっけ。

**会場：**銀河系。

**一色先生：**そうです、銀河系です。地球を含めた銀河系というところの全体像に迫っていくような感じでズームバックしています。本当はこのメートルを読

んでいきかっただけです。この数字を読んでいくと面白いのです。どんどん進んでいきます。どんどん進んで行きました。

ということで、あれが地球の太陽系のある銀河系です。今どんどんそういう銀河系が、またたくさん大宇宙にあるので広がっていています。

ですから視聴覚メディアというのは、今のですと視聴覚メディアは半分駄目でした。映像だけ見ていたら、やはり映像と音と相まって視聴覚メディアというのは、皆さん方に何か、ときめきみたいなものを起こしてくれるのです。それが残念ながらうまくいきませんでした。

これはデジタル・コズミックズームというものです。今、最初は見ていたのですが、実は人間というのはどんな存在かということをお話したいと思い、これを見てもらいました。やはり皆さん方は今見ていただいて、宇宙はどんなふうになっているのかと関心を持って見ていただいたと思っていいでしょうか。いいですか。

会場：はい。

一色先生：ここに書きましたが、人間というのは、実は生まれながらにしてインフォメーション・シーカーという存在です。ですから皆さん方も生まれたときから立派なインフォメーション・シーカーで、もちろん今でもインフォメーション・シーカーです。そして、私みたいな年代になってもインフォメーション・シーカーです。生きている限り、インフォメーション、情報を追い求める存在だという意味です。そういう意味では今、銀河の宇宙を見ていただきました。

ここに出ている写真は赤ちゃんです。赤ちゃんというのはわかりますね。

会場：わかります。

一色先生：では生まれてどのくらい経った赤ちゃんでしょうか。

会場：2カ月。

一色氏：え？ 2カ月？

会場：出てすぐだよ。

2週間ぐらい。

一色先生：2週間、はい。ほかには。

会場：2週間。

一色先生：1時間。それから？

会場：生まれたばかり。

一色先生：はい、最後の人が正解です。生まれた直後です。生まれた直後に、目をぱちりと開けて眼下を見えています。ということは、生まれたときから目の前にある、この不思議な世界は何だろうと知っていることがこの1枚の写真で分かります。これをインフォメーション・シーカーと名付けたのは、先ほど言いましたが、子ども学を世界で初めて……子どもというのは非常にいいネーミングです。英語にはありません。子どもなどという優しい、何でも含んだような「子ども」というあいまいな言葉はありません。その子どもという名前を付けた小林登東大名誉教授が、インフォメーション・シーカーという話を私と話をしているときに、「いやあ、一色さん、子どもは生まれたときからインフォメーション・シーカーだよ」と言ったので、それを私はそのまま子どもメディア学の一番のキーワードだということにしています。そして、子どもの生物学的側面をシステム情報論的にとらえるようなことで考えると、インフォメーション・シーカーということが言えると思います。それと共にもう一つ、子どもはインフォメーション・シーカーでいろいろなことを好奇心旺盛でやって育っているのかということ、それだけでは育ちません。皆さん方も一生懸命勉強されているように、子どもは社会環境とのインタラクションで育ちます。実はこの二つの面から子どもたちは豊かな成長、発育があると考えたいと思います。

そして、システム情報論的に子どもをとらえると。こここのところは配布資料にも書いてあります。子どもは生まれながらにして遺伝子で決まる、心と体の基本的なプログラムを持っています。子どもはすべて生まれてから何かを得ていくということ言えば、そんなに素早く言葉が出てくるとか、そういうことはあり得ないのです。やはり、その心と体の基本的なプログラムを持って生まれて、そのプログラムにスイッチが入るわけです。スイッチが入るためには、

社会環境がなければなかなか入らないことになると思います。出生直後から、子どもはその基本的なプログラムを内・外の情報によってスイッチを入れ、脳内ニューロンのネットワークを動かし、生活を、行動します。そしてはぐくみながら組み合わせ、育ちながら組み合わせ、いかなる事態にも対応できる複雑なネットワークとプログラムを自己組織化します。学問的に言うところのことなのです。具体的に言うならば、子どもは知的好奇心旺盛、その知的好奇心旺盛の子どもと向き合い、いろいろ豊かなコミュニケーションをしてくれる人間がいます。それによって子どもたちはそのスイッチを入れ、発育をしていくわけです。こういうふうを考えていただきたいと思います。

さて、それでは具体的な例で、社会環境とのインタラクションというところのどのようなものは、今までに evidence based というか、科学的に調べられたデータがあり、これは心理学者ファンツの有名な研究です。

生後5日の子どもと2カ月から6カ月経った子どもです。その両方を取っていますが、いずれにせよ、生まれたときから実は子どもというのは非常に単純な赤、黄色、白とかではなく、これは新聞紙、同心円、これは人間の顔ですが、どういうものに一番関心を示すかということ、人の顔に注意を向けるわけです。それは赤ちゃんが何を一番長く見つめていたかになります。これは、赤ちゃんのこのようなものをどのように調べるかというのは勉強されたと思います。preferential looking method という、どっちを多く見ていたか。赤ちゃんはものを申してくれませんかから、僕はこっちを見ていた、私はあっちを見ていたとは言ってくれません。PL法という、どちらをより多く見ていたかというようなところから、そういうことが分かってきています。そして、情報量は非常に大きく、人間の顔は情報論的に言い、ほかの単なる無地の色に比べて大きいわけです。そういう方面に関心を示していることが分かってきています。

さて、実は先週小久保先生とお話しいたしました。私が『おかあさんといっしょ』をやっていたこと。歴代『おかあさんといっしょ』はこんなものがあつたとか、それから『ブーフーウー』など古い、私の知らない『ブーフーウー』などを見ていただいていた話を伺いました。実はその『おかあさんといっしょ』には出ていなかった、『ピコピコアニメーション』

』というのをこれから見ていただきます。これを絶賛した人がいます。この下に書いてある、ジェローム・ブルーナーです。この方は世界的に有名な教育心理学者です。この教育心理学者がNHKのスタジオに来たときに、このアニメーションを「これは素晴らしい」と絶賛したのです。なぜ素晴らしいのか、そこのところを実際に映像と音を見ていただきたいと思います。

<いきます。大丈夫でしょうか。よろしいでしょうか。>

では、その『ピコピコアニメーション』見ていただきます。

今のアニメーションをどうして有名なジェローム・ブルーナーが絶賛したのでしょうか。どうしてでしょうか。ちょっと時間が押していますので、本当は答えてもらいたいのですが。

赤ちゃんの好奇心と情報ということで、ジェローム・ブルーナーはこのようなことを言いました。『ピコピコアニメーション』の持つ意味です。赤ちゃんは生後間もない時期から三角形の角などの関心を持つということ、赤ちゃんというのは生まれて間もないときから一つの角張ったところとか、何か違った一つの色、角度など、そういったものに関心を示します。今で言うと『いないいないばあ!』をご覧になった学生の方がいらっしゃるかどうかわかりませんが、最近トマトちゃんというトマトのキャラクターが出てきます。これは何をやっているかということ、東京大学の開先生という方が、赤ちゃんは数字に対する関心を既に持っているということで、トマトを使い、トマトが1個、トマトが2個と。一つの段ボールに1個入って、もう一つ入って二つと。ところがその段ボールを開けてみたら1個しかなかったということ、赤ちゃんが不思議な顔をするのです。というようなところから、開先生は、赤ちゃんはもう数的な関心を持っていると言っています。それを去る30年前に、ジェローム・ブルーナーはこういうことを言いました。「三角形の角などに関心を持つと。ピコピコアニメはその意味でとても素晴らしい環境を与えている」ということで、色、形、そのときの音、こういったものが絶妙に組み合わせられていると。実はこの一つ前に、本当はジェローム・ブルーナーのインタビューもあるのですが、これは時間がないので飛ばします。

ということで、赤ちゃんは既に生まれたときからインフォメーション・シーカーだという話をして、

その赤ちゃんが、もう既にいろいろなことに興味を持ち始めています。そういう中に、今『ピコピコアニメーション』みたいなものが、そういう刺激をすごくそそるとい話をしました。ではそういうインフォメーション、情報というものをどういうふうに分けたらいいでしょうか。というと、一つは理性の情報、ロジカルインフォメーション。そしてもう一つは、感性の情報、センシティブインフォメーション、こういう分け方が一つはできます。理性の情報と言うと、やはりそうですが、皆さま方も大学とかこういうところに来ると感性の情報だけで勉強はできないことはご存じのとおりです。脳科学的に言うと、前頭前野を使い、そして理性的に物事を論理的に判断していくことが大切です。それと共に、人間にはもう一つ感性の情報というものがあります。感性の情報というのは、赤ちゃんの時代から感覚系はもうしっかり動いています。このように二つに分けることができます。

そこで感性の情報とは、ここに1枚の写真を用意しました。この写真を見ていただくと、この2人の子どもは何か眼鏡を掛けて非常に楽しそうに何かを見ています。こう見ていると、子どもたちがすごく楽しそうに何かを見ているという、そういう子どもたちがうれしそうだと、いうところが皆さん方に伝わります。しかし、この子どもの腕は石こうに入っています。どうも手をけがしているようだ。実は、この2人の子どもは小児病院に長く入院せざるを得なくて入院中の子どもです。小児がんに冒された2人の子どもです。実はその子どもが何かを見ています。何かを見ているのは『動物園に行こう』という視聴覚コンテンツ、インタラクティブな視聴覚コンテンツを見ています。この子どもたちは、どこか病院から別のところに行って、いろいろなところで動物を見たり、ほかのことをしたり、いろいろなことをやりたいと思っているわけです。ところが病院からは出られない。そして、その中で痛い治療なども受けなくてもならない。そういう中でも、新しい視聴覚メディアによる『動物園に行こう』というもので、子どもたちが自分たちで行きたい動物園へ行けます。例えばパンダならパンダに会いたいと言うと、パンダが住んでいる仮想のパンダのいる場所、ゾウのいる場所、そういったところに行くことができるソフトです。そういった意味で、視聴覚メディアというのは、そういう子どもたちの感性に訴えます。こういうものが一つの特徴だと覚えてほしいのです。で

すから、皆さん方が小さい子どもたちを相手にするときに、なかなか言葉では言っても分からないというときに、絵本を使ったり、いろいろなことをすると思います。その中の一つとして視聴覚というメディア、子どもにとってメディアは大変目を丸くするほど面白い出来事であることをぜひ覚えておいて、そしてそれをうまく教育の中に活用していただきたいと思っています。

インフォメーション・シーカーから始めました人間、赤ちゃん。その赤ちゃんがいったいどういう者で、赤ちゃんはどのような存在で、どのようなふうに見られてきていたのか。その辺あたりを今度は事例2で紹介してみたいと思います。

先週は子ども向けのコンテンツを見ていただいたということで、今回は赤ちゃん向けではなく、赤ちゃんとはどのような存在かということ、ビデオを見ながら考えてみたいと思います。

#### ■映像音声

**NHK 鈴木健二アナウンサー（以下鈴木アナ）：**よろこそおいでくださいました。ありがとうございます、ありがとうございます。最初にお母さんをお願いがあるのですが、思い出していただきたいのです。初めて赤ちゃんにご対面になったのは生まれてから何分あととか、何時間あととか、あるいは何日あととかいうのがありますが、それをぜひ思い出していただきたいのです。

はい、こちらの赤ちゃんは何カ月ですか。

**スタジオ参加者（以下スタジオ）：**1カ月半。

**鈴木アナ：**一月半。何分ぐらいしてから赤ちゃん初めて会いましたか。

**スタジオ：**出産後10分ぐらいです。きれいにしてから連れて来てくれました、脇に。

**鈴木アナ：**そうですか。はい、そちらの赤ちゃんは。

**スタジオ：**産んで10分ぐらいして、それできれいに洗っていただいて、ええ、見せていただきました。

**鈴木アナ：**そうですか。どんな感じでしたか。



**スタジオ：**最初くちやくちやで驚いて、でもすごい感動的でした。

**鈴木アナ：**そうですか。こちらの赤ちゃんはもう首が据わったのですね。生まれてからどれくらい経ってから初めて会いましたか。

**スタジオ：**出産後15分ぐらいで、もうきれいになってから会いました。

**鈴木アナ：**そうですか。

それでは、その今、10分、あるいは15分とおっしゃいましたが、その間ちょっと体を洗ったりして赤ちゃんとお母さんが離れています。もし生まれてすぐお母さんと赤ちゃんがご対面したならば、そのとき赤ちゃんはどのような反応を示すでしょうか。まずこれをご覧ください。

赤ちゃんがもうすぐ生まれます。はい、生まれました。すぐにお母さんとご対面になります。産声です。

(一色先生：はい、先ほど見ていただいた写真はこの赤ちゃんです。)

今赤ちゃんが左目を開けて、お母さんを見ようとしました。赤ちゃんというのは、ただかわいいだけ、そして何にもできないから親のほうで何かをしてあげなければいけない、そう考えてしまいます。ところが、この赤ちゃんが目を開け、何かを見ようと思った、赤ちゃんはそういう意思を持っている人間なのです。そういうふうにとらえたら、赤ちゃんというのは全く違う人間になってしまうわけです。もし、赤ちゃんが、あの片目をこうやろうとした意思を、言ってみればうまく利用して、お母さんとすぐご対面をさせたらいったいどういうことになるでしょうか。今、この画面でこの赤ちゃんを取り上げられた先生も初めは半信半疑だったそうです。けれどもあややってすぐにお母さんと会わせました。さあ、あの続きをもう少し見ていただきたいんです。

赤ちゃんは、もうお母さんのおっぱいを咥えています。誰が教えたわけでもないのですが、もう一生懸命くわえています。ああやって赤ちゃんは、自分でもう何かをしようと思うのです。さて、そうしたらこちらの赤ちゃんはどうしましたか。

お母さんの顔をこうやって追うようになり、見るようになったのはいつごろですか。

**スタジオ：**だいたい最初のときから、2日目ぐらいから

です。

**鈴木アナ：**2日目ぐらいから。

今、もうお父さんのことは分かりますでしょう。お父さんのことを分かるようになったのは、いつごろからですか。

**スタジオ：**3カ月ぐらいからじゃないかなと。

**鈴木アナ：**3カ月ぐらいから。さあ今、伺いましたように、赤ちゃんというのは、何かを自分ではできないような感じがします。けれどもこれからこのビデオをご覧ください。赤ちゃんというのは、実は素晴らしい能力を持っているのです。この赤ちゃんは、生まれて1日目で、生まれたその日の赤ちゃんです。両手で支えます。そして前へ出します。あの足を見てください。赤ちゃんは、ちゃんと歩く形をします。生まれてその日の赤ちゃんです。足の格好を見てください。

今度は赤ちゃんを掴ませます、そして持ち上げます、どうでしょうか。つまり赤ちゃんは、左手1本で自分の体重を支えて、そしてずっと上がることができるのです。

今お父さん、あのビデオを見てどんな感じですか。

**スタジオ：**驚きました、本当に。

**鈴木アナ：**はい。ああいう力がこの赤ちゃんは持って生まれてきたのです。お母さんは今のような力を赤ちゃんは持っているとは分かっていましたか。

**スタジオ：**いいえ。

**鈴木アナ：**はい。この赤ちゃんはもう首はすわっていますか。はい、いつごろからですか。

**スタジオ：**2～3カ月ぐらいから。

**鈴木アナ：**2～3カ月ぐらい。赤ちゃんは、ああいう力が赤ちゃんにはあったのです。お父さん。

**スタジオ：**今初めて知りました。

**鈴木アナ：**ああやって考えると、赤ちゃんについて分からないことがたくさんあるみたいです。

スタジオ：分からないことだらけですね。

鈴木アナ：そういうことです。

ナレーション：ここ数年世界各地の産科・小児科、そして心理学の先生たちが赤ちゃんに熱い視線を注ぎ始め、さまざまな研究を試みています。こうした中で、生まれて1週間も経っていない赤ちゃんに見る、聞く、味わうという感覚能力が既にあることが実証されてきました。

ここ、アメリカのボストンでは、ハーバード大学のブラゼルトン博士が中心となって研究が進められています。

この赤ちゃんは生後2日目で、赤いボールを一生懸命に目で追っています。また、音が聞こえてくる方向に首を傾けることもできます。ブラゼルトン博士の研究によって、赤ちゃんは、生まれた直後から大変積極的に目や耳を傾かしていることが明らかになりました。

山内先生：そしてお母さんに抱かれ、お母さんと初めてそこで親子の出会いとなるわけです。その初対面のときのまなざしを見てみると、非常に、われわれは特に感動するのです。もう子どもは目の前にある、何か黒いピカピカ光る丸いものが自分の目と同じような方向に動いていきます。子どもはつけいれられるように視線を向けてきます。そして、しかも大変うまいことに赤ちゃんが抱かれていて、この距離というのがちょうど子どもの明視の距離というか一番はっきりピントが合うところなんです。それ以外のところはあまりピントが合っていないのです。ですからほかのものは見なくていいわけです。要するにお母さんのまなざしで、こういうふうに目が合うのです。こうなると駄目なわけです。

#### ■映像音声

鈴木アナ：そうです、つい最近ではないかと思えます。そちらの……指をしゃぶっています。お母さん、何で指をしゃぶるのですか。

スタジオ：やっぱり寂しいのじゃないのでしょうか。

鈴木アナ：寂しい、そうですか。お父さん、この赤ちゃんはどうしてこういう指をしゃぶることを覚えた

と思いますか。

スタジオ：さあ、一番手近なところだからじゃないですか、指が。

鈴木アナ：身近な、手近な。そうすると、生まれてから1人有的时候きに、手近にあったから指をしゃぶり始めたということですね。

スタジオ：そうですね。

鈴木アナ：それは今伺ったお話が常識だろうと思えます。この指をしゃぶるのが寂しいだろうとか、生まれてから手近なものをしゃぶったのが常識だろうと思うわけです。ところが最近、おなかの中にいる赤ちゃんの様子がだんだんと分かってきました。おなかの中にいるときに赤ちゃんがどんな生活をしているか。それをこれからご覧いただきたいと思えます。

ナレーション：これは子宮の中に入れた特殊なカメラ、フェトスコップで撮られた映像です。受精して1カ月もすると胎児の頭と胴体の見分けがつくようになります。既に水かきの形をした手もあります。受精から6週間、胎児は大人の親指のツメぐらいに成長しています。視神経もある程度でき上がり、目の中には既にレンズが見られます。心臓の鼓動は日に日に力強くなります。受精してからわずか10週間でこの新しい生命はもうすっかり人間らしい姿になります。このころまでに胎児は外観だけでなく、神経系や循環系、それに視角、聴覚、味覚といった外からの刺激を受け取る探索機能もかなりでき上がってきています。

このように胎児は、私たちが想像している以上に急速に成長し、母親が妊娠に気付くころには人間としての非常に重要で、かつ驚くべき成長を既に遂げているのです。

鈴木アナ：私は一つのテープを用意しました。実は、このテープの中に入っている音は、これはお母さんの子宮の中にマイクロフォンを入れ、そして取った音です。サーッという音がします。これがお母さんの血管の中を血が流れている音です。そしてもう一つ、パリッパリッと音がしますが、これはマイクロフォンの音で、少しこすれる音がします。その音の向こうに、なおかつお母さんと先生がお話している

音がきちんと入っています。「男の子がいいですか、女の子がいいですか」。そういう音がきちんと入っています。それをぜひ聞いてください。

**一色先生：**ということで、このNHK特集では、赤ちゃんは無力の存在と思われていましたが、実は素晴らしい能力を持っているのです。赤ちゃんはもう既に体内にいるときから実はもう、おなかに光を当てると赤ちゃんはその明るいところに寄ってくるとか、音に反応するとか、そういうような科学的なデータもあります。

それからこの番組では、生まれた直後から実際に見ること、音を聞くこと、そして母親のにおいをかぐこと、それから甘い水、味覚なども実は感覚能力として、もう生まれた直後から持っています。そういうものを総合して、いろいろな情報を集めていることを皆さん方に知っていただきたいと思い、この番組を少し見ていただいたわけです。そして実はこの番組の最後の方で、非常に重要なことを言っています。それは、未熟児で生まれた赤ちゃんが、アメリカでは大きくなったときに幼児虐待を受けるケースが結構あるということが、アメリカの社会で問題になりました。それはどうしてかということ、実は未熟児で生まれると、やはり感染症とか、そういうことのためにインキュベーターという、通称カプセルと言いますが、その中に赤ちゃんを入れて、その中で医者が治療をしていく格好になります。ところがそうなってくると、先ほどから言っている、生まれたときからいろいろな情報を追い求める赤ちゃんにとっては、何の情報もなく、特にその中で母親、父親とのインストラクション、そういった社会的なコミュニケーションも全く得られなくなってしまうわけです。そういう中で、だんだん子どもが育っていったときに、親も子どもに愛情が持てないし、子ども親に愛着や愛情が持てないという結果が起きます。それで幼児虐待が増えるのではないかということ、クラウドとケネルという2人のアメリカの学者が言いました。そういうあたりを後半では出していますが、そのところは割愛しました。

そして、そういうことを避けるために、未熟児の子どもでも感染はしないようにして、親子がコミュニケーションを持てるような格好になりました。それから、今の番組で言った、赤ちゃんが生まれてすぐに親子の対面は、そういう意味からも実は大切なわけです。そして、日本でも今や生まれた直後から

親子の対面などをきちんとやる病院も増えてきました。というような時代になっていますので、皆さん方がこれから子どもさんを持たれる方もいらっしゃると思いますが、そういう素晴らしい出会いから、豊かなコミュニケーションをしながら育てていくことができる時代になってきていると思います。

視聴覚メディアが子どもの問題をどういうふうにとらえたらいいかという点から言うと、今見ていただいたように、生まれた直後はお乳に吸い付いたり、ステップングリフレクションという原始歩行、それから自分の体重を全部自分の片手で支えるようなことができます。そういった面や、感覚器官も出生直後からあります。体内でも指しゃぶりやあくびなどをしているということも、今でははっきり分かっています。そういう子どもとして赤ちゃんがいるということが視聴覚メディアではっきりわかるということになるのです。

先ほども言いましたが、生まれた直後のお母さんを見詰める赤ちゃんというのがありましたが、昔の小児科の先生になるための小児科学という体系には、実は生まれた直後の赤ちゃんは目も見えないし、音も聞こえないということがきちんと書いてありました。昔と言っても、ちょうど皆さまが生まれる前ぐらいまでです。それは小児科学の教科書にも出ていました。最近では、テレビなどでもこういうような情報もいろいろな格好で出てくるので、皆さん方もよくご存じの部分もあると思います。これは指しゃぶりをしているところです。これは何をしているのでしょうか。これも指しゃぶりか、目をこすっているかです。これは三次元の超音波スキャナーで、超音波でよく診断などにも使います。こんなにリアルに超音波で胎児の様子が見えるという時代になってきています。

今お見せした映像コンテンツが社会に与えた影響に関して言うと、やはり出生直後からもうそれなりの能力を持った人間だと。そのところで出会うということが大切です。実は、出生直後は目覚めているのです。最初は子宮の暗い中からスーッと産道を通してポツと出てくるのでまぶしいのです。まぶしそうにしています。もう世界各地でそういう出産シーンを見てきました。本当に赤ちゃんはまぶしそうにしています。でも本当に5分ぐらい経つてくると、そのまぶしさにも慣れて周りをキョロキョロ見回すのです。そのときに、出会う親と子の対面、それは本当に素晴らしいものです。そういった出会いが人

生の一番のスタート地点にあるということ、ぜひ皆さん方も知っておいていただきたいと思います。特にこれから幼稚園、保育所など専門家として子どもたちを相手にする。子供たちは、そういうところに通ってだんだん、だんだんいろいろな意味で、少しずつ大きくなってきています。先ほどもピコピコアニメーションを見ていただきましたが、特に小さい子どもは、視聴覚メディアで送られてくる情報は大好きです。そういった子どもたちが目を丸くするような、そういう環境をぜひお母さん、お父さん、そして子どもを集団で預かる保育所、幼稚園では、感覚から始まるいろいろな素晴らしい環境、そういったものをぜひたくさんつくっていただきたいと思います。出生直後の親子の触れ合いが一番の原点にあるわけです。

そして、先ほど少し話をした幼児虐待です。幼児虐待というのも、やはり一番最初の、そういううまくいきかけがつくられなかったことから起こってくる部分も非常に多くあることも知っておいていただきたいと思います。そしてアメリカの産院、そして今日の日本の産院も大きく変わってきました。

そして、このコンテンツを子どもとメディアという視点からメッセージは何かで言うと、赤ちゃんはとても不思議な存在です。非常に無力で何もないとされていますが、何か素晴らしい能力を持っています。こういうことで、非常に不思議な存在です。知られざる赤ちゃんの能力、そういったものが本当にたくさんあります。今でも脳科学的に見ても、いつどういう脳の機能を使って人間たらしめる一番のものは何でしょうか。コミュニケーションはほかの動物も取れますが、言葉は人間しか持ち得ない能力です。小久保先生は国語の先生です。一番抽象化概念の高いものが言葉で、これは人間しか持ち得ない能力です。そういう一番の原点というものが、この赤ちゃんのときからの環境の中で生まれてくるということ、ぜひ知っていただきたいと思います。そして、そういうものを親子のコミュニケーションというものから言葉が生まれてくるわけです。では、コミュニケーションがうまくいかなかったらどうなるかです。2分半ぐらいの映像をもう一つ見ていただきたいと思います。

#### ■映像音声

鈴木アナ：お母さんと赤ちゃんです。

お母さんが、機嫌がよければ赤ちゃんもいいです。今度はお母さんが全く無表情で、むしろ怒ったような顔をして横に立っててもらいます。さあそうすると赤ちゃんはどうでしょうか。

鈴木アナ：はい、赤ちゃんは泣きだします。お母さんにもう一度笑顔に戻ってもらわないといけないようです。そしてお母さんにもう一度笑顔に戻ってもらいます。そうするとどうでしょうか。赤ちゃんもころっと変わるのです。

一色先生：ということです。やはり、この映像の中に、人間の素晴らしさが出ています。そして大人と子ども、親と子の、そしてお父さんと子どもの、そういう人間関係がすごく大切です。そういう社会的なインタラクションの中で、子どもは育っていくというのが一目瞭然だという映像を最後に見ていただきました。

そういうことで、見ていただいたコンテンツの最後は、赤ちゃんも一人の立派な人間であることが全体に分かってもらいたかったというので、この番組は終わっています。

結論になりましたが、赤ちゃんとは私たちが考えている以上に人間なのだというのが一つです。そして人間関係の出発点がおやと子のきずなです。また赤ちゃんの、その母と子のきずなということは、具体的に言うと、赤ちゃんのお母さんに対する愛着、そしてお母さんの赤ちゃんに対する愛情です。これはお母さんだけではなく、今の映像がお母さんでしたのでお母さんと言いましたが、お父さんでも同じことが言えます。赤ちゃんのお父さんに対する愛着、お父さんの赤ちゃんに対する愛情、こういったものがあります。

というのは、この番組でもお母さんだけが子育てだということは、絶対そういうメッセージにしたいありませんでした。ですから、スタジオを見ていただきましたが、実はスタジオには28組の生後4カ月から5カ月の赤ちゃんに来てもらいました。そのときに、お母さんだけではなく、お母さん、お父さん、そして赤ちゃん、3人でお願いしました。やはり、これからの時代はお父さんもお母さんも、そして地域も保育園も、そして幼稚園も、みんなで赤ちゃんなり子どもを育てていかなければならない時代だと私は思っているからです。そして、ほかの人間関係のためにも非常に本質的なものとして、こういった

赤ちゃんの親に対する愛着。それからお母さんの赤ちゃんに対する愛情があります。こういったものが、ほかの人間関係をつくっていくためには本質的に重要です。人間の一番ベースとして、人間とは、裏切られないものであり、人生とは愛されるものなのです。記憶には残らないかもしれませんが、それを体験することが一番重要です。赤ちゃんはそれを体験する能力を持っています。赤ちゃんだから何を言っても分からないだろうとか、どんなに愛情を注いでも分からないだろうというようなことではなく、やはり一番人間として生きていく、その一番の原点も、その愛情なり、その人間関係の中から築かれていると考えているからです。

ここのところが重要で、小児科の先生たちは、私がこの番組をつくったときは、実はそういったことを考えていなかったのです。そして現に、このスタジオにおいてになって言っていた小林先生が、私たち小児科医も反省していますと。実はそここのところもお見せしようと思ったのですが、時間がないのでやめました。私たち小児科医も反省していると。赤ちゃんにかかわる人は十分理解してほしいのです。これは皆さん、赤ちゃんのテーマで言っていますが、子どもにかかわる人ということに置き換えて、ぜひこの講演が終わったあとは置き換えて考えてみてほしいです。赤ちゃんにかかわる人は十分に理解してほしいです。赤ちゃんは何かをしようとする、意思を持っている素晴らしい人間なのです。

そしてこういったようなことを、この映像メディア、コンテンツで訴えることができます。最初に、私のメインの領域が子どもメディア学だとしてご紹介をいただきましたが、視聴覚メディアは感情を揺さぶりつつ、メッセージを伝えることができます。今日、ちゃんと皆さん方に、その感情を揺さぶりつつメッセージを伝えることができているならば、私にとっては大変幸せなことだと思います。

事例1としては、生まれた赤ちゃんでも、色彩、形状、動きなどの基本的な視覚情報に強い関心を示します。ということで、『ピコピコアニメーション』を見ていただきました。事例2としては、視聴覚メディアは見る人の感情を揺さぶりつつ、メッセージを伝達することができるので、NKH特集の一部分を見ていただきました。子どもの健全な成長発達のために、メディアを効果的に使う意味がここにあるのではないかと思います。

よくテレビとかを小さい子どもには見せるのをや

めましょうという、2003年に出た、日本小児科学会、日本小児科医会の勧告があります。確かに悪い面もあります。メディアというのは一つのツールです。そのツールにいかによい面を載せてやっていくかです。それはそのメディアを通して、制作する側の責任もあります。ただし、見る側の人たちもそういった視点で、ぜひメディアを厳しく温かく見詰め、子どもたちにとってはすごく目を丸くするメディア、そういったものをよい面で活用していただきたいと思います。というところまでが、子どもとメディア、子どもはみんなインフォメーション・シーカーという、お話です。

最後になりましたが、実は日本子ども学会が6年前にできました。その子ども学会として、やはり子ども学というような学問をいろいろな短期大学、4年生大学、そういったところで学生たちに学んでほしいと思っています。2010年の9月には、お茶の水女子大学で学術集會が開かれます。正式に組織としてもしっかりとした学会になりました。この学会は学生の方々、そして一般に子どもに関心を持っているの方々、そして研究者、保育士、幼稚園教員、そういったいろいろな方々が子どもたちの健やかな育ちのための環境をみんなで考えていくところです。学問的にも臨床的な問題でも、それから子どもの問題で言えば、今でも遊び場で事故が起こるとか、いろいろなことがあります。そういった問題から、子どもが豊かに育つためにはどうしたらいいのだろうか。そういったことを地域の人たち、そして日本社会の中で全体にいろいろなことで考えていきたいというので、子ども学会というものがあります。今日ここに参加していらっしゃる方々は、その子ども学というものを学びつつ、これから子どもとさまざまな意味で、いろいろな子どもたちを指導していく立場になっていかれる方だと思います。そういう意味で、子ども学というもの、子ども学会というところで、また大学とは違うこういったものにも参加していただいて、多角的に子どもの問題をいろいろな意味で考え、経験し、子ども問題を解決していただきたいと思います。

もう一つ、最後にこのようなパワーポイントをつくってみました。やはり今日のメッセージの中にも入っていましたが、育つ、育てる、子どもが育つ、子どもを育てる、これは本当にグルグル、グルグル回るものなのです。どっちがどっちを教えるとか、そういうことではないわけです。親や保育士、教師、

そういった育てる人たちも、子どもから学ぶことがたくさんあります。子どもが育つためには、やはり育てられるそういう親とか保育士、教師、そういった人たちとのコミュニケーションというものが重要です。こういう部分をやはり地域でも、ぜひこれからはつくっていかねばいけなくて私自身は思っています。これは一つの学校とか、一つの保育園とかではなく、地域社会にとっての世代交代みたいなものを潤滑に豊かにしていくことが必要だと思っています。

最後に、子ども学会というようなものを一つの核として、地域で豊かな子どもの育ちというものを一人一人がつくっていただきたく思います。そのための、今日は一つの情報として役立つことができているれば大変幸いだと思います。そういうことで、今日の私の講演は終わらせていただきます。ご清聴、どうもありがとうございました。

**所長：**ありがとうございました。一色先生はNHKご在職中に、NHK放送文化研究所の放送研究部長をされていらっしゃいました。そこで“子どもに良い放送”プロジェクトを立ち上げられました。ですから今日は、その一色先生ならではのお話を伺うことができ、大変うれしく存じております。私も一人の親として大いに反省させられながら拝聴いたしました。

それではここで、本学の学生代表よりお礼の言葉を述べさせていただきます。

**学生代表：**本日はお忙しい中、本学にお越しくくださりありがとうございました。私は3年間保育に携わる仕事をして、たくさんの赤ちゃんと接してきました。今日、新たな赤ちゃんの存在や、赤ちゃんの世界を知ることができ、とても感動しました。その中でも特に私に関心を寄せたのは2点あります。

一つ目は、メディアは子どもの人生に効果的な役割を果たすことができるということです。二つ目は、赤ちゃんは出生直後から目覚めていて、生まれながらにして見る、聞く、味わう能力を持っていて、赤ちゃんにとって出生直後の親子の触れ合いや、コミュニケーションがとても重要であるということです。これを知り、子どもにとってもっとも重要な乳幼児期を一緒に過ごす保育者の存在は大きく、子どもの発達に大きく影響を与える責任のある仕事だと思いました。

今日教えていただいたことを今後の学習につなげ、子どもについての理解をさらに深め、将来自信を持って子どもと向き合うことのできる質の高い保育者を目指したいと思います。

本日は本当にありがとうございました。

**所長：**では最後に、本学を代表いたしまして、教務部長より、また謝辞を述べさせていただきます。

**教務部長：**本日は大変ご多用の中を本学にお越しいただいた上、貴重なご講演をいただきましたことに深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

謝辞を述べる前に、まずもってAV機器の不具合がございましたことを心よりお詫び申し上げます。

さて、本日のお話は映像を交えながら、大変分かりやすく、しかも丁寧に説明いただきました。学生にとりましても、また地域の方々、そして教員にとりましても大変有意義なお話の内容だったと思います。赤ちゃんの場面ではまさに、素晴らしい命、限らない可能性、そういったものをたくさん感じました。一貫して流れていたものは、子どもがより豊かに育つ、生きるということではなかったかと思えます。私自身、拝聴しておりまして、20世紀の児童中心主義の高揚期を思い起こしました。

本日の内容は、学生にとっては子どものとらえ方を、そして地域の方々には地域の子どものというテーマを、そして教員にとりましては今後の研究の方向性等についてご示唆いただいたように思います。先生には今後ともまた多くの場面でご指導ご鞭撻をお願いすることも多々あろうかと思いますが、その節はどうぞ宜しくお願い申し上げます。

以上、はなはだ簡単措辞ではございますが、お礼の言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

**所長：**一色先生は、あした水曜日、1限の授業がおありになるとことで、これから神戸に帰られます。いま一度本当に遠路お越しいただきましたことを、そしてたぶん神戸は夜雨になるかもしれないと朝天気予報で聞いております。大変だと思うのですが、たぶん11時ぐらいを回ってしまうかと思いますが、いま一度大きな拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。

## 第2回

「21世紀のこども観 ―赤ちゃん学の立場から―」

(2010年6月30日)

小西行郎先生

日本赤ちゃん学会 理事長  
同志社大学赤ちゃん学研究センター 教授  
小児科医

## 第2回「21世紀の子ども観—赤ちゃん学の立場から—」

### 1. 日本赤ちゃん学会とは

小西先生：はじめに、2人の新生児の赤ちゃんの動きを見ていただきます。どちらかが障害をもった赤ちゃんです。どちらが障害をもった赤ちゃんか考えながら見てください。これが1番目の赤ちゃんの動きです。(一人目の赤ちゃんの動きを映した映像を見せる。)次に、2番目の赤ちゃんの動きです。(二人目の赤ちゃんの動きを映した映像を見せる。)どちらが、障害をもった赤ちゃんが解りましたか？この運動はジェネラル・ムーブメントと呼ばれる運動で、この運動の評価で脳の障害がかなり判定できると言われているのです。この運動の意味などについては後に詳しく述べますが、この運動のことは小児医学でも心理学でもあまり取り上げられていないのです。

われわれが今、赤ちゃん学会をつくった理由は何かということ、もう既存の心理とか医学だけでは赤ちゃんの心や行動の発達のメカニズムを解明するのは無理なわけで、赤ちゃん学会というのをつくる必要があると思いました。物理も数学もロボットの先生も集まって、異分野の研究の中で赤ちゃんというものを解明していきたいと思いました。ですから、赤ちゃん学会というの、医学ではありません。心理学が中心でもありません。どちらかということ、ロボットや物理の先生とか、数学の先生のほうに私は重要性を感じています。全く違った赤ちゃん観ができてくる可能性がそれらの分野にあるからです。そういったことで、関係するいろいろな先生方が集まってやり始めた研究会が日本赤ちゃん学会ということになります。

### 2. 胎児について

妊娠14週の赤ちゃん、胎児です。妊娠4カ月ですが全長8センチ、体重45グラム、もう既にこういう格好でこういう形になっています。

一応、子どもを産んだ方が何人かおられるようなので、ご経験をお伺いします。おなかにいる赤ちゃんはいつごろから動きましたか。

5カ月？ 4カ月？

会場：5カ月ぐらい。

小西先生：5カ月。遅い人で5カ月。だいたい普通は4カ月です。ところが超音波で赤ちゃんの動きが分かるのは、だいたい7週で、その頃の身長は約1センチです。胎児だって動物ですから卵の段階から当然動いています。ただ体全身の動きが見られるのは、実は7週からになります。では7週から運動が生まれることの不思議さ、というか疑問を感じませんか。

どうしておなかにいる赤ちゃんは、7週から動くのか。どのように動くのか、という二つの疑問があります。動く理由と動けるメカニズムです。理由は動物だからと言ってしまえばおしまいです。何でも動物だから動きますという説明は成り立ちません。動くメカニズムの面白さでいえば、7週するときには身長1センチですから、脳はほとんどできていません。脳がなくても人は動くかもしれないということです。実は大人でもそうなのです。当たり前ですが、脳を使わなくても動きます。今、脳科学、脳科学と言って、脳がすべての手足を動かすような言い方しますが、別に脳でなくても、小脳とか脊椎とかでも手足を動かしますから別にいいんです。面白いのは、7週ぐらいの赤ちゃんがどうして動くのか、その理由です。7週ぐらいには、最初に胎児の中で脳がつくられます。実は赤ちゃんが面白いのは、その頃には10週ぐらいかもしれませんが、胎児に触覚が生まれてくるらしいのです。人間の感覚の中でもっとも早く人間に宿る感覚は何かということ、触覚です。では、体のどこの部分に一番先に触覚が生まれてくると思いますか。分かりますか。お母さんに言われたことがありますか。おしゃべりな女の子はだいたい今までに1回は、「あなたは口から生まれた」と言われていませんか。そうです、一番最初に口の周りの触覚が生まれてくるのです。その次に生まれてくる場所は、指先です。言いたいことが分かりますか。つまり、口の周りと言指の先に早く触覚が生まれてくるから指しゃぶりが始まるのです。何のためにですか。おなかの中の赤ちゃんは何で指をしゃぶるんですか。おなかが減ったからですか。栄養はお母さんからいただいていますから、おなかは減りません。なのに、どうして指しゃぶりをするのでしょうか。だいたい10週ぐらいの赤ちゃんが指しゃぶりをします。その理由は何ですか。空腹になったからではありません。



これは推測になりますが、発達心理、あるいは心理学、医学のある一部の先生方の中では、この指しゃぶりというのは、自己の身体認知ではないかと言われているのです。要するに自分を知ることです。自分の体を知るために指しゃぶりが存在するということになります。指をしゃぶることによって、これは自分の指だよ、ということを経験します。そのあと起こることは何かというと、その手を使って体中を触ります。おなかにいる間、ずっと体中を触って赤ちゃんが生まれてくるから赤ちゃんは生まれたときから自分の体を認知しているということなのです。

では質問を変えます。なぜ、赤ちゃんがおなかにいるときにあくびをするのか。赤ちゃんがおなかにいるときに、あくびをする理由です。今みたいに、この講義が面白くないというのと、おなかにいる赤ちゃんは違います。おなかの中では退屈はしません。あくびをする理由です。

**会場：**呼吸の練習。

**小西先生：**そうです、呼吸の練習です。肺を広げています。あくびをしないと子宮の外へ出たときに生きてこられないのです。ですから、十分にあくびをした赤ちゃんだけが生きてこられるのです。しゃっくりも一緒です。おなかの中でしゃっくりをする理由は、横隔膜を鍛えるためです。ですから、生まれて1カ月ぐらいの赤ちゃんは、しょっちゅうしゃっくりをするんです。生まれてすぐの赤ちゃんがあくびをすると、お母さんは、何だこの子だと、緊張感がない子だなと。そんなことはありません。あくびをするのは、おなかの中のあくびが残っているだけです。要するに、おなかにいる赤ちゃんの運動の中には、子宮から出たあとでも生きていけるための準備運動が幾つかあります。あくびやしゃっくりは生まれてまもなく消失しますが、そうでない運動もあります。あともう一つは、おなかの中の赤ちゃんは目を動かします。それは、生まれたときに物をちゃんと、見るために目を動かす練習なのです。そして23週目には、においが分かるようになります。面白いのは視聴覚はあとになるということです。ここでもう一つ抜けているのは、味覚。この味覚はもう少し早いと言われています。舌の上に味蕾（みらい）という、味のツボミと書きますが、味蕾（みらい）というのがあります。味蕾（みらい）が一番増える時期はいつか知っていますか。人間の一生の中で密度

ですが、舌の上にある味の蕾が、もっとも多い年齢は1歳です。それからだんだん減っていきます。分かりますね、（味蕾）がなくなると未来がなくなるといいます。しゃれなんです。

実は、非常に不思議なことがあります。先週、九州のほうの産科を開業する先生からビデオを送っていただきました。この赤ちゃんは34週の赤ちゃんです。お母さんが揺れています。そうすると「何で揺らすの」みたいに、生意気にちょっとしかめっ面するんです。分かりますね、これが一つです。次に31週の赤ちゃんです。笑っていますね。今日は若い女性が多いと思うので、このビデオを見せるとたぶん受けるだろうと思いました。これはもっと面白いのです、20週です。20週の赤ちゃんです。Vサインしています。何が言いたいかというと、赤ちゃんというのは、おなかの中でいろいろな表情を持っているということです。そして何のためにこういう表情をすると思いますか。おなかの中で笑ったりしかめっ面をする理由です。

**会場：**楽しいから。

**小西先生：**楽しいわけがないでしょ、だって何を見て笑うというのですか。胎児が笑う理由は生まれたときにお母さんをだまぐらかす能力を持っているというか、笑う練習をしているといわれているのです。それは何のためかということ、赤ちゃんが笑うとお母さんが幸せな気分になるからです。赤ちゃんは、もともとお母さんの心をくすぐる能力を持って生まれてくるのです。ですから、しかめっ面するのも、実はしかめっ面をするとお母さんは嫌がると分かってやっているかもしれません。練習です。いろいろな表情はおなかの中にいるときに既につくられているわけです。泣いたりもしますし、笑ったりもします、しかめっ面もします。つまり赤ちゃんは感情がなくても、まず表情をつくることができるということなのです。

赤ちゃんはおなかの中でいろいろな表情をつくります。ですから、感情ができてきて表情をつくるのではなく、表情をつくる作業を先にしておきます。その表情と今度感情をマッチングさせればオーケーなのです。赤ちゃんそのものが、どうやらいろいろ準備をして生まれてくるらしい。赤ちゃんは忙しいので、胎教は邪魔なのでしないでください。赤ちゃんは自分で黙ってやっていますから、横から「私はお母さんよ」と言われても仕方がないのです。おな

かの中にいますので、私がお母さんと言われなくても胎児には分かっています。大事なことは何かというと、お母さんと胎児は一心同体ではないということなのです。なぜなら、これだけいろいろな練習をするので、お母さんの感情と胎児の感情は全く別です。お母さんが幸せかどうかなど、おなかの赤ちゃんは構っている暇がないのです。

実は、今までおなかにいる赤ちゃんとお母さんは一心同体だとよく言われていました。レオナルド・ダヴィンチもそう書いていますし、聖書にもそう書いてあります。いろいろな精神科の先生も盛んに言われています。お母さんが幸せだったら、赤ちゃんが幸せだと。しかしそれは本当でしょうか。脳がほとんど働いてないので、幸せかどうかは分かるわけがないのです。幸せという感覚は、おなかの中の赤ちゃんにはありません。赤ちゃんが不幸だと分かると思いませんか。何でおなかにいる赤ちゃんが不幸かというのも、それもよく分かりません。科学的な説明はありません。お母さんの感情が子どもに影響を与えるといわれているのはストレスだけです。それも非常に強いストレスで、期間が長く与えられるストレスは影響することが伝えられています。お母さんがポジティブで幸せだったら、赤ちゃんにいい影響を与えるという科学的なデータは全くありません。ですから、お母さんはそれほど幸せでなくても構わないわけです。どうぞ文句があるようでしたら何かデータをください。いろいろ探しているのですが、お母さんが幸せだったら赤ちゃんが幸せになったというデータはありません。普通の状態であればよいという話にもなります。夢のない講演だとよく言われますが、仕方ありません。

実は、最近、確かに表情の話は非常に興味があります。なぜ興味があるかというと、面白いことに気が付きました。生まれてすぐの自分の孫に、生まれて5日目に砂糖と胃薬とお酢を舌にちよつとずつ乗せたのです。そうすると、砂糖だとうれしそうな顔をしました。胃薬をあげるとさすがに苦そうな顔をしました。お酢をあげると酸っぱい顔をしました。これは信じますか。

会場：信じます。

小西先生：これは本に書いてあります。これを信じるということなので改めて聞きますが、なぜこんなことができるのか。なぜ初めて体験したお酢の味を舌の上に少し垂らしたときに、なぜ赤ちゃんは酸っぱ

い顔ができるのでしょうか。

会場：おなかの中でいろいろな表情がある。

小西先生：おなかの中で表情があるのはいいのですが、なぜ、酸っぱい顔ができるのか。これは誰からも教わっていません。酸っぱいものに乗せられたら酸っぱい顔をしなさいとか、お母さんは教えていません。ただできます。甘いものに乗せるとうれしそうな顔をする。苦いものだと苦い顔をする。確かにおなかの中でいろいろな表情をしているのと、表情というのは、持って生まれていることがたぶんそれで証明できるわけです。この赤ちゃんの表情というのは、お母さんが教えてつくるものではありません。ですから、私は面白いと思いました。

最初に申しましたように、まず触覚がある。そして赤ちゃんは指しゃぶりをする。そうすることで自分の手、指を認識して、その手を使って体中を認識して生まれてきます。自分の体を触るという行為は、触覚の中でも特異な行為です。触覚というのは2種類あります。触る感覚と触られる感覚です。ところが指しゃぶりというのは、触る側と触られる側が同時に起こる感覚です。どちらが触っているか触られているか非常に難しいにしても、自分の体を自分の手で触るというのは、人に触られる感覚でもありませんし、人を触る感覚とも違います。ダブルタッチという、自分の体を認知する感覚です。ですから、赤ちゃんは生まれてくる前に体中を触って生まれてこない自分の体が分からないのです。

ヒトの脳皮質に体性感覚野という部位があります。そこにはヒトの体の部位が埋めこまれていて、手や足などの体に何かが触れたとき何処に触れたかわかるようになっていきます。脳の中の小人・ホムンクルスといわれる図を見られたことがありますか？ 体性感覚野における体の部位を図示したのですが、それによると口や顔はやたらとでかく、手の感覚を担当する部分も圧倒的に広いのです。実はこの図ができるのに胎動が重要であると主張する方が少なくありません。つまり胎動と触覚の相互作用によって脳がつけられるといっても過言ではないかもしれません。ということは、おなかにいる赤ちゃんの動きがあるから脳ができるのではないか。それから脳ができるから胎動が変わってくるという話ではなく、胎動をすることによって脳がつけられるのではないか。まずは動くことによって脳がつけられているのではないか、という話が成り立つわけです。

これは東大のロボットの先生のシミュレーションをした中で、どうやらそうらしいということが分かりました。ですから、おなかにいる赤ちゃんが自分の体を動かすことは極めて重要で、とりわけ重要なのが触覚ということになります。触るとということが重要だということになります。

そうしたことを考えると、気になるのが何かというと、ベビーマッサージです。このごろもう下火になりましたが、赤ちゃんは誰も触ってほしいなどと言っていません。親子のきずなができるから触るといのは、大人の思い込みです。赤ちゃんは触られたくないかもしれないではありませんか。なぜかと言うと、自分で自分の体を触って、自分の脳の中に自分の体の位置を一生懸命書き込んでいるときに、外からいろいろ触られたら困るでしょう。実は面白いのは何かというと、触るという感覚は、触られる感覚とは違うということと、子どもにとっての一番重要な感覚は何かというと、触るということです。特に今、お母さん方の育児の中で非常に欠乏して、足りなくなっているのは赤ちゃんに色々なものを触らせるということです。お母さん方は、赤ちゃんに物を触らせなくなりました。あるいは、子どもたちは口の中には汚いから、危険だからというので物を入れなくなりました。しかし、赤ちゃんは口の中に物を入れないと物が分かりません。

例えば、5カ月ぐらいまでの赤ちゃんというのは、物が立体的に見えず、立体視ができません。例えば積み木が立方体であるということがどうして分かるかということ、口の中に入れることで積み木が立方体であることが認識できるのです。ですから、口の中に物を入れることは極めて重要なことなのです。赤ちゃんがいろいろな物を手で触るといことは、必ずやらせておかないと赤ちゃんにとってはよくないことです。

お母さん方がおられますからお伺いしますが、生後1カ月以内の赤ちゃんにお母さんのおっぱいを飲ませているときに、赤ちゃんがお母さんのおっぱいを触っていることを知っていますか。触られたことは覚えていますか。すごく不思議な現象なんです、母親は自分が触ったことは覚えているのです。ですが、赤ちゃんに触られたという感覚は年をとってくとすぐ忘れてしまいます。せっかく子どもが気遣っているのに、何ていうことでしょうか。生後1カ月ぐらいの赤ちゃんがお母さんのおっぱいを触るときに、触られたことのある方にお伺いしますが、赤ちゃんは手の甲で触りましたか、手のひらで触りまし

たか。必ずみんな手のひらと答えます。手の平で物は触ると思っているから手のひらで触る。それはあり得ないのです。なぜかというと、1カ月以内の赤ちゃんは把握反射がありますから、手のひらに物が触ったらグーになります。握り拳になります。お母さんにけんかを売っているみたいです。せっかくお母さんのおっぱいをあげているのに、お母さんのおっぱいをげんこつでやったら、このやろうみたいになります。ですから赤ちゃんは手の甲で触るのです。そうすると手は開くんです。手が開くと、赤ちゃんは力が抜けてリラックスするわけです。だから優しく手の甲でお母さんのおっぱいを触っているのです。まだ全然信用していないでしょ。産婦人科の人をお願いして、赤ちゃんがお母さんのおっぱいを飲んでいるときに、ちゃんと36人をビデオで撮ってやりました。32人が手の甲で触っていました。赤ちゃんが手の甲で触っているのを見たときに、赤ちゃんは優しいなと思いました。えらい気を遣って触っていると思いました。そのときにお母さんに質問をすると、お母さんは手のひらで触りましたと。なんとまあ、何が親子のきずなだ、という話になります。相手の言うことも分からず、相手の気遣いも分からず、自分のことばかり言っているお母さんが多いです。私はこんなにあなたを大事に育てたのよ、と言いながら手のひらで触っていたという人がいます。そして面白いのは何かというと、赤ちゃんがお母さんのおっぱいを触ると、お母さんが赤ちゃんを触ります。ほとんどのケースがそうです。私は、あまり愛着形成は好きではありませんが、親子の愛着形成は、実は赤ちゃんから仕掛けています。

例えば、マザーリーズとクーイングのやりとり、要するにお母さんはトーンの高い声でワワと話し掛けると赤ちゃんがしゃべり返すと思っているのは大きな間違いで、ほとんどのケースは赤ちゃんがしゃべってからお母さんが答えています。つまり、やりとりのほとんどは、赤ちゃんにさせられているのです。ということは、逆に赤ちゃんが言うまで何もなくていいということです。手抜きしましょうということです。分かりますか。先にお母さんのほうからやると赤ちゃんは困るので、赤ちゃんがやるまで待ってください、ということのほうが正解なのかもしれません。生後1カ月以内のお母さんと赤ちゃんの親子のやりとりで肝心なことは何かというと、何も考えないということです。要するに、赤ちゃんが泣けばおっぱいをただ単に出せばいいです。何で泣いたかと考える暇があったら、ポッと出せばいい

わけです。要するに同じことを繰り返されると赤ちゃんは安心感を覚えます。ですが、こういう言い方をすると若干疑問を持たれるかもしれませんが、少なくとも発達心理学の先生方の観察でも、われわれの観察でも分かっているのは、生後1カ月目の赤ちゃんとお母さんのやりとりは、お母さんが無意識に同じことを繰り返すことが重要だということです。ポイントは同じことを繰り返すということです。同じことを繰り返されるから、赤ちゃんはお母さんを認識することができます。これがちょこちょこ、ちょこちょこ変えられたら分かりません。ところが面白いのは、3カ月ぐらいになってくると、赤ちゃんは今度同じことをされることに興味を持たなくなります。ですから発達と共に、連続して必ず起こる確実なものから不確実なものに赤ちゃんが興味を持っていくのがだいたい3カ月ぐらいということです。そのころには、お母さん、どうぞ考えてちょっと変化球を出してください、というのがたぶん正解になります。

なぜこのようなことを話しているかという、お母さん方の育児不安が一番強くなっていくのが、生後1カ月ぐらいなんです。なぜかという、泣く回数が多くなるからです。赤ちゃんの泣く回数というのは、生後1カ月か2カ月ぐらいがピークだと言われています。そのあとは減ります。なおかつ1カ月の赤ちゃんの泣きには意味がありませんから、分からないのです。分からないでギャーギャー泣くとしんどくなります。ですから、分かってないんだと思ってください。赤ちゃんの泣きには意味がないと思ってください。

一時、私も間違ったことを書いたことがありました。赤ちゃんの泣き声で赤ちゃんの意思が分かるなどということを書いたことがあります。そういう研究をしたこともあります。それから、パウリンガルというのが一時はやりましたが、犬の鳴き声で犬の気持ちが分かるというのがありました。そのときに、幾つかのテレビの取材があり、赤ちゃんの泣き声で赤ちゃんの気持ちが分かるというので、パウリンガルの赤ちゃん版みたいなをつくる人がたくさんいましたが、結局うまくいきませんでした。それは何かという、人間の赤ちゃんは同じトーンではずっと泣かないからです。1回泣くときでもいろいろなトーンで泣きますので、どこをとって分析したらいいのか問題です。そうすると泣き声で判断することは難しいということになります。1カ月の赤ちゃんの育児をもしされる方がいましたら考えないよう

にしてください。『下手な考え休むに似たり』ということもありますので、泣いてやるのはおっぱいをあげるか、おしっこしているのかどうかを調べればいぐらいの話です。実は、おしっこをすることもすぐお母さん方に誤解をされていて、あれはどっちが先だと思いますか。赤ちゃんがおしっこをしたら泣くのか、泣いたからおしっこをするのか。どっちだと思いますか。

**会場：**おしっこが先。

**小西先生：**おなかの赤ちゃんは面白いんです。胎児の排尿の観察をした小児科医の研究ではおなかにいる赤ちゃんがおしっこをするときは、必ず泣きます。それで、泣いてからおしっこをします。要するに泣くことによって、腹圧を掛けておしっこをしているわけです。どうやら赤ちゃんというのは、泣いておしっこを出す存在です。ですから、赤ちゃんというのはおしっこをしたあとに、そのおしっこが気持ち悪いから泣くというのほうです。気持ちが悪いかどうか分かりません。大人で感覚で考えないでください。それはそうです、いい年したおじさんが、おむつしておしっこをしたらそれは気持ち悪いです。それで不快感を感じるから泣きます、というのは大人で感覚です。赤ちゃんは泣くことでおしっこをします。

よくありますが、布おむつがいいか、紙おむつがいいかという話で、紙おむつにしていると不快感がないからおしっこを教えるのが遅れる。布おむつのほうが不快感があるから早くできるというのは、間違いかもしれません。下手すると布おむつのほうが愛情があって、紙おむつは愛情がないと言う人がいますが、おむつの問題は愛情の問題ではありません。それは紙おむつのほうが高いので、布おむつの方がいいという早い話がお金の問題かもしれません。それはそうです、紙おむつのほうが高いのだから。それだけの話です。布おむつがいいか、紙おむつがいいかといえば、明らかに紙おむつがいいです。それは圧倒的に布おむつがぶれが少ないからです。ですがお金は掛かりますし、ごみの問題が出てきますしね。皮膚のことに言えれば、紙おむつのほうがいいです。それは日本の会社が一生懸命考えてつくった紙おむつですから、布おむつよりいいでしょう。

昔紙おむつより布おむつの方が親の愛情が込められているからいいのではないかという論争がありました。その時私共の家では三人の乳児を育てていた

ので布おむつをイヤという程私も洗いました。京都の冬ってとてつもなく冷たいのです。その中でオムツを洗うのです。その時に子供に愛情を感じるとか、布おむつは良いとかなどは全く考えられず、紙おむつが売られるようになって、使ったとき始めて楽になり、育児が少し楽しくなって子どもと遊ぶ余裕ができてきたのです。情けない話ですが、外来で赤ちゃんのうんちには重要なメッセージがあるから色とか臭いとかに気をつけてなどと患者さんに指導していた自分が、とてもそうできなかったのですから医者失格かもしれません。しかしそんな時「布おむつが大切、愛情が伝わるから」と言われた時には本当に頭にきたのです。たやすく「愛情」という言葉で育児を語って欲しくないと思いました。

ですから、もう少し冷静に考えると、すべて愛情で考えることに関しては、私は反対です。すべてお母さんの愛情にするのはかわいそうです。ですから、ベビーマッサージもそうです。お母さんが何かをしなければいけないとなるから、お母さん方がしんどくなるわけです。赤ちゃんが泣いたらやれば良いというふうにすると、すごく楽になります。たぶん赤ちゃんは自分で動くので、お母さんにしてほしいとは思ってないと思います。分かりますか。今日、最初にお見せした運動というのは、ジェネラル・ムーブメントと言いました。あれで脳の正常か異常かが分かるという話もしました。実は発達障害があの段階から見分けられて診断がつくという話もあります。自閉症の子どもたちとか、ADHDの子どもたちの運動は、あの時点でおかしいという報告がもう出ています。ですから、非常に重要な所見になります。なぜかという、赤ちゃんが自発的に動くのは、それを使って周りの人たち、あるいは周りのものに触る、あるいはお母さんとのやりとりをするということで、認知能力を上げていくための運動ですので大事になります。これは反射では無理です。外から刺激されて赤ちゃんが育つという発想だと、こういう話にはなりません。赤ちゃんが自ら動くことによってしか世の中を知ることをできません。赤ちゃんの存在というもの、あるいは赤ちゃんに対する考え方を変えていただきたいのです。赤ちゃんはお母さんやお父さんが外から呼びかけるから動くではありません。1人の人間として、赤ちゃんというのは自分で動いています。頑張っているのだから、それを邪魔しないでください。

胎児は思ったより忙しいんです。指をしゃぶったり起きたり寝たりとこういうことをしています。実

は赤ちゃんが起きる・寝るといのがはっきりしてくるのは妊娠36~37週ぐらいです。おなかの中の赤ちゃんも起きたり・寝たりします。これはなぜ分かったかということ、目の運動を見ると分かります。眼をよく動かす時と動かさない時がはっきりするとレム睡眠とノンレム睡眠の区別ができるということです。羊水を飲むおしっこをするというのは、これも生まれてくるための準備になります。ですから、おなかの赤ちゃんの研究が極めて重要であるということです。おなかの赤ちゃんが動くというのは、実は人間の行動の初めになります。今までの心理学、あるいは小児科学が大きな問題を抱えていたのは何かということ、おなかにいる赤ちゃんの研究が入っていませんでした。生まれたとたん人間は動くんだと思っていました。ですから発達心理学にとって、初めは生まれてすぐの赤ちゃんではしかなかったのです。そこがもう崩されているわけです。おなかにいる赤ちゃんの運動と生後の運動は、当然関係があるということになります。ですから、おなかにいる赤ちゃんの研究がだんだん進んでくると、赤ちゃんがどうして動くのか、何をしているのかが分かってきます。それは将来を見詰めた上でも非常に重要なことになります。おなかにいるときの運動に異常があるケースが、例えば発達障害、あるいは脳性まひだということも少しずつ分かってきます。

そして、おなかにいる赤ちゃんは、要するに自ら動いて触覚によって自分を知り、環境を認知しようとしてます。生まれてくるための準備運動をします。味も分かります、飲むこともできます、表情をつくることもできます、音を弁別することもできます、睡眠リズムもできます。思った以上におなかにいる赤ちゃんは、いろいろな能力を持っているということが分かりました。これがたぶん今後の子ども観を変えることだろうと思います。要するに、生まれてすぐの赤ちゃんというのは、白紙状態で生まれてくるから育児をしてあげなければならないと思われています。これは少なくとも、その赤ちゃんの研究によってほとんど否定されたと思います。赤ちゃんは、生まれたときから既にいろいろな能力を持って生まれてくるわけです。ですから、それほど無力な存在ではありません。これは、おなかにいる赤ちゃんの運動はこういういろいろな運動があります、という絵になります。2カ月ぐらいから動いていま

す。

ヒトの行動（運動）の始まりについての議論がありますが、原始反射はありませんかという意見があります。原始反射はもちろんあります。それで原始反射に対する考え方と自発運動との関係が難しいのです。左にあるのは中枢神経の発生と成長の過程を書いています。この黄色が自発運動、ジェネラル・ムーブメントといった、自発運動が生まれてくる時期です。原始反射ができる時期とはなれています。何でかという、まず動く。とにかく自発的に赤ちゃんは動く。動くことと、それから触覚ができてくることによって原始反射がつくられます。つまり自発的は運動で何かにふれるとその自発的運動の中で一つの運動が反射的に出てくる可能性があるのです。つまり、原始反射というのは、ある胎児の意味では赤ちゃんの学習の結果とも言えます。ヒトの運動をすべて原始反射で説明するわけにはいきません。自発運動のほうがタンスになります。原始反射は引き出しで一つ一つの刺激に応じて引き出すときに出てくるものと考えます。どういうことかという、同じ刺激をしたら必ず同じものが出てくる引き出しが原始反射だということです。今まで学んできた原始反射の意味というのは、極めて限られた意味しかないということをお分かりいただけるかと思います。なぜ原始反射にこだわるかという、ピアジェが人間の子どもの発達、最初の段階というのは、原始反射を繰り返すことによって、随意運動ができてくるということを彼は言っています。これはもう否定されました。赤ちゃんは自ら自発的に動くことによって、随意的に手足を動かそうという存在ですから学習に反射は使いません。非常に重要なことは何かというと、赤ちゃんというのは自らが学ぶ存在であるということです。発達についてはピアジェのいう学習説とギブソンらのいう生得説があり、討論がくり返されてきましたが、ピアジェのいうように全く無力な赤ちゃんということは否定されました。しかし、すべての能力が生得的にそなわっているとも思えません。胎動の研究から見てきたものは胎動の一部は選択されて残り、一部は消失するという。そしてそれらの残った能力が種となって多くの能力が学習によって発達してくるということでしょう。こうした発達学の見直しによって育児が変わります。何かしてあげなければいけないという存在ではないのです。

おなかの赤ちゃんが寝ているかどうかを見る研究を精力的にされたのが、九州大学の産婦人科の中野

先生のグループです。私もある意味では師になる先生なので、敬意を表してその成果をお見せします。眼球運動を観察すると、目が動かない時期とかたまって動く時期が、この36,7~38週のところではっきり見えてきます。おなかにいる赤ちゃんは寝ながら目を動かします。あるいは目を動かさずに寝ている時期というのがはっきりします。なぜこれを観たかという、これはすごく大変な研究なんです。超音波でレンズ（水晶体）の両側に点線の小さいのが見えますが、あの間は1ミリです。相当開いているように見えますが、実は上の点と下の点との間は1ミリです。超音波の端子をそっと当てながら見るわけです。九州大学の産婦人科は1日中観察をしますので、妊婦さんはおなかを出して、寝ているときにご飯を食べているとき、トイレに行く以外は全部ベッドの上で寝て超音波を当てられるわけです。大変なデータです。当てられる妊婦さんも大変ですが、ずっとやっている医者ももっとかわいそうです。ずっと見張っているわけです。そのデータが、こうした形で表れています。これは、たぶん世界ではここでしかやらないと思います。これではっきりしたのは、赤ちゃんはおなかの中で寝ています。レム睡眠とか、ノンレム睡眠は、おなかにいるときに既に実現しているということが分かりました。

ですから、そのおなかにいる赤ちゃんの研究は、こうやって見せると簡単なような話になりますが、ものすごく大変な研究なのです。今やっと3Dの超音波が出てきましたから、表情があるということが分かったわけです。おなかにいる赤ちゃんが、いろいろな表情をしているというのが分かったのはすごく最近のことなのです。そういうことが分かっていくに従って、おなかにいる赤ちゃんはよくできていて、いろいろなことを勉強しているのが分かります。そうすると簡単に墮ろす気にはならないわけです。お母さんと赤ちゃんは違う。おなかにいる赤ちゃんは頑張っているための準備運動をしている一つの命だと思ったら、簡単には墮ろせなくなります。一心同体だと思うから、場合によっては墮ろす気になるのかもしれませんが、自分のものだと思うからです。大事なことは、胎児はお母さんのものではありません。別個の命ですから、自分で頑張っているわけですから、自分で頑張っているわけですから、単純に簡単に胎教などということを書いてほしくありません。その子自身が頑張っているのですから、邪魔をしない。人間というのは教育をしたらその成果を必ず求めます。そうすると赤ちゃんにプレ

ッシャーを掛けるだけです。おなかの中にいるときに、私がこんなに語りかけたのに、私の顔も覚えていないのとなります。それはあなたの勝手です。ベートーベンを聴かせたから頭がよくなると言われてたり、モーツァルトかベートーベンドっちかがいいかという、面白い研究もあります。あれも明らかな答えは出ていません。答えが出ていないのに、デパートに行くと胎教用の音楽が売られていて、そのほとんどがモーツァルトだったりします。それをオランダで話をしたら、私の師であるプレヒテル教授に笑われました。何かというと、日本人がどうしてベートーベンが分かるのかと。意味が分かりますか。言語が違うので、日本人の赤ちゃんが喜ぶのは日本語の歌です。音域が違うので、それは当たり前のことです。ですから日本には音楽がないのかと言われてました。

今、日本人の子守歌に凝っているのですが、日本の子守歌はほかの子守歌と全然違うことを知っていますか。日本の子守歌はものすごくネガティブなのです。この子憎たらしいとか、よう泣くガキだとか、面憎いとか歌っています。あれはすごく大事なことです。要するに、育児というのはそんなに簡単で楽しくないよということです。一方西洋の子守歌はみんなハッピーなのです。どっちがいいと思いますか。私は日本的なもので言うのであれば、悲しみとかつらさをきちんと歌っている日本語の子守歌のほうが意味があるし、正直だと思います。なぜなら育児は難しく大変なのです。東大の先生と話をしたときに、その先生がおっしゃったのは、日本語の子守歌というのは悲しみがベースにあります。育児のベースに、日本人は悲しみというものを持っているから育児が深くなると教わりました。やはりそうだと、アメリカ人ほど単純ではないのです。むしろ、みんなやたらとハッピー、ハッピーみたいな感じで、ばかじゃないかと、そんなので本当に子どもが育つのでしょうか。本当、日本語の子守歌は面白いなと思いました。ちょっと横道にそれましたが、そんなことがあります。

もう一つ、最近になって分かったことは何かというと、脳の成長がどうなるかということです、勉強をすればするほど起こることは何かというと、シナプスという神経細胞と神経細胞をつなぐ、神経回路網と言われるものが減ります。ですから、勉強をすればするだけシナプスが増えるということではありません。何でもやれば伸びるということはありません。当たり前で、何回もやると減るということです。

ですから人間の子どもの発達というのは夢をなくすことともいえるのです。お間違えのないように。子どもには無限の可能性があるとこのほうです。寿命も決まっているし、すべての子どもがなりたいたいものになれるわけでもありません。小さいときには何でもなれるという幻想から、発達の過程でできないものはできないとなってきて、始めてああ、これでも幸せだと思うのが子どもの発達です。おかしいですか。先生の話は夢がないとよく言われます。

大事なものを一つ探せばいいわけです。本当になりたいものが一つあればそれでいいと思います。何でもかんでもなれるということはあり得ません。私の母親はすごい教育ママで、私は小学校のときにありとあらゆる教育を受けました。英語もやらされましたし、ピアノ、習字、そろばん、絵もやりました。それからうちは変な親です。体操ができないと入試は受からないからということで、鉄棒とマットと跳び箱の家庭教師がつけました。かわいそうに、いろいろやられたんです。そして、母親が年をとったので聞いたんです。「いろいろなことをやってみてどうだった」と言うと、一言言われました。「全部失敗」と。あ、そう、私は失敗作なのと。あなた方は失敗作の講演を聞いているという話になります。ですから何でもできるというのはうそなんです。大事なことは、本当にその子に合ったものを一つ見つけてあげればいいということです。神経回路網が減ることの重要さは何かということ、無駄な部分を省くのです。いろいろなことをやって、すべてのことを逃してしまうのではなく、その子にあった、その人にあった神経回路網を選択していきます。ですから、いろいろなところでやたらと早期教育のブームで、やればやるほど脳が大きくなるということを主張されていますがそんなことはあり得ません。もっと言えば、脳が大きくてシナプスが多すぎる障害もあります。なぜかということ、自閉症の子どもたちはシナプス数が多いのです。ADHDの子どもたちの脳のシナプスも多いのです。要するに、効率化を図るために無駄を省かないと情報の効率的な処理ができないわけです。その子にあったものを探ることが教育にとっては一番重要なことです。それは誰が分かるかということ、それは本人のことだから本人しか分からないのです。そのあと私の話は一貫していると思います。要するに、横から親がいろいろなことをしなくていいという話になります。

うちの息子たちの教育は割と……小学校のときはどついて結構教えました、どこかで、あ、駄目だ



とあきらめました。だけどいい子になっているとは思いません。発達に対する幻想が20世紀にありました。なぜかという、20世紀の初めにエレン・ケイという人が、20世紀というのは子どもと女性の世紀だと言いました。いい子を産んで、うまく育てたらすごい子どもが育つと彼女は言いました。それが優生学と進化論に基づく発達観でした。要するに、末は博士か大臣かというのは20世紀には言われました。その末は博士か大臣かを追い求めた20世紀の終わりにわれわれが見たのは何かというと、発達障害であり虐待でありという、いわゆる子どもの問題でした。そうすると右肩上がりの発達観が間違っていたのではないか。やれば何でもできるという発達観がお母さん方を苦しめたのではないのか。現実は違うのです。21世紀の子ども観で、まず大事なことは何かというと、まず自ら動く、存在する子どもを認めなさい。自分から学習をする子どもを守ってあげなさいということ、もう一つ大事なことは、やればやるだけシナプスは減るかもしれない。やればやるだけ減るというのは、すごく夢のない話になるけれども、そうではなくて残ったものは当然増えていきます。選択された能力はこれから開いていきます。ですから、脳が大きくなるわけではなく、その子に合ったものを選択しながら成長していくのが発達です。ピアノもやる、習字もやる、絵もやるみたいなことはやめてください。やっても構いませんが、うまくいかないなと思ったら無駄ですから、たちどころにやめてください。もっと言えば、ではその子どもにあったものはどういうふうに見つけるかというのは、夫婦が自分たちの顔を見て見つけるしかないわけです。それは材料がお父さんとお母さんだからですと最初に言いましたが、私の娘は私に似ているというのは当たり前で、それはかわいそうだけど仕方がない事実で、お父さんに似るわけです。でもお父さんみたいに性格がいいといいなあと思ったのですが、性格はいいからお父さんに似たのでしょう。

育児のキーはどこにありますかという、夫婦がちゃんとお互いのいいところを探せるかどうかです。いろいろな話をしても無理です。少なくともお母さんの育児が子どもの発達の影響を及ぼすのは10~20パーセントと言われています。50パーセントぐらいは材料なので、当たり前のことで、あがいても仕方がないのです。ですから、私はそう思いますが、ずっと育児をしてきてやはり大事なものは何かというと、私のかみさんはいい人だよなど。せめて娘には

うちのお母さんのようになってくれば、私は全然文句はないみたいな、ことを心の中では思っています。ですから現実可能な夢、あるいはそうあってほしい、子どもたちの望む夢というのは遠くにあるものではなくて自分の目の前にいる、旦那だったり、奥さんだったりするということになるのではないかと思います。

これは実際に面白いのは、無駄を省く。もう一つ細かい話でいくと、赤ちゃんの肌をいろいろと刺激をすると脳のちょっとした、例えば視覚刺激でも脳のいろいろなところに広がっていきます。年齢を経るに従って、だんだん行く経路が決まっていきます。要するに削られるという話です。面白いのは、生まれてすぐの赤ちゃんが、例えば目を閉じてちょっと形の変った乳首を口に入れて、今度その乳首を口から出したときに、いろいろな乳首の中から、赤ちゃんは今自分が吸った乳首を選び出すことはできます。見てないのにもかかわらず、舌で感じた感覚を目で見分けることができるということは、触覚刺激が視覚野にも入っている可能性があります。これはいろいろなところで確かめられているのですが、目の見えない子ども視覚障害者が点字を指で触るときに、脳のどこでそれを処理しますかという、視覚野でします。要するに、見えなくなった目からの情報が入って来ない視覚野は死ぬかという、全く死に絶えるのではなく、指先、あるいは手の触覚を処理するようになるのです。それはどうしてできるのかという、生まれつき指から視覚野に行く経路があると考えたほうが分かりやすいのです。新たにできて視覚野に繊維が伸びていくということは、それはあり得ないので、そうするといろいろな経路があって削っていく段階で、見えない子どもの視覚野は触覚刺激から入ってもものを受け取るような経路が残ったと考えるのがいいと思います。同じように耳の聞こえない人の聴覚野は手話を理解する。音の情報を処理するところが視覚刺激つまり、見たものを情報処理するように変わります。見えない子どもの視覚野が触覚を処理し、聞こえない子どもの聴覚野が視覚刺激を処理するように変わっていくのです。ヒトの脳、とりわけ赤ちゃんの脳にはあらかじめ過剰な神経回路網がつくられていて、その子の状態によって必要なものが残っていくということです。ですから目が見えない、耳が聞こえないからといって視覚野や聴覚野が働きを失うのではなく、違った機能を獲得してゆくようなのです。そして残った回路は成長し、大きく広がってゆくのです。先に原始反射は



重要ではないと言いましたが、全く無駄というものでもありません。

おなかの赤ちゃんもいろいろな原始反射がどこでもあります。原始反射というのは実は遊びには使えます。赤ちゃんは、びっくりするときはびっくりしますし、手を触ったりすると握ったりします。非対称性緊張性頸反射というのは、右向くと右手を伸ばして、左手足を曲げたりするような反射があります。これは赤ちゃんの服を簡単に脱がすことができます。まあどうでもいいんですが、赤ちゃんのパターンが決まっていると、確かに扱いやすいです。そのためには原始反射もあり得るという気もします。赤ちゃんが歩くということもあります。それから生まれたての赤ちゃんというのは、お母さんの違いは分かります。おっぱいのおいもほかのお母さんと比べますと、赤ちゃんというのは自分のお母さんのおっぱいは分かります。それから声も分かります。そういった意味で言えば、生まれたその赤ちゃんも、おなかの中にいる赤ちゃんと同じようにそれ以上いろいろな能力を持っていることが分かります。

こういう赤ちゃんの目がどこにいくかという視線を調べる機械で、生後5カ月ぐらいの赤ちゃんにこういう絵を見せると、赤ちゃんは人間の顔も見ます。もう顔の見分けがつかうと言われています。そして3カ月の赤ちゃんというのは、例えば目の前にあるモビールに、ひもで足とモビールを結んであげると一緒に足を動かします。なぜかというと、足を動かすとモビールが動くのが分かるから、赤ちゃんは一生懸命足を動かします。それから手も一緒に、手とモビールをつないであげても手が動けばモビールが動くのが分かるので学習をしますので、もう生後3カ月の赤ちゃんから学習はできます。それから5カ月の赤ちゃんは、こういう顔に対する反応は分かりますし、7カ月の赤ちゃんというのは、遠近感が分かるという実験もあります。ですから、はいはいをするようになるのです。

これは脳波ですが、いろいろな脳波の実験があるので、これは128チャンネル、の脳波計です。これはもう2～3分で付けられますので、赤ちゃんの脳機能がわかってきています。これは脳の血流を測る機械です。何をやったかという、フランス中の赤ちゃんに、生後5日目にフランス語を聞かせると、確かに聴覚野が反応します。ところがそのテープを反対に回すと反応をしません。ということは、生後5日目の赤ちゃんはフランス語が分かるわけです。何か疑問がある人はいますか。もちろん日本人の赤

ちゃんではなく、フランス人の赤ちゃんです。日本人の赤ちゃんは分かりません。日本人の赤ちゃんに英語と日本語を聞かせると、英語を聞いたときと日本語を聞いたときでは、脳の活性化する場所(脳血流の増える場所)は違います。日本語と英語の違いは分かります。ですから、生まれてくる前に、既に母国語は理解しているかどうかですが、分かるらしいという話です。

チンパンジーの赤ちゃん、人間の赤ちゃんを比べた研究も赤ちゃん学の先生方はされています。これですごく面白かったのは、人間の赤ちゃんとチンパンジーの赤ちゃんは同じようなことをしますが、実は手と足を触れ合う運動の前に、人間は手と手を触ります。人間の赤ちゃんは、手と手を触ってから、手と足を触ります。ところがチンパンジーの赤ちゃんは、手と足を触ってから手と手を触ります。逆になります。意味が分かりますか。チンパンジーの赤ちゃんは後ろ足のほうが前足より影響力が強い。要するに四つ足動物としての影響が残っているから、足が動くから手が動きます。それから人間は手のほうが重要ですから、手と手を触ったあとで手と足を触ります。同じような行動でも、実は逆になります。こういったことをずっと調べていくことによって、人間の赤ちゃんとチンパンジーの差、あるいは育児の差みたいなものが分かってくると、また育児なり、子どもの研究などもできるようになります。

今日はお話しはしませんでした。赤ちゃん学会というのは、これ以外にロボットの先生がいる理由は、われわれの研究の結果をシミュレーションしてもらおう。あるいはロボットの中に入れてもらえます。そうすると、われわれが研究した成果が本当に正しいかどうか、ロボットの振る舞いを見れば分かるわけです。ロボットの中にわれわれの成果を組み込んでいくことによって、そのロボットがそれによって手足を動かす。その動かし方がわれわれと違うかどうかを見れば、そのプログラミングが間違ったか正しいかということが分かります。ロボットを使うことによって、私たちの研究の成果が正しいかどうかを検証してもらえます。そういうグループを赤ちゃん学会の中に持っています。これは赤ちゃん学会の非常に重要なところではないかという気がします。そういった意味で、だんだん、だんだん赤ちゃんのことが分かるようになってきました。ですので、どうぞ赤ちゃんを見て育児をしているときに、お母さん方をあまりいじめないでください。赤ちゃんが育っていくのを邪魔しないでいいと。お母さんがとに

かく何かしてあげなければいけないということを、あまり言わないであげてください。触ることをする必要がなければ、お母さんのほうから声掛けをしなくていいのです。赤ちゃんが声を掛けたときに返してあげてください。育児はもう少し楽にやってあげることが重要なのかと思います。

雑ばくな話になりましたが、いろいろな方に今日聞いていただいて、実はお伝えしたかったことは、赤ちゃんを知れば知るほど赤ちゃんの能力というのはすごいということが分かりました。今日はお見せしませんでしたでしたが、生後5カ月の赤ちゃんが、もう足し算ができる、引き算ができるというデータもあります。それから物理が分かるという話もあります。赤ちゃんはわれわれが思っていた以上に、非常に能力があるということも分かりました。ということは、もっと赤ちゃんを信じて育児をしてくれませんか。お母さんが頑張らないと育児ができない子どもは、いい子が育たないということはありません。簡単に言えば、親がなくとも子は育つのです。お母さんによって、今非常に育児に真剣な人とちょっと手抜きをするお母さんとがいますから、すべてのお母さんにこの話が当てはまるとは思いませんが、一生懸命育てなければいけない、頑張らなければいけないと思っているお母さんに、どうぞできるだけ安心していいよということで、保育士さんになる方にお話をいただければいいかという気がします。ですので、そういったことで、こういうデータがお役に立つようなことがありましたら、どうぞ言っていただければわれわれの会員の中には、そういう育児講座等をやっている方がたくさんいますので、私ではなくてもお呼びいただければお話ができますと思います。お役に立てれば有り難いと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

**所長：**小西先生の始まりが10分ほど遅くなってしまって申し訳なく思います。ところで最初の2枚の赤ちゃんの動きで、よく観察すると、大きな違いがあり、どちらかが障害があるということでしたが、それはどちらがどうだったかという結論をお願いします。

**小西先生：**最初の赤ちゃんのほうが異常です。それで2番目の赤ちゃんのほうが正常です。もう分かっています。どうしてかということ、2番目のほうの赤ちゃん運動のほうがスムーズで、いろいろなパターンがあります。最初の赤ちゃんは、ほとんど同じ運動

を繰り返していきがちなく、ロボットが動いているような感じです。そして同じようなことをします。あまり中途半端に理解しないことに越したことはありません。だからと言って、簡単に分かるわけではありませんが、何回か講座を受けていただくと、診断ができるようになります。理学療法士の先生方と一緒にこういう見方の講座は、実は毎年先生を招いたりしてやっています。運動の評価は、だいたい分かると思います。そして面白かったのは、女子大生とそれから小児科の医者と比べたときに、初めて何の予備知識もない聖心女学院の学生さん400人ぐらいに14人分のこのテープを見せて、その成績と、それから福井大の小児科の先生に見せて、どちらが正しいか、正解率が高かったかということ、実は女子大生のほうが高かったのです。要するに、何の先入観もなく、素直に見ていただければ、実はこの運動は分かりやすいわけです。何かというと、幸せそうだよねと思う運動は正常です。ちょっと気になるという運動は、たいていいけないのです。ですからそんなに難しくはないのです。お母さん方というのは、かなり早い時期から自分の子どもがおかしいかどうか、分かっている方が多いのです。ときどき保育園などで、お母さんが赤ちゃんや子どもの異常を理解してくれないのでどうか診てくださいと相談を受けますが、悪いですが、あれはほとんどのお母さんは分かっています。言いたくないだけか、言われたくないだけということもあるので、私たちは専門だからわかるけど、お母さんは分かってないと思わないでください。必ずお母さん方は分かっていると思っていただいたほうがいいかもしれません。そのデータが、その聖心女学院の学生さんのほうが高くて小児科の先生が低かったということが、如実に物語っているような気がします。専門家の目のほうが曇っている可能性もあります。素直に見れば分かるということが分かります。そういった意味では、この赤ちゃんの運動というのは、見ていただくと非常に面白いかという気がします。

もし機会がありましたら、子どもさんをそのままの状態ですら5分間ぐらい見てみれば分かります。もしお役に立つようでしたら、また聞いていただければということもありますので、またお教えいたしますがよろしいでしょうか。

**所長：**ありがとうございました。本当に赤ちゃんが動くから脳がつくられるというのは、私も大変衝撃的でした。ですから自発的な動きを殺がないような教

育・保育が大事なのかという思いを反省しつつお聞きしました。

一つご案内ですが、日本赤ちゃん学会で新赤ちゃん学講座というものを関西と関東でやっておりまして、来週の7月3日から8回にわたって小西先生が3日はご講演されますが、東京のほうで開催されます。日本赤ちゃん学会のサイトに入ってくださいますとのご案内が出ますので、もしちょっと関心がある方は、ぜひそのサイトに入ってみていただきたいと思います。

それではここで、本学の学生代表よりお礼の言葉を述べさせていただきます。

**学生代表：**今日の講義を受ける前に、小西先生の本を2冊読ませていただきました。生まれてから自分の体を知るようになって、見たり食べたりいろいろなことができるようになって、赤ちゃんはこのときはどう思っているのかとか、すごく細かく書かれていて、実習を振り返りながら理解することができました。

今日の講義では、おなかの中であんなにはっきり笑ったり、すねたような顔をしているのを初めて見たのすごく驚きました。刺激を与えなくても赤ちゃんは勝手に動くというのも、新しく知ることができました。11月に保育実習がまたあるので、赤ちゃんにたくさんかかわって自分の目で見てみたいと思いました。

今日は素晴らしいお話、ありがとうございました。  
(拍手)

**所長：**では最後になりましたが、本学を代表いたしまして教務部長より一言お礼の言葉を述べさせていただきます。

**教務部長：**本学を代表いたしまして、一言お礼を申し上げます。本日は大変ご多用の中を本学に起こしいただいた上、貴重な講演を賜りまして深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

さて、昨夜のテレビを見ておりましたら、アフガニスタンの子どもたち、赤ちゃんがたくさん出てきました。それは非常に私にとっては衝撃的な映像でした。眼球がない子どもがいました。そしてお尻に大きな腫瘍（しゅよう）ができていて、頭と同じぐらいの大きさの子どもが映っていました。私はそれを見たときに、赤ちゃんの尊厳であるとか、それから基本的人権であるとか、いろいろなことを考えて

いましたが、その報道によりますとアメリカ軍がタリバン追討のために使った劣化ウラン爆弾ではないかということを知りました。結局は、弱いところにあるいろいろな災いがいくんだということを感じた次第です。そういった点で、今日は私にとって赤ちゃんという言葉がキーワードになっており、先生の話をお聞きしながら聞かせていただきました。とりわけ先生がお話いただきました、臨床的データに基づいたお話であるとか、あるいは根拠であるとか、学問的なとらえで赤ちゃんのことを学ばせていただいたことを大変うれしく思います。また、先生はユーモア、そして気さくに学生たち、われわれに質問をされるときに、私が今まで思っていた、この赤ちゃんのとらえというのが、大人の非常識であることも少し感じました。私もはるか前に、赤ちゃんを、娘を育てたことがあります。随分勘違いをしていたんだということを感じました。

本日の講演は、保育者、教育者をめざす学生はもとより、多数公開講座に起こしいただきました地域の方々にとりましては子ども理解という点で、また本学の教職員にとりましては子ども学の研究推進、また進化を図るという点におきまして、大変有意義なお話をいただきました。先生にはまた、今後とも多くの場面でご指導ご鞭撻を賜ることも多々あらうかと思いますが、その節はどうぞよろしくお願い申し上げます。はなはだ簡単な措辞ではございますが、お礼の言葉にさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

**所長：**以上を持ちまして、第2回現代子ども学公開講座を閉じさせていただきます。ありがとうございました。

## 第3回

「子どものウソは『嘘』か  
－創造的想像力を育てる大人の役割－」

(2010年11月24日)

内田伸子先生

お茶の水女子大学 客員教授  
名誉教授

### 第3回「子どものウソは『嘘』か ——創造的想像力を育てる大人の役割——」

内田先生：子どものウソは嘘、口で虚を作るという大人が考えるような嘘なのかということテーマにして子どもの創造的想像力を育てる大人の役割と題して話をさせていただきたいというふうに思います。流れですけれども、まず想像力とは何かというお話をします。そして子どものウソは嘘かを検証し、さらに第3に親の早期教育への期待にどう応えるか。50の文字を覚えるよりも100の何だ？ を育てたいというメッセージをお伝えしたいと思います。

まず想像力を私は生きる力であるというふうに認識したのは、ピクトール・フランクルのこの『夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録—』という本においてでした。この本の中でフランクル自身はやはりユダヤ人でしたので、あのナチスの強制収容所に収容されていました。もう妻も子どももガス室で殺されている。それもわからずに強制労働に駆り立てられる日々だったわけです。ある時、収容所の中で「12月24日のクリスマスに自分たちは解放される」ということがニュースとして伝わってきました。その途端に人々の中には希望の火が灯り、病人の頬には赤みが差す、子どもたちからも笑い声が出てきます。若者たちもいやいやながらではなく、本当に一生懸命労働に従事する。その日を待ちました。やがて12月24日、あれはデマであったということが伝えられた途端に、収容所の中の空気が一変します。悲鳴が聞こえ、そしてあちこちで体に何の故障もない若者たちがバタバタ倒れて息絶えるというエピソードが紹介されています。なぜ、こんなことが起こってしまったのか。フランクルは次のように述べています。

「人間が強制収容所において外的にのみならず、その内的生活においても陥っていくあらゆる原始性にも拘わらず、たとえ稀ではあれ著しい内面化への傾向があったということが述べられねばならない。」内面化への抵抗。現実が厳しすぎるので、自分の内側に向かう。そして想像世界を見ることで何とか精神の浄福を取り戻す。人間としての尊厳を取り戻すというような、この想像力を働かせるということがあったというふうにですね。「元来精神的に高い生活をしてきた感じ易い人間は、ある場合には、その比較的繊細な感情素質にも拘わらず、収容所生活のかくも困難な、外的状況を苦痛ではあるにせよ、彼等の

精神生活にとってそれほど破壊的には体験しなかった。なぜならば彼等にとっては、恐ろしい周囲の世界から精神の自由と内的な豊かさへと逃れる道が開けていたからである。かくして、そしてかくしてのみ繊細な性質の人間がしばしば頑丈な身体の人々よりも、収容所生活をよりよく耐え得たというパラドックスが理解され得るのである。」逆説ですよ。逆のことが起こった。これは人はパンのみにて生きるにあらず。精神の力である自由意思を発揮し、イメージを浮かべて、何とかしのぐということができた人だけが生きながらえることができたのだということをおこの著作は物語っています。

では想像力というのは、人間の心の中にいつ頃から働き始めるのでしょうか。これはとても早いんです。この想像の素材というのは、経験なんですね。経験がないとイメージの世界というのは描けません。見えない未来を思い描くのに材料が必ずいるわけです。想像はしかし経験と同じものではありません。断片的に取り出された経験をつなぎ合わせたり、脈絡をつける時に必ず何か新しいものが付け加わります。想像の可能性が出てくるわけですね。このような経験というのは、赤ちゃんが誕生してから生活の中で蓄積していくのですが、生後10カ月に非常に大きな変化が起こります。まずその話に行く前に、今経験が想像世界の豊かさを規定するという話をしましたが、2歳5カ月と3歳8カ月の子どもの語りの例を持ってまいりました。子どもの前にこの3枚の絵カードを置いて、「お話ししてくれる？」と頼みます。1年3カ月の生活経験の量が違う、この子たちの語り、これ代表例でありますけれども、2歳5カ月の女の子「うさタン、ピョンピョン、イテェー、ころんだよ、石、ころんだ。エ〜ン、エ〜ン、うさタン、え〜ん」自分でも鳴きまねをします。「イテェー、ころんだよ」結果を言って、「石、ころんだ」石が原因だった。因果的な頭の使い方ももう出ている。それからまだ動作が言葉を支え、言葉が動作を支える。言葉と動作が一体になっている段階であります。3歳8カ月になりますと、「うさこちゃんがお月さんを見ながら、楽しくダンスしていました。上ばかり見ておどっていたので、石ころにつまづいて水たまりにしりもちをついてしまいました。頭から、水ぬれ

「なっとうさこちゃんは泣いてしまいました」まさに自分の経験からこの姿を楽しそうにしているな、お月さまは見えなくても、きっとお月さまを見ながら楽しくダンスしているんだ、というぐあいに解釈を語っているわけです。緑で書いたところというのは、まさに子どもが自分の知識から取り出して、この絵の解釈のために加工している部分であります。1年3カ月の違いがこれほどの語りの違いをもたらしたと、いうことになります。

ここで、暗記能力と想像力の違いというのを整理しておきたいと思います。思考というのには2つのタイプの思考があります。1つは収束的な思考、これは答えが1つに決まる。答えに至る道も1本というような、その思考のことを収束的な思考と呼びますが、これが日常語でいう暗記能力のことです。もう1つのタイプ、拡散的な思考と呼ばれる思考があります。これは、答えは1つには決まらない、複数ありうる。日常語ですと、考えがまとまらない、拡散しちゃおうと思うかもしれませんが、そのような意味はなくてですね、答えが複数あるということ拡散的な思考というふうに呼んだわけでありまして。この拡散的思考は日常語では想像力と呼ばれています。収束的な思考も拡散的な思考も材料になるのは、既存知識や経験です。それを取り出すこの反省的な思考というのは良い悪いを判断するのではなく、振り返るといふような意味です。振り返って経験を取り出す。全く加工せずにそのままの形で取り出すのが収束的な思考であります。出てきたものはこの覚えた知識を再現する。つまり、これは暗記能力と先ほど言いましたけれども、まさに入学試験をパスする、この暗記能力は必要ですね。覚えたことを加工せずにそのまま取り出さないといけない。沢山のことを覚えなければいけない。ですから、高校生用の受験参考書には、数学は暗記だなんていうふうに、数学ですら暗記なんだと言っている先生もいらっしゃるくらいです。それに対して拡散的な思考の方は、材料は既存知識や経験と同じですけれども、振り返って取り出して想像力の解の機能となっている類推や因果推論を働かせる。沢山これを働かせて加工するわけです。映像的なイメージや言語的なイメージを作り出す。そしてでき上がったイメージというのは、このかつて自分が覚えた知識とは非常に違った格好のものになる。新たに知識が作られるということになります。この類推の働きというのはすごく大事で、これは赤ちゃんの時から働いているんですが、

類推は知識を獲得する手段であります。私たちは新しい情報を自分の中に取り込む時というのは、必ず自分の知識や経験に関係づけないと取り込めません。人は常に帰納的に考えています。演繹的な推論ではなく、帰納推論をやっているわけです。ですから豊かな知識や経験があれば、目の前の情報を咀嚼する力も非常に豊かであると、沢山のものが入っていくことになります。人は常に帰納的に考える。その時に類推というのが重要だということをおぼろげに記憶に留めてください。子どものつぶやきを見ますと、類推の働いているのはよくわかります。

3歳の男の子。夕方お母さんと一緒に夕焼け空を見ながら、感動して帰ってきました。ご飯を食べて、お風呂に入って、パジャマに着替えて、窓を開けたら満月が見えました。その瞬間の発話です。「ゆうやけこやけのかたまりだ！」さっきの夕焼け空があの満月に凝縮したというイメージを持ったわけですね。

4歳の女の子。普段「あら、雲ってふしぎだな、だれがつくっているのかしら？」。大きな工場の煙突から黙々と沸き上がる白い煙を見た瞬間の発話です。「ここで雲をつくってたのか！」。

5歳の男の子。典型的な類推の形を取っています。「おかあさんはおばあちゃんから生まれたんでしょ。それはよく知っている。じゃお父さんはおじいちゃんから生まれたの？」A対Bの知識をC対Bのよく知らないことに当てはめて考える。これは典型的な類推の表現ですね。

6歳の女の子。お通夜の席で、側のお母さんにひそひそとささやいたであろうというふうに思います。「パンダはおめでたくない動物なんだね、きっと」6歳になると展示ルールというのが働きます。身を飾る。ディスプレイするルールです。人目を気にして、自分の振る舞いをコントロールする、調節することが起こり始めますので、お通夜の席で大きな声で言ったら不謹慎。だから側のお母さんにひそひそとささやいたのではないかな、と私は思います。これは文字を見ただけで、そのように推測するわけです。ですから本当はどうか分かりませんが、きっとそうだと思います。「パンダはおめでたくない動物なんだね。きっと」

ではいよいよ、子どものウソは『嘘』か、という検証に移りたいというふうに思います。報告の順序というのはすごく大事ですよ。その出来事の前に起こったことというのが後の出来事の原因になっていることが多いのです。起こった事柄の順序が因果関係を決めるのに大事なわけです。私の娘が4歳の時に起こった事件です。実際に起こった事件なのですが、娘を登場させても面白くありませんので、お馴染みの人たちに登場してもらいます。拓哉君が慎吾君に石を投げた。お返しに慎吾君が拓哉君に石を投げ返したんです。拓哉君が泣いてお母さんのところに走って行きます。拓哉君は母親に「慎吾君に石を投げられちゃった」と泣いて訴えます。そうすると慎吾君は叱られるということになりますが、拓哉君が嘘をついたんでしょうか。こういう記憶の変化はよく起こります。心の中の観念の系列はAが起こり、次にB、次がB、Cという順序なんですけれども、たまたまBが忘れられて、AとCの連絡が強められたり、あるいは最初のことを忘れてしまってBとCが強められる。まさに今の例はこちらの方ですよ。そうすると因果の逆転が起こってしまいます。拓哉君がお母さんを探しているうちに石を投げられた、という最新の体験の記憶だけが強められる。これを親近性の効果と呼びます。最初のことがすごく強められる。この印象深く残っている。これを初頭性の効果といいます。ただいまの例は親近性の効果が起こったその結果、因果の逆転が起こってしまったということになります。この種の子どもの嘘はよく見られます。

では大人は嘘をつかないのか。こういう記憶の間違いはしないのか。ドイツのフォン・リッツ (Von Liszt) という犯罪心理学者が1902年に講義中の出来事をレポートに論文に書いています。Aという学生、熱心なクリスチャンです。「キリスト教の立場から問題を明らかにしたい」と発言をし始めると、イスラム教徒のBという学生が「そんな立場に立てるもんか」、Aは「馬鹿にしたな」とピストルを構え、BはAに飛び掛かる。あわやというところで、Von Liszt先生が2人の間に割って入り、事態を鎮めました。この直後に「今日撃したことを全部思い出してレポートに書きなさい」というふうにして記させたわけでありまして。ところがそのレポートには省略や付加、改変も多く見られました。直後であっても大人の記憶もあてにならない。特にパニックになっている時というのは、記憶の断片が、そして自分が

特に印象深いと思ったところだけが強められるということになります。情報が変わってしまうだけでなく、新たに情報を付け加わるということも起こるんです。なぜこんなことが起こるのか。思い出したものが自分にとって意味をなさない場合、意味をなすような別の出来事を想像で付け加えてしまうということを、無自覚のうちに自然にやってしまうんですね。経験を複合したり、脈絡をつける時には必ず何か新しい要素が加わります。良い場合には想像ということになりますし、悪い場合は嘘の可能性も出てくることになります。

「実は思い出すことは再構成である」というふうに言ったのはケンブリッジ大学社会心理学者のバートレットでした。1932年に『リメンバリング』という本を出版しています。私にとってその本はとても大事な本なので、何度も何度も読みましたけれども、このバートレットは「その文化が他の地域に伝わる時に、その地域の人々の知識や経験の枠組みに合わせて情報が変容していくんだ」ということを検証するために、様々な面白い実験を工夫しています。経験は再現される、文脈に合うように再構成されるんだということを検証しているんですが、文の伝言ゲームですね。最初にした、文を見せる。記憶して後ろの人に見せる。その後ろの人が記憶して、また後ろの人に伝える。こういうのもありますし、絵の伝言ゲームというのもあります。無意味な絵を2分提示する。思い出して書きます。次の人に2分提示する。思い出して書く。リレーしていくと無意味な絵が有意味化していきます。バートレットの自作からバートレットのメモまでついているデータをお見せしたいと思います。最初にバートレットがケンブリッジの学生に見せたのはこのような絵でした。無意味な絵です。1番目、2番目、3番目、4番目、5番目、6番目、7番目、8番目、9番目、10番目、11番目、12番目、13番目、14番目、15番、16番、17番、18番、と猫ちゃんになっちゃいました。最初に見せたのは、これだったんですよ。それがこのようになってしまった。だんだん意味のある形に変わっていきます。ぱっと見て「あっ、猫だ」とラベルをつけちゃうんですね。そうするとこのように再現されてくるという、そういう実験例です。では私も日本のデータからこれを検証していきたいと思いません。想起は再構成だということで、証言の信用性、甲山事件の例を持ってきました。噂話の生成と流布、豊川信金の取り付けパニック。それから口承文芸の

変遷の過程。順番に見ていきたいと思います。

まず甲山事件というのは、神戸の甲山養護施設で起こった事件であります。5歳の悟くんが保育士の山田さんによってマンホールにつき落とされて殺されるという事件。山田さんに有罪の判決が出た事件であります。4人の子どもの証言が、山田さんが犯人だという決め手になった。事件の夜、保育士の山田さんが悟くんを非常口から連れ出すのを見た、こういうふう子どもたちが証言したわけです。何と犯人特定の決め手となった証言は、1人は事件から15日後のもの、3人は3年以上経ってから後の供述でした。Von Lisztの教室で起こったこと、直後であってもあれだけ誤るんです。子どもが15日後、3年以上後に取られた証言によって、このような山田さんが真犯人とされてしまった事件なんですね。過去の記憶というのは、現在の物語です。目撃証言は今現在の語りの中に生み出された過去であります。目撃証言は解釈されたものとしての語りです。検察や判事などの前で語られ、解釈されて初めて目撃証言になります。検察の筋書きというのは前にある。この人が犯人だというふうに思っていると、それを特定していくようにその情報をゆがめていってしまう。バイアスがかかっています。つい最近起こった足利事件もそうでした。それから、あの厚労省の局長さんの事件もそうでした。大阪地検ですね。実はこの甲山事件、大阪地検がやっています。本当に厳しいところですよ。聞き手の解釈の構造に依存するという事なんですね。特に裁判官もそれから取調官もですね。質問を繰り返すということをよくやるんです。答えがはっきりしている場合は質問は繰り返しません。コミュニケーションを冗長にしないためのルールが働いているからです。

会話にはスムーズな会話を進めるために4つの公準、つまり、会話協力の原則が働いていることを定式化したのはグライスという社会言語学者が、1975年に発表しています。まず4つの第1番目、量の公準：必要十分な情報を提供せよ。質の公準：真実を述べる。関係の公準：相手の発話に関係するように。様態の公準：簡潔で秩序ある表現にせよ、というこの4つであります。私は以前実験したことがありますが、4歳の子どもでもこの4つのルールを使っているということが分かっています。大人が質問を繰り返しますと、子どもは「あっ、同じように答えちゃいけないんだ。自分の今の答え、間違えていたのかな」というふうに考えてしまいます。そして質

問者の期待を敏感に察知して、大人の期待に応ずるように他の答えを探そうとするんです。

裁判の速記録からちょっといくつか持ってまいりました。弁護士：「そしたらね。その人は女の人だったか、男の人だったか？」子ども：「女の人」「どうして女の人だとわかった？」。約15秒。ポーズがあります。沈黙があります。私は少年事件の供述分析を依頼されることがあるんですけども、必ず音読するようにしています。自分の発語器官を通すことによって、その証言している子どもの気持ちが推測できるように思うからです。特に沈黙のところ、ここできっと迷いがあったんだろうな。15秒も黙っている。「今聞いているのは、最初に君が女子棟の廊下の入口の境のところで見たと言うたでしょう？ 2人を見たというたな」「はい」。弁護士「その時にわかったかどうかということを知っているんだけどね。その時に女の人だということがわかったの？」「はい」「それではどうして女の人だとわかったのかな」。40秒黙っています。思い出せないのと言えないんですよ。「思い出せへんかなあ」。また繰り返します。また黙っています。これ以上押さなくて良かった。何か捏造してしまいますから。沈黙しているというのは何よりも雄弁です。わかんないんですよ。同一の質問の反復で回答をひねり出したところもあります。「最初の廊下の入口の境のところから見た時、その人の顔は見たの？」。黙っています。弁護士「最初に見た時だよ」「いいえ、見なかった」。おそらく思い出せなかったに違いない。「最初に見た時だよ」と言われたので、「いいえ見なかった」と言っています。それから択一式クローズド・クエスチョンというのは裁判官がよく使います。それに切り換えて一方の選択肢を強制的に選択させてしまう。「わからない」という言葉を許さない質問の仕方です。「その後ろの人と悟くんとの間やけどな。これは体がひっつくくらいかな？」子どもは黙っています。思い出せないんですよ。何秒かは書いてなかったの、とにかく沈黙があった。裁判官が割って入ります。「ひっつくくらいかそうでないかまず教えてください」。思い出せないな、黙っています。弁護士、同じ調子で繰り返した。「体がひっつくくらいかそうでないかまず教えてください」。子どもはここで観念します。しばらく沈黙があった後、「ひっつくくらい」。おそらく消え入りそうな声で言ったに違いありません。回答ができなかったのに、回答可能へと変わった箇所もあります。「さっき、男子トイレから玄関を



通って、女子棟の方へ行っただと言ってくれたね」「はい」「その時、君が歩いて行って、男子棟の廊下とか、玄関とか、女子棟とか誰かおりましたか？」「いいえ」。弁護士「女子棟の廊下には誰かいたのかなあ？」。変だなあ、いいえって答えているのに。1分15秒かかっています。弁護士「質問わかっていますね」「はい」。だから、いいえって答えたのにと子どもは思っているし、裁判官が割って入ります。「質問がわからなかったら、もう一度言ってちょうだいと言いなさい」「はい」。この「はい」はこの「わからない」ではなく、「言いなさい」に対するさっきの関係の公準が働いています。「はい」「女子棟の廊下に誰かいたのかなあ？」。3度目です。もうやむをえない。しばらく沈黙があった後で「悟君と沢崎先生いた」「それは君、見たわけやね」。もうこれを答えちゃったから真実を述べよという公準のところで働き「はい」「いいえ」だったのが「はい」に変わってしまったという箇所です。こんなふうはこの甲山の供述を分析していきますと、問題点が非常に出てきます。事件直後の供述では、山田さんが悟君を連れ出した時刻や文脈が違っているんです。これは日常的な記憶を語った可能性があります。繰り返しの事情聴取の中で殺人事件の文脈に、整合的にマッチするように情報がどんどん変容してしまった。質問者の思い込みが、思い込みを指示する供述を引き出してしまっている。社会心理学ではこれを確認バイアス、自分の証言に確認を与えるような、そういうバイアスが働いています。証言した時には、知的障害があると精神発達遅滞児の施設ですから、体験していない嘘を作り出したり、嘘をついたりすることはないだろうというようなことで、供述過程の分析を怠ってしまったわけですね。山田さんも最終的には自白したといっても、「私がやりました」とは言っていないんです。最後はもう参ってしまって、連日の過酷な状況での取り調べにすっかり神経が参ってしまいまして、弁護人との接見も十分に行えない。無意識のうちにやったと思いきまされて、虚偽の自白を強要されます。山田さんは、最後は「すみません」とこういうふうに言ってしまった。「ほい、それ入った」これで自白した。裁判にかけられてしまったわけです。

この裁判の供述分析を私の友人の浜田寿美男さんという発達心理学者、奈良女子大の教授が供述分析をしまして、意見陳述を裁判所に提出し、山田さんは無罪を勝ち取りました。しかし、やはりこの時の恐ろしい体験というのが心の傷になって、山田さん

は二度と保育の場に、あんなに保育、保育者になりたいと思って、希望を持ってその保育者になった山田さんは、二度と保育の場に戻ることはできなかったという事件であります。ゆえに証言の信用性は極めて低い。会話の中で証言がどんどんある筋書きに沿って作られていく。これはおわかりいただけたのではないかと思います。

では嘘から出た誠。豊川信金の取り付けパニックの例。1973年12月13日に起こった事件であります。発端は8日の朝、電車の中の女子高校生の会話です。豊川信用金庫に内定したAに「信用金庫なんて危ないわよ」と友だちが言った。決してここでは豊川信用金庫とは言っていないにもかかわらず、自分が豊川信金に内定していますから、豊川信金潰れるのかもしれない、こう思ってしまったんですね。そしてこのAは下宿先のおばさんにこれを告げます。その方が兄嫁に電話で伝えた。兄嫁はかかった美容院で美容師さんにそれを伝える。そして美容院の女主人がパーマをかけに来た親戚の女性に「悪い噂があるよ」と言って伝えた。この会話を小坂井町のクリーニング店主が小耳に挟む。そして噂の舞台は小坂井町に移る。いったんは停止します。再燃したのが13日の午前11時半のことです。当時は携帯を持っていませんから電話をかけるわけですよ。クリーニング店に10円を払って電話を借りに来た男性がいます。「豊川信金に行って、すぐ120万円を下ろして」奥さんに電話していた。その会話を聞いて、そしてGは本当にクリーニング店主の妻は「噂じゃなくて本当だったんだ」ということで、夫は信用金庫から180万円を引き出します。そして妻と夫で手分けをして友人、知人、得意先に知らせてやる。知人の中に当時の飛び道具であるアマチュア無線をやっていた人がいますから、飛び道具に乗ってアマチュア無線のハム仲間にあつと一斉に広がって、みんながお金を下ろしに行きましたので、豊川信金は潰れてしまいました。

実はこういう噂が流布する背景には不安があります、人々の。やはりこの地域というのは、その中部日本産業という金融機関が倒産していたんですね。今や私たちも拓殖銀行ですら倒産するのですから、銀行というのはちょっと危ないかもしれない。1,000万円以上になったら、もう保証はされないかもしれない。こう思っていますよね。でも当時は銀行ほどお堅い商売はなかったわけです。ですからその当時ですね、この地域の人は金融機関は信用できない

んじゃないかという思いがあったんです。漠然としたそうした不安が心理的な基盤となって、このデマを聞いた時に「損はしたくない」ということで、みんながお金を下ろしてしまったという、そういう事件であります。

口承文芸も時代とともに移っていきます。平安時代の物語の作者は不明でした。『源氏物語』も『紫式部日記』もなければ、誰が作者かわからなかったと思われまます。当時の作者の名前は作品に記されませんでした。当時は、「著作権」の考え方はなかったんですね。しかも印刷術もありませんから毛筆で写していきます。作者以外の他人が手を加える余地は大いにありました。『伊勢物語』については片桐洋一さんという国文学者が丁寧にこれを検証しています。1人の作者が作り上げたものではなく、少なくとも3回以上70年以上にわたって増補されつつ、成長増殖してきたことが明らかにされています。意味的に重複、繰り返している部分は1つにまとめたり、挿入的に注釈が加わったり、感情表現が増えたり、文の配置場所が変わって、原文よりも後の時代の方が、構成が巧みになっているとか、情景描写が増えているとか、原文を尊重するあまり手を加えずに取り込んでしまって一部文体が違っている箇所もあるなどをもって、おそらく何人も人が手を加えて、『伊勢物語』というのが今の形に変わってきたのだろう、というふうに推測しておられます。語るということにも情報が変わってしまう秘密があります。それは文法、あるいは談話の文法を使う場合ですね。文法というのは言葉を並べて文にすることですよね。談話の文法とは言いますと、これは初めてお聞きになるか、あるいは小久保先生の授業でお聞きになったかわかりませんが、談話の文法というのは、文章を並べて物語を構成するための枠組みになるものがあります。私はこの語りを支える談話の文法が何歳ぐらいに成立するんだろうかということを疑問に思って、1980年代には文京区内の幼稚園、保育所を回って子どもたちから語りを採集しておりました。そうしますと5歳後半頃に談話の文法が成立する。普通の文の文法は3歳ぐらいに成立します。「わ」と「が」の使い分け、何々はどうした、何々がどんなだというような、「わ」と「が」の使い分けが大人並みになるのは、5歳後半ですけれども、ほとんどの文法が3歳ぐらいに獲得されますね。談話の文法は5歳後半ぐらいから獲得されます。こうなると子どもは長い語りができるようになる。事件や出来事を

語るようになります。それをテープにとって文字に起こして構造分析をやりますと、起承結構造、中には転、不思議な出来事を間に挿入する子どもまで現れます。また「昔々あるところに」なんていう言葉を使ったり、味噌っかすが解決の鍵を握るお伽草子のような語り方をするお子さんもいました。この実験をしている時にですね、9月夏休み明けに、ある幼稚園に行った時にそこの5歳10カ月の貴子ちゃんという、さっきみたいに絵カードを出して「お話してくれる」と言ってお話をしてもらった後にですね、その子が言いました。「私ね、前にお話作ったことあるよ」「どんなお話?」「星を空に返す方法というの」「あらそう、面白そう。聞かせてくれる」と言ったら「うん、いいよ」と言って聞かせてくれたんですね。お聞きください。星を空に返す方法、貴子ちゃん5歳10カ月のお話です。

7月15日はうさぎさんの誕生日です。今日は7月15日、うさぎさんの誕生日だから森の動物たちが集まってきました。そしてみんなで食事をしているときにケーキの陰から星が出てきました。星はみんなに言いました。「ぼくね、空からおっこっちゃったの。だからね、ぼくをね、空に返して」と言ったら、みんなはびっくりしました。「空に返すって?」「そうさ、ぼくは空の星さ」「星?」とみんなはびっくりしました。そこで象は言いました。「おれに任せてよ」。と象はその星を自分の鼻に入れると、勢いよく飛ばしました。それでも星はおっこってしまいました。そしたらこんどはみんなで相談をして、うさぎが言いました。「そうだよ、ながーい笹を持ってこようよ。それに星をのせてあげてさ、そしてさ、また、その笹をさ、伸ばしてさ、空までさ、送ってあげるのさ」とうさぎが言うと、みんなは「そうしよう」と言って、笹をとってきました。そのなかでも一番笹が長いを取ってきたのはネズミでした。ネズミは、手がゆらゆらになって、すごく長い笹を持ってきました。みんなでそのさきに星をのせると、土の中に埋めて1日待ちました。そうすると、その笹は1日だというのに、ぐんぐん伸びて、空に届きました。そして星は空に帰ることができました。そして、その誕生日が終わったあと、みんなが、家で空を見ると、キラキラ光っている、とてもきれいな星がありました。みんなはその光ってる星を、きっと落ちてきた星だと思ったのです。おしまい。

いかがでしょうか。すごくきれいな構造のお話になっていますよね。7月15日はうさぎさんの誕生日だ。誕生会のエピソードが開始されます。誕生会につきもののケーキの陰から星が出てくるという事件のこと。星を空に返してあげようということで、まず象さんがやってみます。しかし失敗してしまいます。みんなでどうしようと相談をする。うさぎさんの提案で筐を持ってくることにしました。一番長い筐をとってきたのは、ねずみくん。ねずみくんは手がゆらゆらになって、一番長い筐をとってきたわけです。その筐は1日だというのに天まで伸びていって、こういうふうに言っています。1日だというのに。逆説の接続助詞。これは物語のうそっこのこと、こんなことは現実には起こらないけれども、これはお話の中のことだからということで、こういった虚構であることを告げるような接続助詞を使っているわけです。そしてその筐は天まで伸びて、星は空に帰ることができました。その誕生日が終わった後、うちに帰って空を見ると、とてもきれいな星があったということで、この誕生会のエピソードの中に星の事件が3度も繰り返して、味噌っかすが解決の鍵を握るといって、常套のよく使われる語りのパターンをとって解決にまで至るといってそういう構成をとっております。この1日だというのにという虚構認識というのは、いつ頃から子どもはできるのか。うそっこと本当を区別するのはいつ頃からなのか。加用文男さんのデータからご紹介したいと思います。

加用文男先生は京都教育大学の遊びの研究をされている先生です。ご本人も砂遊びが大好きで、砂団子学会というのを作ってしまってますね。まあ幼稚園や保育園なんかで5歳さんなんかはもう砂団子作りに夢中ですよ。いつものように観察をしています。あ、いつもの先生来ている。それで子どもがプレゼントします。「お団子どうぞ」で、先生は「ごちそうさま」と言って、パクッと口に入れるマネをする。パクッと口に入れて食べると捨てますが、入れた瞬間に子どもがどういう反応をするかを見ているわけです。3歳は平気で遊び続けています。4歳はびっくりして困ったことが起こったあつて、目をまんまるくしたり、モジモジしたり、涙目になってうつむいちゃったりする子も出てきました。5歳になると「本当に食べちゃだめ、うそっことで食べるマネすんの。お砂って、ぱっちいんだ。ママが言ったもん、猫ちゃんがお砂場におしっこをするかもしれないって」。この時代はママが絶対ですから、「ママ

が言ってたよ。猫ちゃんがお砂場におしっこするかもしれないって」とそんなふう言うんですね。中にはすぐに現実に戻って「あ、いけないんだ。先生、この人、砂食べはった」。言いつけに行ったりした、そういうお子さんもいたそうです。はっきりと5歳になると、うそっこと本当というのを会話の中でも使い、うそっこ、本当か区別することができるわけでありまして。このうそっこと本当、虚構と現実の関係づけにはカットバックがよく使われます。夢の中の出来事という演出の力ですよ。1つ作品を持ってきました。宮沢賢治さんの『銀河鉄道の夜』です。ジョバンニが親友のカンパネルラと銀河鉄道に乗って、不思議な旅を体験します。この体験は夢の中の出来事なんですけれども、それを次の文章は示しています。ジョバンニは目を開きました。元の草の中に疲れて眠っていたのでした。胸は何かおかしくほてり、頬には冷たい涙が流れていました。このメッセージを聞いた途端に子どもたちは、ここで時間を止めます。そして巻き戻す。いつから夢を見たんだっけ。あ、病気のお母さんのために牛乳を買いに来たんだっけ。牛乳屋のおじさんが留守だったので、おじさんの帰りを待って側の草むらに寝転んだジョバンニ。空を見上げたら満天の星空。汽車が降りてきて、ジョバンニは誘われるようにその汽車に乗り込みました。貨車の中にはお客さんたちがいて、楽しそうにおしゃべりをしたり、お弁当を広げたりしています。1つ席が空いている。ジョバンニはそこに座ったら親友のカンパネルラが座っていました。あ、一緒に旅しよう。プリシラ、宇宙ステーション、美しいところを旅して回ります。やがて貨車の中のお客さんは1人、2人と降りていく。心配になったジョバンニは何度もカンパネルラに「一緒に行くよね？」確認します。カンパネルラは最初はどうもうなずいている。やがてうなずかなくなる。そしてすーっと立って、降りていってしまいます。その背に向かって、「カンパネルラ、カンパネルラ」、ジョバンニは声を限りに叫びます。その叫び声で気が付いた、目が覚めたのは、この瞬間。頬には冷たい涙が流れている。その冷たさに気が付いたのがこの瞬間でした。宮沢賢治の作品には、時間の調べというのが非常に巧みでありまして、物語の現実時間ではカンパネルラが貨車から降りた時間というのは、カンパネルラが亡くなった時間に一致しています。村の悪童のザネリ。いつもジョバンニをいじめていたいじめっ子のザネリは川にはまっておぼれそうになり、そのザ

ネリを助け出そうとして、カンパネルラは自分も飛び込んでザネリを助けることはできたけれども自分自身は亡くなってしまった。その時間に一致しているという演出をとっています。他の作品にも不思議なこの時間の操作によって、不思議な世界、ファンタジーの世界を演出しています。この時間の巻き戻しのために可逆的な操作というのを使っているわけです。

可逆的な操作にはみんな研究者たちが注目してきました。因果推論の道具であるからなんですね。因果推論するために、可逆的な操作というのを使っているからです。何歳頃から使えるか？ 20世紀最大の発達心理学者、ピアジェは「7～8歳頃から」と言っています。哲学者のカントはア・プリオリに「先見的に因果スキーマで、因果の枠組みで、出来事をとらえるくせを持っている」と言っています。生後4カ月くらいからその前と後、前に起こったことが原因で、後の出来事は結果であるというとらえ方をしているということを指摘したのは、スペルケという発達心理学者です。私はその時間概念が1つの鍵になっているのではないかと。空っぽのかごと荷物がいっぱい入っているかど、「どっちが先、どっちが後」という質問をしてみますと、5歳後半になると、「こっちが先だよ」と空っぽの方のかごを指します。「どうしてそう思うの？」「だってこっちはいっぱい荷物が入っているから、お買い物した後だと思う」とちゃんと理由付けが言えるんですね。ですから5歳後半くらいから時間概念の成立によって可逆的な操作が使えるのではないかという仮説を立てて、次のような実験をしてみました。順番につなげる。正雄ちゃんは大きな石につまづいて転んでしまいました。そして血が出て泣いています。順番につなげる。逆につなげる。正雄ちゃんは怪我して泣いています。だってさっき大きな石につまづいてしまったからです。時間を巻き戻させるような逆行条件ですね。出来事が起こったのはこちらですが、先なのは1、2ですが、2から話を作ってもらって、これはとっても子どもたちにとっては難しいんです。「う～ん、本当は芽から朝顔になるんだけど、それでもこっちから作れないかしら」というふうに言うと、「う～ん、朝顔が小さくなって芽になった」とつなげてしまいます。そこで簡単な訓練をやってみました。これ、こういう実験をやってみますと、小学校に入る前まで、直前になっても逆向きの話は作れないものから、非常に簡単な訓練をやってみたんです。こっ

ちが先でこっちが後ということを変えずにこっちからお話するには「つなぎの言葉を入れるといいよ」というように言うんですね。「お人形さんの足が取れちゃった。だってさっき美穂ちゃんとまりちゃんが両方から引っ張りっこしちゃったから。こういうふうになると、こっちが先でこっちが後という順番を変えずにこっちからお話できるでしょう。マネして行って」と言う。3回練習してもらいます。それだけで5歳後半を過ぎますと、見事に今のようなつなげ方ができるようになります。そのモデルの文を見ただけで自発的につなげることができるのは5年生からでありました。しかし可逆的な操作そのものは5歳後半くらいからもう理解されているんだということがわかります。わかりました。ではこの詩は何歳くらいの人が作ったのでしょうか。推理してください。

まだ おさないころ 五才の時  
よく 本の中の星の 王子さまに  
あこがれました

中学生になったころ 一三才の時  
たくさんの恋に  
希望をもちました

年ごろだね といわれるころ 一七才の時  
たしか三つ年上のあの人に  
初恋を感じました

みちがえたよと いわれるころ 二十才の時  
いまの主人と  
愛しあったことを 思い出しました

いまでは もう 三十をすぎましたが  
ふと 思い出す  
むかしのことです

そう わたしの前を  
足音もたてずに  
すぎていった 思い出です

とおい とおい  
なつかしい なつかしい  
思い出です

何歳くらいの人でしょうか？ 何歳くらいだと思います？ 言って、勇気を出して、どう？ どうでしょう？ 3番目の方、何歳くらいだと思いますか？ 35歳。35歳。はい30を過ぎましたから35歳ね。もっと上だと思おう方？ はい。いかが？ マスクの。80。86。80歳くらい。はい、そうですね。結構、現実感がないですよ。子育て真っ最中の35歳の人だとかいう詩を作るかなあって思われるでしょう。では正解を申します。これには正解があります。作者がいますから、河田宣世さん、小学校4年生、10歳が作った詩です。河田さんは残念なことに14歳の時、ビルから飛び降りてなくなってしまいました。河田さんのご両親もう諍いが絶えない。夫婦げんかが始まるとその声が聞きたくなくて河田さんは自分の部屋に閉じこもる。耳をふさいでも聞こえてくる。それで文章を書いたり、絵を描いたり、将来は漫画家になりたいな。絵コンテを描いたりしているうちに現実が遠のいていきます。こうやってしのいできたわけです。そして中学に入ってやはり両親の諍いというのは絶えない。姉は、2人姉妹ですが、お姉ちゃんの方はお母さんっ子。お母さんの期待通りに育っていく。宣世さんは、そのお母さんが大嫌いな「お父さんにそっくりだ」「愚図だ」「のろまだ」と言われて、あんなふうになったらいけない。いつも叱られていました。14歳の時に飛び降りてしまったんですが、それでお父さんがお部屋に入ったら、河田さんが残した作品が段ボールの中に入っていました。「何とか遺稿集を出版したいんだけど」ご相談がありました。私の教え子が編集者をやっている偕成社という絵本の出版社、中村さんという人に連絡をして遺稿集を出していただきました。『あこがれはマンガ家』というタイトルで、河田宣世というのは、さんずいの『河』です。河田宣世は、宣言の『宣』と書いて、世界の『世』と書きますから『あこがれはマンガ家』というタイトルで偕成社から出版されています。この作品もその中に入っていますが、ちょっともう絶版になっていますので、Amazonなんかでないと手に入らないかもしれません。で、実はあとがきに彼女が憧れていたという新井素子さんという漫画家さんが素晴らしいメッセージを書いてくださっています。私も親や教師に向けて「サインを見逃さないで」と書きましたけれども、それはどうでもよくてですね。やはり新井さんの文章は素晴らしいので、もしよかったら探してお読みください。

では、もう1つ、嘘をつくためにはですね。相手

の視点に立てないと嘘はつけません。相手がどう思っているかを考えて欺かないといけないわけですから。他人の気持ちがわかるのはいつ頃からか。うさこちゃんは赤い色が嫌いなので、うさこちゃんのお誕生日におばあちゃんが赤いブーツをプレゼントしてくれたんだって。うさこちゃん、どうする？ なんて言うかしら？ これは、展示ルールと呼ばれるものです。人目を気にして振る舞い方を変えるかどうか。これは何歳くらいからかということで、次のような実験をしました。赤色の嫌いな青い洋服を着た、うさこちゃん。お誕生日に赤いブーツをプレゼントされた時にどうするのでしょうか。3歳「いらぬよ」「どうして？」「赤嫌いよ」すぐ答えてくれます。そして5歳もすぐに答えてくれます。正反対の答えをします。「喜んでもらう。ありがとうって言う。だっておばあちゃんがせっかくなくれたんだもん。僕だったらそうする。でもね僕のおばあちゃん、僕の嫌いなものは知っていて、嫌いなものはくれないけど」。何重にも人の気持ちに立てる。で、4歳が一番大変です。将来この中で幼稚園の先生や保育園の先生になられる方があるというふうに聞いておりますが、やはり3歳、4歳、5歳で一番面白いのが4歳です。しかし一番大変なのが4歳なんですね。4歳さんは本当に恥ずかしがり屋、3歳はもう自分を発散するタイプですけれども、4歳になると引っ込み思案になります。でも頭の中ではいろんなことを考えているんですね。私は4歳さんのことを恥ずかしがり屋の4歳児というニックネームを謹呈しています。もうこの4歳児は3歳の時にできていたことが、ちょっといっぺんできなくなっているように見えます。そういう時、責めたらいけない。待ってあげないといけない。そしてやりたくなったらやりやすから、しっかり待つ、見極める、急がない、急がせない。4歳さんには関わる必要があります。4歳は頭の中で忙しく働いています。しかし行動では3歳よりも、ちょっと遅れているように見えるんですね。頭の中ではこんなことを考えているんですよ。

「てっちゃんは後から考えているの。だから早くお話できないの。てっちゃんにいろんな言葉を覚えたいの。てっちゃんの頭に、おしゃべりすることいっぱいあるんだから」。まさに4歳さんの典型的な発想です。これは灰谷健次郎の『保育園日記』から取ってきましたけれども、このてっちゃんの言葉ですね、まさに4歳児を表しています。ぜひこの灰谷健次郎の『保育園日記』読んでみてください。もう子

どもたちの宝物のような言葉の数々がそこにありませんから。

で、いよいよ結論です。幼児期には他人を騙そうという意図のあるような、いわゆる大人が考えるような嘘はつけません。大部分は出来事を思い出し、考えているうちに話全体の筋道を変えてしまうような結合を考えたり、つけ加わるために嘘をついているように見えるだけなんです。ゆえに子どものウソは、いわゆる大人が考えるような嘘ではありません。大人が子どものウソを嘘にするのです。会話するうちに話の筋が通るように共同で加工してしまいます。

「嘘ついたでしょ」と非難、叱責されると子どもはこれが嘘というものなのかと戦略的に嘘をつくようになります。ですから嘘つきにしないためには、幼児期に関わる大人の態度が大事ですから、うちの子には、うちのクラスにはいじめっ子はいない。嘘つきはいない。性善説で子どもを信頼し、愛してあげる。これが幼児期の子どもたちに関わる大人の大事な、基本的な姿勢ではないかなというふうに思います。ゆえに子どものウソは『嘘』ではありません。

では3番目のトピックス、親の早期教育への期待にどうこたえるか。今、学力低下というのが問題になっています。OECD がやった国際学力比較調査、PISA 調査、たぶんレジュメにはないかもしれませんが、新たにちょっと付け加えましたので、PISA 調査と言われるもので、高校1年生を対象に全国6,000名の高校1年生が夏休みに参加する学力調査です。ここで問題は、PISA型と体力、考える力を確かめるようなとらえ方になっている読解力ですとか、それから数学の応用問題、文章題。それから理科なんかのグラフを読み取って数値を推測したり、あるいはこの後の変化を読み取ったりというような応用問題ですね。そこがものすごく点が下がっておりまして、特にPISA型読解力はOECD加盟の先進諸国の中で最下位ということなんです。これは夏休みにやるものですし、「内申点には関係ないよ」と言ってテストされますから、ちょっと手を抜いてしまうというのはわからないでもない。

ところがですね、これがPISA調査に限らないことがわかりました。全国学習状況調査というのが行われています。小学6年生、中学3年生、2007年、2008年、2009年に行われたテストであります。基礎的、基本的な学習内容は概ね理解して8割方取っています。課題は活用力が足りない、知識・技能を活用して思考し、表現する力に課題があるということが

出てきました。この全国学習状況調査は学習指導要領を改訂するために、その資料を取るため、データを取るためということになされていて、学習指導要領は2010年から改訂されましたけれども、その後は仕分けにあってしまって、これまでは2009年までは全国が参加していました。全国の小・中学校が。ところが2010年は、これは希望参加でしたが、結果的には全国調査になりました。また同じ結果が出ました。論理力、記述力は依然改善しなかった。そして2010年の7月28日、ちょっと恐ろしい結果が出たんですね。というか、そういうプレス発表を文科省はやりました。幼稚園、保育園通園と学力格差。つまり幼稚園卒の子どもの学力が一番高く、それから保育所に通っていた子どもが2番目で、最後にどこにも行っていない子が一番成績は低かった。このことから幼児教育の大切さというのが検証された、とこういう発表をしたわけです。これは非常に問題で、幼稚園に通っている家計の所得というのは比較的高いと思われませんか。専業主婦の家が多いわけですから。そして保育所の場合には、もちろん両親とも働いているというような所得の高い人も入っていれば、生活保護世帯も入っている。シングル世帯、交通遺児の世帯も入っているということで、非常に裾野の広い分布を示しています。それからどこにも行っていない子というのは、実は5歳児人口の3%に過ぎません。これは障害のあるお子さん、それから離島に住んでいて船でないと保育所に通えないというようなお子さんなんですね。それを敢えてこういうプレス発表したということで、4紙が、朝日と毎日と読売と日経が私の研究室に取材に来られました。文科省でこういうプレス発表がありました。本当にそうですか。そして私は計算をしてみたのですが、幼稚園と保育所の差は3点、これは統計的には有利ではありません。そして幼稚園とどこにも行っていない子の間は11点で5%水準で有意でした。しかしこれは天に向かって唾を吐くような、そういう発表ですよ。幼児期にどこを卒園したか、卒業したかで学力が違って来る。そうしたら小学校や中学校の先生は怒っちゃいますよ。自分たち、教育しているのに。そうでしょう。それと、追跡していったわけではないのでね。そういうことは言えません。因果関係のような発表は間違いです。あるいは曲解して、そういうことにしたかったのかもしれませんが。こども園を10年後に作りますから、主導権を文科省が持ちたいという、そういうのが見え見えの解釈で

あります。

私たちは読み書きの習得に経済格差は影響するかという研究をしております。日本、韓国、中国、ベトナム、モンゴル、5カ国比較に取り組んでいるのですが、幼児、3歳、4歳、5歳、全員、個人面接でデータをとっているんですね。研究室を挙げてやっている研究プロジェクトなんですけれども、これで見ると、これは日本のデータです。2008年度のデータですけれども、読み書きに関しては、5歳になると家庭の収入による差はなくなります。家庭の収入というのは、低と高、高いのと低いのはどこでカットしたかということと700万円のところでカットしました。2008年度の子育て世帯の平均総所得というのは691万円ですから。私は東京都内の幼稚園、保育所で測定しましたので、少し都会の方が所得は高い。700万円は中央値でしたので、そこで切ったんですね。そうしますと、読む71文字をカードにしてどこまで読めるか、あとはアルファベットの読みも調べまして、それから書きはこれは文字を書かせたのではなく、各指先の運動技能の発達を見るためのテストであります。プラスとかマルとかひし形を模写させるというようなテストをいたしました。その準備は5歳後半で整っています。文字を教えても入る。それからもう1つ語彙検査、これは会話語彙検査です。絵を見て4枚の絵カードの中から三輪車は？ 赤いのは？ こぐは？ 食べるは？ というふうにして動詞や名詞やそれから形容詞、そういったものの知識を問うもので、これは知能テストの代わりに使いました。語彙検査と語彙能力と知能検査の間には非常に高い関連がありまして、ほとんど語彙検査で測定した測定値は知能テストで測定した測定値とほぼ一致するということがわかっていて、多くの研究者は知能テストに2時間かかりますから語彙検査は5分でできるので、語彙検査を使うことが多いのですが私たちもこれを使いました。他の国でも標準化されていますので、絵柄はその文化に特有なもの替えてありますが同じテストを使っております。語彙能力による、語彙能力には収入による格差は偏在化してしまいます。ものすごく大きな差が出てきてしまったんです。「へえ」というわけですね。保育形態による語彙力の差も出てきました。自由保育、子ども中心の保育や自由遊びの時間の長い幼稚園や保育所の子どもの語彙得点が高いという結果が出てきたんです。自由保育はブルーなんですけれども、これは非常に面白いと思いました。幼稚園の中

には、対象園の中には、英会話の時間、読み書き学習の時間、算数の時間、まるで小学校のようなそういうふうな時間割を組まれている幼稚園もあったのですが、そういう幼稚園のお子さんの語彙は有意に低いという結果が出てきました。それからいろんなテストをして、親の調査もしましたし、子どもたちを担当している保育所や幼稚園の先生方にも調査をご協力いただいていますので、いろんな要因を調べたんですが、しつけスタイルと語彙能力に非常に関連があるというそういう結果が出たんです。語彙得点が高い子どもは共有型しつけを受けている、子ども中心にしつけを受けている。語彙得点が高い子どもは強制型のしつけを受けているということがはっきりと出てきました。そしてその5歳さんが小学校に入った。1年間学校で勉強して、さて幼児期の語彙能力や読み書きの能力、それからしつけのスタイル、あるいはいろんな塾に行っているというような、行っているのかどうか、そういう要因がどう小学校の学力に影響しているか。1年間終わった後でPISA型の1年生版を作りまして、三段論法推論課題とか、その理由づけを考えるような課題とか、それからカタカナの書写ですね、それから漢字を書いてもらうとか、そういう問題から構成されていますけれども、国語学力テストを受けました。そうしましたら幼児期の語彙能力と書き能力は有意に影響を与えています。同じ子どもが小学校1年生になっていますから、これは相関関係ではなく、因果関係が確認できました。因果的につまり語彙が乏しかった子どもは、国語の学力が低いのに、語彙が豊かだった子どもは国語の学力、特に考える力を試すような課題で力を発揮します。書く、これは文字を書くのではなく、ひし形の模写とか、まるの模写とか、手の指先の運動機能の準備の状態が良かった子どもはやはり国語の学力が高い。そういうふうなことが出てきました。読みも弱い関連がありました。それから面白いことに、幼児期のしつけスタイルで共有型しつけを受けている。子どもと一緒に楽しい時間を過ごすのが好きだ、一緒に外出や旅行するのが好きだ、子どもにたびたび話し掛ける、家族で食事の時に団らんがあるとか、楽しい会話をしているとか、子どもが喜びそうなことをいつも考えて1人の人格を持った存在として大事に子どもが扱われている、そういうしつけのスタイルをとっている。そういうご家庭では小学校になって国語の成績が有意に高い。因果関係です、これも。子どもの得点として出てきました。ま



とめで強制型しつけは逆に有意に低い。所得が高い家庭でも強制型しつけを受けていた子どもの国語の学力テストも成績は低いという結果が出てきたんです。まさにこれですね。なぜそうなったか。例えば夫の学歴だとか、それから家庭の収入、母親にはどうにもならない部分があります。しかし、しつけのスタイルだったら、子どもへの関わり方を変えられるということができる。子どもとの触れ合いを大事にする。そして子ども中心のそういうしつけのスタイルをとっている親のもとで、子どもの学歴の基盤力というものが伸びていく。語彙が豊かになる可能性があるということですよ。これは操作可能な変数です。ですから万歳、いうふうに思ったわけです。小学校の学力への影響力をまとめてみますと、幼児期の語彙能力と書き能力は小学校の国語学力に因果的に影響する、因果関係があるということが確認できました。これは、同じサンプルを追跡した結果出てきたものです。幼児期のしつけスタイルは小学校の国語学力に影響する。子ども中心の共有型しつけスタイルは語彙得点や国語学力の成績に影響していることが明らかになりました。それと保育もそうです。自由保育、子ども中心の保育を受けている子どもたち、それから自由遊びが長い保育所での子どもたち、保育所を出た子どもたちは、やっぱり遊びの中で自分の関心を十分に伸ばしていますから、好きこそ物の上手、ということで、「さあ、お絵描きの時間」「さあ、あいうえおの時間」本当はもうちょっとやっていたいのになと思って、そこで切られてしまうということで、やはり子どもの関心の芽が摘み取られてしまっているんじゃないかと思われま。でも自由保育、子ども中心の保育やそれから自由遊びが長い保育所での生活では子どもが自分の関心を十分に発揮し、それを伸ばすことができる。そうしますとそうした子どもたちは、語彙得点や国語の成績、国語学力が高いというような結果が出てきました。逆に強制型しつけを受けていると語彙力や国語の成績は、低いということが確認できました。文科省が先程言った幼稚園卒が一番成績が高く、保育所卒がそれに次ぎ、どこにも行っていない未就園の子が一番低い。このことをもって幼児教育の大切さを提唱したというプレス発表、これは誤った解釈であります。あるいは意図的な曲解であると考えられます。つまり幼稚園、保育園の保育の質の違いが小6～中3まで続くと、どう考えたって考えずらいことです。これは世帯の所得格差やしつけのスタイル、家庭の親

子の関わり方の違いが、これは小学校になっても、中学校になっても変わりませんよね、その家庭の雰囲気は。特に低所得層では蔵書数が多いご家庭で語彙が豊かというのが出ています。ですから親が本好きである、活字に親しんでいる姿を子どもが見ている、幼児期に絵本の読み聞かせをたっぷり経験した。そういったことが言葉の豊かさを育てているということがわかります。家庭の親子の関わり方の違いが学力格差につながっているのではないかと。これは読売新聞に出していただいたコメントであります。そこで私の方針ですけれども、50の文字を覚えるよりも100の何かを育てたい。自分から本当にやろうとしないと自分の力にはなりません。自分で関心を持てば、あっという間に習得してしまうのです。文字は子どもの関心の網の目に引っかかってくるに過ぎません。

女のお子さんの方が文字に関心を持つようであります。男の子と女の子で約1年くらいの発達の違いがあります。これは男の子の方がとってもナイーブなんですよ。ですからやはり育てずらいということがありますよね。夜泣きも男の子の方が多いですし、遺伝病にかかりやすいということもあってですね。広島市の平和宣言で6年生の男の子と女の子が平和宣言をしますが、いつもご覧になっているとおわかりになると思いますけれども、女の子は背が高く、男の子は小粒でボーイソプラノで宣言をしますよね。どっちもしっかりしていますけれども。あれが性差というのは、すごく大きいんです。発達直後の、生まれた直後の赤ちゃんの脳を見てみますと、女の子の左脳、言語や複雑な刺激を凝視する、そういうことに使われる左脳の成熟はちょっと進んでいます。男の子の左右の脳は女の子の遅れた方の脳と同程度にしかまだ神経活動が始まっていないというデータが1987年のNATUREという雑誌に発表されています。ゲシュヴィントとガラバルダというハーバード医科大学の生理学者の論文なんですが、なぜ男の子の方が発達が遅いのか。それは受胎して18週くらいになるとテストステロン、XY型染色体の将来、男の子になる受精卵にはテストステロンというホルモンが分泌されて男性性を発現させる。ですから新しい形質を発現させるために成長のスピードを緩める。そこで成長ホルモンにブレーキをかけるように働いているらしいですね。ですから誕生直後に女の子はすごく発達が進んでいて、複雑な刺激、お母さんの顔を凝視する時間も長いですし、男の子に比べ



て。それからバルネラビリティといいますが、傷つきやすいのも男の子の方でありますから、体が大きくて、成績が良くて、口が達者な女の子が小学校の高学年くらいまではハッピーハッピーに暮らしますが、その後はちゃんと男の子が背が伸びて、のど仏が下がって、そして得意の右脳で幾何学的な面で力を発揮する。『地図も読めない女の子、会話のできない男の子』という、そういう本が出ましたけれども、やっぱり性差というのはあるんです、生物学的に。ですから、小さければ幼いほど、その性差はあります。男のお子さんの方がナイーブです。男のお子さんの方、とりわけ大事に丁寧につき合っていたきたいと思います。「男の子でしょう、泣いちゃいけません」わあわあ泣く、また叱られる。これでは立つ瀬がありません。だからやはり丁寧につき合って欲しいと思います。ですから文字の読み書きも女の子の方が指先が起用ですからね。きれいに書きます。でもその読んだり書いたりは大したことはない、先ほどのデータを思い出してください。5歳になれば並じゃうわけですから。肝心なのは文字が書けるかどうかではなく、文字で表現したくなるような内面の育ちであります。つまりクリエイティブ、イメージーションの力を育むことが幼児期の発達課題であるということになります。では子どもとの会話で大人が心がけたいこと。第1に子どもに寄り添ってください。安全基地になって信頼のきずなで結ばれた大好きな先生がいうことは絶対です。幼児教育というのは、教育の原点で子どもたちは先生方の頭の使い方も吸い取っていつてくれます。責任重大です。ドタドタ歩いている保育者のクラスの子どもたちは、同じようにドタドタ歩きます。軽やかにリズムカルに歩く。そして美しい日本語で話す。別に方言があっても、もちろん構いません。やさしい言葉で話すと、これが子どもたちの言葉のセンスの土台になります。すべて先生がモデルです。とても大事な時期を将来、幼稚園の先生や保育者になられる方は、その大事な役割を担うわけですね。まずうちの子のクラスには嘘つきはいない。みんな良い子、みんな良い子、そういうつもりで子どもに寄り添う。その子自身の進歩を認め、褒めてください。他の子とは比べない。生き字引のように余すところなく定義を与えない。裁判官のように判決を下さない。禁止や命令ではなく、提案の形で「何々したら」と言ったら「僕やりたくなる」という選択肢がありますから、提案の形で言って欲しい。そして

何よりも大事なのは、子ども自身が頭を使うこと、判断する余地を残すことであります。こうした大人の関わりのもとで、子どもが自分で考える自律的な思考力やそれから自律的な社会性、それから創造的な想像力が育っていきます。

最後にこのエピソードを紹介したいと思います。渡辺万次郎さん、秋田大学の学長先生です。理科教育の専門家なのですが、お孫さんとのやりとりを『理科の教育』という雑誌、明治図書から出版されていて、何と残念なことに2009年廃刊になってしまいましたけれども。この文章は昭和38年の『理科の教育』7月号でした。それに掲載されていたのを私はここに取り込んできました。これこそ子どもに関わる大人の姿であるというふうに思います。

私はかつて幼稚園の二児を近郊に伴った。彼らは「みやこぐさ」の花に注意を引かれたが、その名を問うほかに能がなかった。当時、私どもの菜園には、同じ豆科の「えんどう」の花が咲いていたので、私は名を教えるかわりに、その花をもって帰り、おうちでそれによく似た花を見出すようにと指導した。彼らが帰宅後、両者の類似を見出した時には、小さいながらも自力に基づく新発見の喜びに燃えた。やがて一人は「みやこぐさ」について、「これにもお豆がなるの？」と尋ねた。それは誰にも教えられない、独創的な質問であった。

大人は質問に答えることはできるけれど、質問の仕方を教えることはできませんよね。花の類似から類推を働かせ、えんどうは花が咲いた。豆がなる。じゃあ、このまだ名も知らぬこの花にも花が、お花の形がよく似ているから、花が咲いた後、豆がなるのかな？ というふうな疑問を持ったわけです。すごい疑問です。すごい質問だったので、またしても渡辺さんは答えませんでした。

私はそれにも答えず、次の日曜に彼らに現場で確かめることを提案した。次の日曜に彼らがそこに小さな「お豆」を見出したとき、そこには自分の推理の当たった喜びがあった。秋がきた。庭には萩の花が咲いた。彼らは萩にも豆のなることを予測した。彼らは過去の経験から、いかなる花に豆がなるかを自主的に知り、その推論を独創的にまだ見ぬ世界に及ぼしたのである。

仮説を立てて、自分の目で見て検証した。それを秋になって同じ豆科の萩の花を見た時に、その知識を転移させたわけですね。「おじいちゃん、これにもきっと豆がなると思うよ」今度は確信、自信を持って子どもたちは立てることができたわけです。こうありたいものです。科学者がたどるのと同じような思考のプロセスを大人の賢い援助のもとで、4歳、5歳の子どもがこのような思考のプロセスというのを立てることができる、ということをこのエピソードは示してくれています。一人ひとりの子どもの視点に立って、子どもは文化・社会の宝、みんながこういうことを言います。民主党の人たちも言いますよね。でもこれは本当のことだと思います。その人たちの成長にいくら私たち大人がコストをかけたとしても、その人たちの成長によってもたらされる私たちの文化・社会への賜、ギフトはコストを帳消しにしても余りあることに大きく違いありません。教え、育てるということは、共に育ち合うということであり、協力して育てる国家事業です。もっと幼児期の保育にたくさん教育予算を投入して欲しいと思います。働くお母さんが増えていますから、保育所の待機児童をなくして欲しいと私は願っているんですけども。

では星の王子様が帰っていきますので、話も終わりです。王子様は、地球に着いた時に小さな狐に会いました。この世で一番大切なものは目に見えないんだよ。この大切な目に見えないものを見抜く力、創造的な想像力を育てる。これが将来、幼稚園や保育者、保育園で先生になる皆さんが将来やっていただきたいことでもあります。子どもたちの創造的な想像力を育てるために力を尽くしていただきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

**所長：**内田先生、本当にありがとうございました。多岐に渡る、中身の濃いご講演で、これまでの普段の言動というのは、心理学のメカニズムに則ってなされているんだなと思いました。また自分の記憶を絶対化しないということもやはり人間関係の中でこれから活かしていきたいなというふうに思いました。これからまた家に帰って、しっかり今日のご講義を振り返りたいなと思っております。それではここで、本学の学生代表よりお礼の言葉を述べさせていただきます。

**学生代表：**本日はお忙しい中、この千葉敬愛短期大学

へお越しいただき、ありがとうございました。素晴らしい経歴をお持ちで、多くのご本をご出版されている内田先生の講演を聞くことができ、とてもうれしくいい経験ができました。今回の講演にあった拓哉君と慎吾君の話では今までの私だったら拓哉君の話信じ、慎吾君を叱っていたと思います。しかし、先生の講演で子どもの記憶は変化してしまうこと、嘘をつこうと思ってついているのではないということを知り、慎重に行動しなければいけないとわかりました。それと同時に、そういった難しい年齢の子どもたちと関わることの大変さを改めて実感することができました。先生の著書である『子育てに「もう遅い」はありません』を読ませていただきましたが、先生の考え方から得られたものが多くあり、また子どもにいい教育をさせようという焦りやプレッシャーのかかる今の世の中だからこそ、私自身が親になった時には子どもと一緒に、のびのびと成長できるような環境で過ごせたらいいと思いました。先生の講演で学んだことを保育の現場でしっかり活かせるように、これからも学校での講義に集中して取り組んでいこうと思います。本当にありがとうございました。(拍手)

**内田先生：**ありがとうございました。皆様、私の話にとっても熱心に耳を傾けてくださって、本当にうれしゅうございました。

## 第4回

「からだの成長とこころの発達  
—子ども学から考える—」

(2011年6月29日)

小林 登 先生

東京大学 名誉教授  
ベネッセ次世代育成研究所 所長  
CRN(チャイルドリサーチネット) 所長  
医学博士

## 第4回「からだの成長とこころの発達－子ども学から考える－」

小林先生：ただ今、過分なご紹介をいただき、恐縮しております。まず申し上げたいのは、子ども問題の解決は、みんなで一緒に考える必要があるということです。子どものことをやっている人は、どなたもお分かりだと思うんですね。

子ども問題をみんなで一緒に考えるのが、「子ども学」で、「赤ちゃん学」は、その中に入ります。私は、赤ちゃんの行動研究から子ども研究に入りましたので、「赤ちゃん学会」をさきに作り、そのあと「子ども学会」を作ることになりました。本日は、赤ちゃん学も子ども学の中にふくめて、子どもという存在を捉える「子ども観」を考えてみたいと思います。

20世紀、特に第2次世界大戦中から、アメリカを中心として情報科学だとか、情報工学だとか、情報を処理する科学と技術が進歩しました。例えば、戦争に勝つためには、弾を当てないといけないですね。そうすると、何千キロも飛ぶような弾丸を作って、それを当らせるためには、大量の弾道計算をしなければなりません。また、敵の使っている暗号を解読するためには、たくさんの情報を処理しないといけない。昔は、ぐるぐる手で回すような計算機でやったんですが、それがコンピュータになるというように、情報を扱う技術が非常に進歩したのです。その上、本を印刷する技術も進歩して、膨大な数の本が出版されるようになりました。それが、ラジオ、テレビ、インターネットと、現在のメディア時代に発展したのです。したがって、21世紀になると、その影響で、学問は変わる、社会も変わってくるのではないかと、1970年代、80年代には言われ始めていたんですね。

東京大学教授の辞令を、私がもらったのは1970年でした。その翌年、紛争後の大学立て直しのため、文部省から世界の医学教育を見てくるようにと命令され、1カ月にわたって世界の医科大学を視察したわけです。御存知のように、医学教育の中には、解剖学、生理学、生化学という縦割りの学問がたくさんあるんですね。人間の解剖学というのは、体の構造がどうなっているか、を見る学問であり、生化学とは、人間はどうやって代謝してエネルギーを作っているかなどを、研究する学問なんですね。

しかし、視察の時、世界の一流大学、例えばロンドン大学だとか、あるいはハーバード大学だとかでは、

そういう講義はもうほとんどない。どういう講義かというと、肝臓なら肝臓を中心にして、肝臓の生化学、肝臓の解剖学、肝臓の生理学などと横につないで講義するタイプになっていたのです。

それは、考え方も勿論ありますけれども、それよりも何よりも情報を処理する科学・技術の進歩のおかげで、その上膨大な数の本が印刷できるようになった技術とも関係しているんですね。ですから、むしろ医学部なんかでは、夫々専門の学問については、教科書は読めばいいわけです。むしろ、実習によって、より具体的に学ばば良いし、講義はすべて横につないで、みんなで一緒にディスカッションするようになったんですね。場合によっては、先生が講義をしないで生徒がする、それを、先生が補足するというように、学生参加型にも変わってきたわけです。

そういうのを見ますと、あなた方が関心を持っていらっしゃる子どものことも、同じではないかと考えて、「子ども学」という発想が出てきたんだ、と申し上げたいと思います。

よく考えてみると、これは、社会でもいろいろな局面で起こっているんですね。例えば、JRが私鉄に乗り込む、私鉄がJRに乗り込む。こんなこと昔は考えられなかった。必ず終点でストップして、そこで切符を回収し、次の切符を買わなければ乗り換えられないんです。今はカードで通れるじゃないですか。社会も、そういうふうに縦割りではなくて、横割り中心に今の時代はなっているわけです。

そういうことを、1980年代の大平正芳総理大臣の時に、勉強会をやっているんですね。例えば、道州制が、最近新聞にもちらりと出ていたではないですか。県をやめて、道と州に地域としてまとめたほうが、いろいろと便利という発想です。

大平総理は、大変偉い方で、そういう問題も含めて21世紀は変わるというので、いろいろなテーマの勉強会があったのです。その中に「科学技術の歴史的展開」、歴史的に科学・技術はどう変わっていくかを勉強する会で、21世紀の科学・技術の変化についてディスカッションされました。私が、70年代にヨーロッパやアメリカの医学教育の中で見てきたことが、日本でも、80年代に、政治家の中にも、そういう勉強をしなければいけないと考えた人もいたんですね。

そう考えていくと、ここに「子ども学」という発想が出てくる時代的宿命といえましょうか、そういう学問の流れ、そして社会の流れになっていたことがお分かりになるとと思います。

## 【「育つ」とは】

まず、子どもの体の成長と心の発達、すなわち子どもが「育つ」ということから話を始めたいと思います。子どもが育つという意味の言葉には、いろいろなものがあります。皆さん方もご存知のように、「発育」、「成長」、「発達」、「成熟」など。これはみんな子どもの育つという側面を、いろいろな立場から見て、定義しているわけです。

「成長」、「Growth」という言葉は何かというと、身体の量的変化、身長や体重が増えるということですね。「発達」、「Development」というのは、心が発達する、心臓の機能が発達する、あるいは走る力が発達するというような現象に使っているんですね。すなわち、機能が成人レベルに達することです。

そして「発育」という言葉は、成長と発達を合わせたような言葉なんです。それは、英語の小児科の本を読みますと、「Growth and Development」と書いてある、つまり、発育というひとつの言葉は、英語には無いんですね。日本人は、いい考えを持っていますから、2つ合わせた概念を作ってしまったんです。つまりその言葉は、体が育つことばかりではなくて、心が育つことも、機能の発達も含めています、という意味なんです。何しろ、お互いに関係しますから。

「マチュレーション」、「Maturation」、「成熟」という言葉もあります。これは機能的な発達、量的な成長に関係するのですけれども、使い方が限られているんですね。例えば、「骨成熟」、「性成熟」というように。ですから言葉というのは、その使い方によって、いろいろな意味があることを考えなければいけません。特に、子どもが育つという姿は、いろいろな意味で複雑な現象ですから。そのどこをとらえているかによって、言葉に違いが出るのです。

## 【「育つ」と「育てる】

先程の成長、発達が、子どもの育つ姿の中心です。この2つが大きな柱なのです。それでは、体が育つということを細かくみましょう。それは、細胞だとか、組織だとか、臓器だとか、というものを、レンガを積み重ねる様にするのを指します。

一方、心が育つということは何か。これはなかなか難しいですね。お父さんやお母さんの遺伝子で決まった、基本的な脳の神経細胞のシステムと、それを働かせる基本的なプログラムを、いろいろと組み合わせ、いかなる事態でも対応できるような多神経細胞システムとしての脳と、それを働かせる複雑なプログラムを作ると考えた方がいいのです。

なぜこういう発想をいうかということ、胎児や新生児の行動を見たり、学校で勉強したり、保育園で保育士さんに、いろいろ世話をされたりしている子ども達の姿を見ますと、そのように見えるんですね。それは、お父さんやお母さんからもらった遺伝子によって出来る基本的なプログラムの働きと言ったらいいたいと思うのです。

例えば、お腹の中で、胎児が指を吸ったり、ニンマリと笑っていたりする顔が写真に撮られているんです。北欧の医師が、お母さんのお腹の中に胎児鏡という望遠鏡みたいな機械を入れて、胎児が指を吸っている姿をとった写真が、最初に発表されたんですね。それは1960年代の終わりだったと思います。70年代には、私も、胎児が笑っている超音波画像の写真を京都の産婦人科の先生から頂きました。始めは、そんなバカなと思ったんですね。しかし、よく考えてみると、生まれたばかりの赤ちゃんでも、産湯に浸かって、気持ちの良い時には、ニンマリと微笑むことがあるんです。これは、子育てをした人なら誰でも経験することだと思うんです。しかし、それは本当の笑いではないのですが、いい気持ちになったら笑う、すなわち顔の表情筋を動かして笑う表情を作るプログラムはあると思うのです。さらに、それはお父さんとお母さんからもらった遺伝子で作られる基本的なプログラムによるもので、教えられたものではないと言えるのです。

それを生まれてから後、お父さんやお母さんにあやされて笑う、お父さんが高い高いと頭の上に上げると子どもが喜んで笑う、そういう嬉しい体験をする時には、ニコニコと声を上げて笑うような、基本的なものを組合わせた複雑なプログラムになるわけですね。そして、小学校の子どもになると漫画で笑う。しかし、小学生だと落語の噺を聞いても、なかなか笑えない、もちろん中には笑う子もいるかもしれませんが。中学生、高校生になれば落語を聞いて笑う。だんだんその笑いのプログラムが、高度の知性や理性の心のプログラムと結びついて笑うようになっていけば、いいと思うのです。それが、

心が育つという現象の説明ですね。そういう考え方をすると、心の発達にとって重要なことを、考えやすくなるわけです。

さて、育てる方も整理しないとイケない。育てるというのは、親が子どもを育てる「育児」。しかし、育児に当たる英語はなかなか難しいんですね。「レイズ」「raise」という言葉がありますが、「親になる」という「ペアレンティング」「parenting」という言葉が一番ふさわしい英語だと思います。「保育」は、保育施設という社会の施設で専門家が子どもを育てる。これ「チャイルド・ケア」「child care」と言います。

「教育」は“education”、教育施設の幼稚園や学校で、専門家の教師、教諭が、子どもを教え育てることですね。

そのように、大きく3つの育てる営みがあると考えれば、いいと思います。この3つはそれぞれが独立しているのではなく、お互いに関連しなければいけません。なぜかという、子どもは1人ですから。したがって、親と保育士さん、先生は、お互いに話し合いの場を持つ必要があります。そういう考え方をさせていただきたいと思うんですね。

更に、育てるいとなみは、家庭技術としての育児と、社会技術としての保育、教育というふうにも整理できます。ですから、子どもは育つプログラムを持って生まれてくる、そのプログラムを働かせるのは、育児であり、保育であり、教育なんですね。しかし、それぞれの場所も、そして与えられる情報のタイプも異なるのです。

しかも、育てるという親の営みと、育つという子どもの営みはですね、お互いにやりとりをして深い関係にあると考えるわけです。1970年代にアメリカのクラウス、ケネルという小児科の先生が言いだした「相互作用」という考え方です。ケネルという人はイギリス系の小児科医で、アメリカのオハイオ州クリーブランドの大学の先生をしていて、子どもの育つことと育てることを分けないで考えるという発想を、クラウスと一緒に考えたのです。

それは、母子関係から始まった考え方です。お母さんが我が子に語りかける、そうすると赤ちゃんが、あるいは幼児が、お母さんに反応をする。はじめは言葉もない、しかし赤ちゃんはちゃんとお母さんの心を理解できる。お母さんの声のリズムやピッチや抑揚ですね、そういう「感性の情報」によって、お母さんの気持ちが分かる。これは皆さん方、どなたも理解できますね。勿論、子どもは言葉をしゃべ

るようになれば、自分の気持ちをお母さんに言う。「ママ、おいしいよ」とか、「ママ、ありがとう」というように。しかし、言葉がなくても、コミュニケーションは成り立つことは重要ですね。

換言すれば、「私はこう思っているんですよ」という信号行動と、それに対する反応行動と、そういう情報を介してのやりとりによって、赤ちゃんは、お母さんに対して「愛着」、すなわち「アタッチメント」を持つ、お母さんは我が子をかawaiiと思うようになる、「母性愛」が出来るんです。そういう仕組みを「母子相互作用」という言葉で、クラウスとケネルは説明したんです。

これはある意味でいうと、子どもの育つ現象を、お互いの情報のやりとりで説明するという、非常にユニークな考え方なんですね。もちろん、その前にはボルビーだとか、イギリス系の学者の先生の考え方もありました。

そういう母子相互作用の考え方は、よく考えてみれば、保母さんも、学校の先生も同じじゃないかと。情報を介してお互いに信号行動と反応行動のやりとりをしているうちに、子どもはお母さんに対する心のきずなと同じように、保母さんに対する心のきずな、幼稚園の先生に対する心のきずなというものを持つようになるのですね。そして子どもは、育つプログラムを働かせながら、組み合わせで、育つんだと考えられるわけです。

そういう考え方をしていきますと、体が育つ成長には、これはもう皆さん方すぐに分かる、栄養がまず必要ですね。ちゃんとご飯を食べて、お魚やなんかのタンパク質を摂って、ビタミンも充分摂って、そして体を育てていくんだ。では心が育つとは何だ。これは「情報」、「インフォメーション」「information」なんですね。情報によって育つ。だから体の成長には良い栄養は必要、心が育つには、当然のことながら、良い情報が必要という考え方で、整理ができるわけです。栄養は物質、化学的なものですね。ところが情報は形がない。だけれども、冒頭に申し上げましたように、アメリカの第2次世界大戦の弾道ミサイルの問題だとか、暗号を解読するために情報科学というものが出てきて、親子関係も、情報という考え方で説明できるようになったのです。

母子相互作用の考え方からしますと、お母さんと子どものやりとりによって愛着と母性愛が育ち、母と子の絆ができる。もちろん続いて、お父さんとの関係も入ってくるし、兄弟との関係、大きくなれば

隣のおばさんとの関係で、人間関係がひろがってくるわけですね。そして、小さい時でも、特に言葉がわからなくても、先程言いましたようにお母さんの声のリズムやピッチや抑揚、すなわち「感性の情報」によって、子どもは人生は平和である、人は信じられる存在であると信ずる「基本的信頼」、「ベーシックトラスト」“Basic Trust”を持つことができるようになるのです。

それが、さらには言葉を使うようになって、感性の情報ばかりでなく、言葉は「理性の情報」も伝わりますから、論理的に考えられるようになり、言葉のやりとりによって、4~5歳までに「心の理論」、「セオリー・オブ・マインド」“Theory of Mind”という「共感の心」が出来る人ですね。他人の振りを見て、その人の心を読み取る力、いうなれば心の一番重要な基盤が出来ると思うわけですね。

### 【「優しさ」とは】

この様な考え方をすると、この「感性の情報」で何が重要か、になると思うんですね。「優しさ」が一番重要だと、私は思います。特に、赤ちゃんの時、あるいは幼児の時にはですね、子どもたちが、言葉をしゃべるようになるまでの間、この優しさが一番ですね。しかし、「優しさ」という言葉も、なかなか難しいのですが、それは「感性の情報」が作り出す心の状態ですね。

「優しさ」という言葉を国語辞典でみますと、優しいというのは、「にんべんに憂」と書きますよね。しなやかに舞う、緩やかに歩む姿というのが、そもそもの出発点のようです。そして、声や目の感じが穏やかで、警戒心を与えない様子。節操、思いやりがあり、情があって、好ましい感じ。気立てが良い。親切、情が深い。おとなしく素直である、淑やかで上品であるというように、いろいろな意味があります。しかし、皆さん方は誰も、常識的にはお分かりになると思うんですね。言うなれば、優しさは五感で感じ取るものだと思うのです。

英語でいうと、“tender”、“Love me tender”の“tender”ですね、“gentle”、“kind”、“kindly”、“affectionate”、“hearted”、“sweet”、これも、それぞれの関係によって言葉は違ってきます。

また人によっては、「温かい心」だとか「思いやりの心」、「共感の心」という言葉も使う場合があります。こういうような心は、何が大切かというのと、その基盤には「基本的信頼」だとか、「心の理論」とか、

そういう心がなければ、大人も、赤ちゃんに対する、あるいは子どもに対する優しさが持てないと思うわけですね。例えば、虐待するお母さんを調べてみると、そのお母さん自身の育つ過程で、この基本的な信頼だとか心の理論ができなかったからだと思います。赤ちゃんが泣けば、ただ喚いていると思って、そこに優しさを持って赤ちゃんを抱き上げるという行動がとれない心になっているわけですね。ですからそういう意味で、この優しさというものを理解することとは、重要なことだと思います。

もう一つですね、「生きる喜びいっぱい」という“Joie de vivre”「ジョワ・ド・ビブル」という言葉があります。ぜひおぼえて下さい。一般には、なかなか聞かない言葉ですが「ジョワ・ド・ビブル」はフランス語なんですね。私は、この言葉をイギリスで勉強している時に覚えました。イギリス人が、何故こういう言葉を使うのか考えてみますと、子どもを見た時に、生きる喜びいっぱいになっているという感じが分かるからだと思います。逆に、何となく人を疑って見るような感じの子どもとか、あるいは素直に喜べない、笑えない、「おばちゃん、こんにちは」と言えないような子どもの感じはお分かりになると思うんですけれども。そういう子どもを見たら、イギリスの小児科の本には虐待されているかどうかをまず疑いなさいと書いてあります。もちろん体に病気があっても、そういう状態になると思いますけれども。

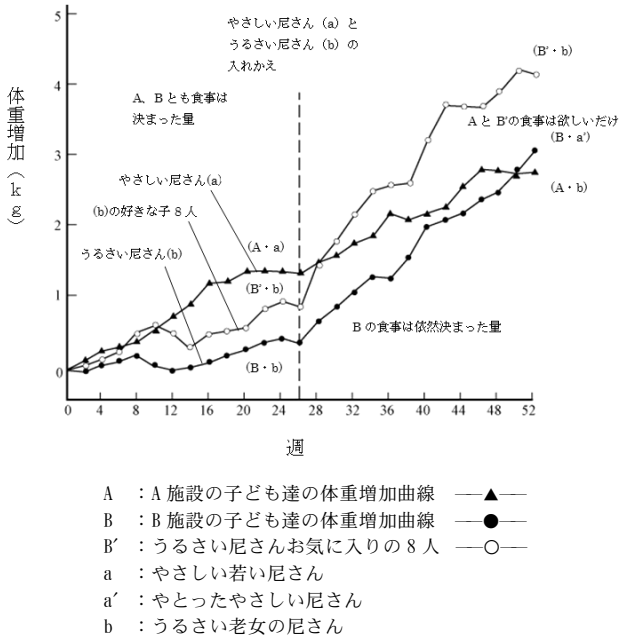
アメリカに勉強に行った1950年代後半にも、私は生きる喜び一杯でない子どもをインターンとしてみたんですね。救急室に、お母さんが（虐待した）子どもを抱いて入ってきて、ベッドから落っこったというんですね。そういう子どもを見て、私はどうしてこんな豊かなアメリカで、そういう虐待が、しかもなぜ母親がするのか、キリスト教の国でと、大変不思議に思ったんです。ですから、生きる喜びのない症状の子どもには、気をつけなければいけないのです。もちろん小学校や中学校に行けば、学ぶ喜びだとか、さらには遊ぶ喜びだとかというようなものも、子どもの心を考えるのに重要だと思います。

ここで、なぜ優しさが子どもにとって重要かということ、科学的に考えてみたいと思います。

# 【「優しさ」を科学する】

## ① 養育者の性格と孤児の体重増加

図 1：養育者の性格と孤児の体重増加曲線  
(E. M. Widdowson, 1951)



ここにいるにほとんどの人たちが生まれる前の1951年に発表された古い研究で、イギリスの雑誌に発表された論文ですね(図1)。第2次世界大戦直後、西ドイツに2つの戦争孤児を収容する施設AとBがあった。そして、ある時点から、その子どもたちの体重がどれだけ増えたか、例えば1週間に10グラム増えた、20グラム増えたと調べたんです。Aの子どもの体重増加曲線は、調査開始から26週間までの間の体重増加は非常に良い。ところがBの子どもは体重増加は悪い。しかし、そのBの中にも、少しだけ良い子が8人程いた。真ん中の増加曲線ですね。

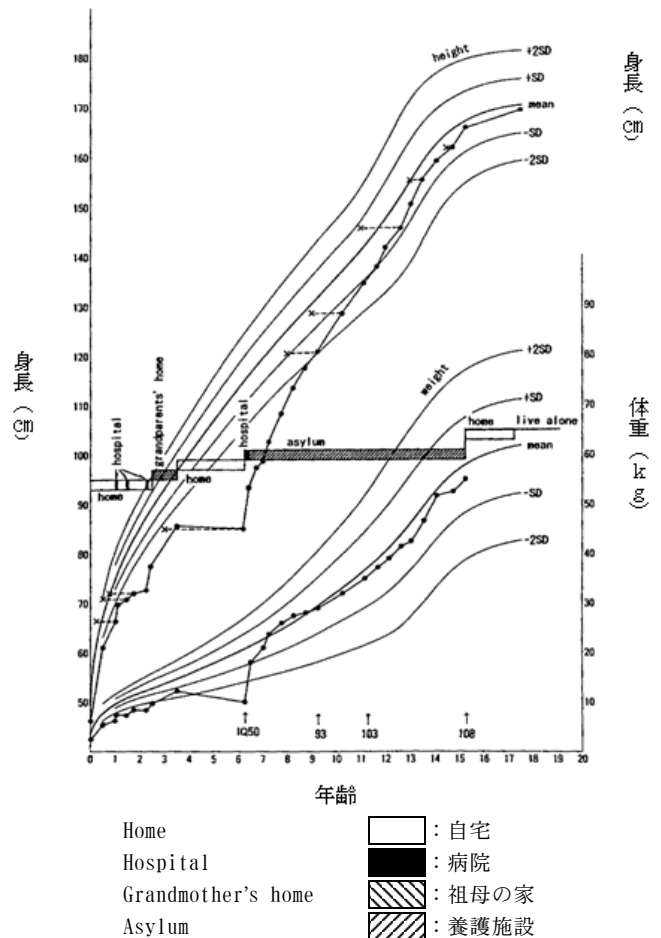
これは、イギリスのウィドーソンというオックスフォード大学で研究していた女性の栄養学者の論文なんです。ウィドーソンは、この孤児院に行って調べたんです。その子どもたちの世話している女性を見ると、Aの方は若い、優しい、子ども好きのカトリックのシスターで、Bの方はおばあちゃん、うるさくガミガミ言う、年をとったシスターだったんです。しかし、当時は第2次世界大戦直後で食べ物も十分にありませんから、アメリカから空輸して、両方の子どもたちに同じ量を与えていたのです。同じ食料を食べていても、優しい人に世話されると、うるさい人に世話されるよりも、はるかに体重増加

がいい事がわかったんです。

それでは、この真ん中の体重増加の良いBの子どもは、どんな子が調べたんです。そしたら、そのうるさいおばあちゃんシスターが好きな子8人だったんですね。子どもの中にもいるじゃないですか、かわいく生まれて得する子というのが。いつも先生の言うことを聞いて「はい」と言うようないい子ですね。そういう子どもだったんです。ところがこの優しいシスターが、何かの都合で辞めたわけ。そうしたらウィドーソンは、このうるさいおばあちゃんシスターにですね、好きな子8人を連れて、「Aの方に移りなさい」と言ったわけなんです。

ということは、Aに体重の増加のいい子どもを集めたことになるわけですね。そしてBの方は、体重増加の悪い子だけが残った。そこに、このAにいたと同じように優しい、子ども好きのシスターを探してきて世話をさせた。しかし、食事は前と同じで、増やさなかった。しかし、Aの方は体重増加がいい子どもを集めたけれども、うるさいおばあちゃんシスターが来て世話をするようになったので、食事の量増やしたのです。

図 2：情緒剥奪症候群の事例





そうしたらどうということが起こったかという、Bの体重増加の悪い子どもは、優しい若い子ども好きのシスターが来ただけで、食事の量を増やさなくても、体重はどんどん増えて、こちらのAの体重増加曲線と逆転をするわけです。Bは、うるさいシスターが来たもんですから、それなりの体重増加はあるけれど、食事を増やしても、特に良ならず、前とほぼ同じ調子の体重増加で逆転されたのです。そして、うるさいシスターと一緒に移った、好きな子8人は、食事の量が増えたので、どんどん体重が増加したという結果なんですね。

これは子どもが育つのに何が重要かと。食事はもちろん重要ですが、食事よりも世話する人の性格だとか、優しさだとか、そういうものによって影響を受けることを綺麗に証明したんです。

次は諏訪先生、私の弟子に当たる神奈川の小児病院の小児科医で、母親がどうしてもかわいと思えない不幸な子どもを20年間にわたって、体重曲線と身長曲線を追っかけた研究です(図2)。小さい時の身長、体重の増加のいい時は病院にいる時なんです。ところが体重、身長の増加がスローダウンした時は、お母さんの所に帰っている時なんです。3、4歳になって物心がつくと、身長は1cmも伸びない、体重は減る、その前の体重の増加や身長の伸びが特によいこの時期は、おばあちゃんの所にいたんです。おばあちゃんによって優しく世話をされると、体重増加が良くて身長の伸びもいい。しかし、母親の元に帰ると身長は1cmも伸びないし、体重も減るという状態だったのです。

それで、7歳になった時に子どもは養護施設に入るわけですね。そして養護施設の先生ですから、子どものことが良くわかっていますから、優しくしてあげるわけですね。そうしますと、身長も体重もどんどん伸びて、平均の中に入っていくという結果です。

身長は1cmも伸びない、体重は減っていく、この時に諏訪先生は、成長ホルモンが分泌するか、どうかを調べているんです。そうすると、成長ホルモンの分泌が悪いんですね、それが元に戻るのにも半年もかかったのです。

また、養護施設で入ってからをみると、直後はIQは50ですけど、93、103、108と伸びるわけです。このお母さんは、どうしてもこの子を好きになれない、かわいと思えない、ご主人に似ていたかもしれないですね。そういった気持ちだけで、子どもの育

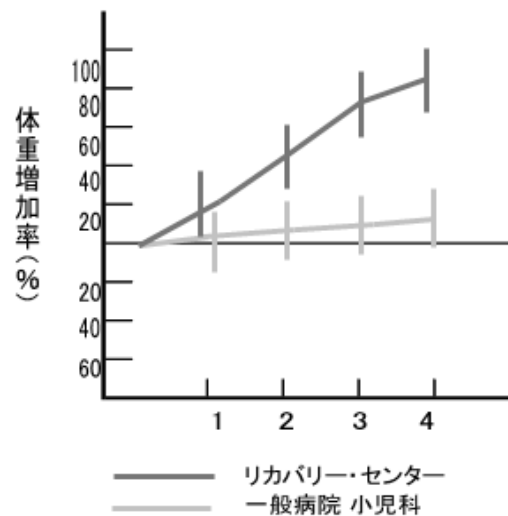
つ姿はこんなに影響を受けることがわかるのです。それは単に気持ちだけの問題ではなくて、成長ホルモンの分泌というような問題もあるし、それからIQで見れば、心の育ち、知性にも影響することを、この論文は、20年間のグラフで示したわけです。この子はこの養護施設に入ってから全く親元に帰らずに、独立して今も社会人として活躍しているそうです。

## ②重症栄養失調児の治療における情緒環境

これは、モンケベルという南米の小児科の先生が1989年に、パリで開かれた国際小児科学会議で発表した論文なんですね。重症の栄養失調児を治療する時に、栄養失調ですから感染症を起こしたり、体重が増えなかったりするわけですが、そういう子ども達を治療するモンケベル先生の施設では、リハビリセンターと呼んで、普通の病院でやる治療法の他に、その子どもを優しくケアする女性をつけたんですね。つまり、ボランティアの優しく子どもの世話をする、母親がわりの女性ですね。

図3：重症栄養失調児の治療における体重増加に対する情緒的環境の影響

(F. Monkeberg, 1989)



そうしますと、そのモンケベル先生の方の子ども達の体重増加の曲線が、普通の病院の小児科の体重増加曲線よりはるかに良い事がわかったんです(図3)。ということは、優しさによって病気の子でも体重増加が良くなるということは、病気の治りが良くなるということです。これは、おそらく、先ほどの諏訪先生の論文と同じような仕組みも働いていると、どなたも考えると思うんですね。

しかし、重症の栄養失調の子どもというのは感染を繰り返すんです。そして死ぬのは何でかという、

栄養が悪くて死ぬのではなくて、感染症で死亡するんです。それを調べてみると、先ほど言った一般の病院では月に4.5回感染をおこし、ところがモンケベル先生の優しいボランティアのついたリカバリーセンターでは、その10分の1の0.3回しか感染症を起こさない。しかも死亡率は普通の小児科では3%、モンケベル先生の方は0%、誰も死ななかつたというデータを発表したんです(表1)。

表1：重度栄養失調児に見られた反復感染の頻度と死亡率  
(F. Monkeberg, 1989)

|            | 反復感染<br>(頻度/月) | 死亡率<br>(%) |
|------------|----------------|------------|
| 一般病院小児科    | 4.5±0.2        | 2.9        |
| リカバリー・センター | 0.3±0.6        | 0          |

私も、この講演を聞いて非常に感激しましたし、その後、機会があってアメリカでも、もう1回聞き、直接お話も致しました。重症栄養失調児という子どもの病気は、特殊な病気ではありませんが、日本には無いような病気です。そういう病気でも、優しさが病気を回復する力、さらには免疫という感染抵抗の力も強くするんだということを、この発表は示しているわけです。

### ③お産とエモーショナルサポート

表2：お産に対するエモーショナル・サポート  
(ドゥーラ)の影響

(J. Kennell, M. Klaus, S. McGrath, S. Robutson, C. Hickley; Continuous Emotional Support during Labor. JAMA, 2197-2201, Sept. 1991)

|                       | エモーショナル・サポート<br>(ドゥーラ)群<br>(212) | エモーショナル・サポート<br>(ドゥーラ)なし |                  |
|-----------------------|----------------------------------|--------------------------|------------------|
|                       |                                  | 専門観察群<br>(200)           | コントロール群<br>(204) |
| 分娩時間                  | 7.4h (SD:3.6)                    | 8.4h (SD:4.2)            | 9.4h (SD:4.2)    |
| オキシトシン投与率             | 17.0%                            | 23.0%                    | 43.6%            |
| 帝王切開率                 | 8.0%                             | 13.0%                    | 18.0%            |
| 鉗子分娩・麻酔などの処置を行った率     | 7.8%                             | 22.6%                    | 55.3%            |
| 産褥熱発症率                | 1.4%                             | 7.0%                     | 10.3%            |
| 長期仮死などの異常による新生児の長期入院率 | 10.4%                            | 17.0%                    | 24.0%            |
| 新生児感染症の発症率            | 4.2%                             | 9.5%                     | 14.7%            |

※「ドゥーラ」とは、お産の時などに母親を優しく勇気づける役割を果たす女性を指す。「専門観察」とは、助産師のような専門家であるが、立ち合って観察するだけで、重大事故発生までは手を出さないことを指す(本文参照)。

こう考えますと、優しさは子どもにとって大きいことが、皆さん方お分かりになったと思います。それでは、大人はどうなんだろうか。大人も当然そうですね。それは、大人も優しくされると、体のプログラムの働きも良くなることは明らかです。また、夫婦関係だとかの人間関係も良くなることは、よくお分かりだと思います。それが一番強く出るのは何かというと、お産なんですね(表2)。

お産の時にですね、陣痛が始まると背中や腰を撫でて「大丈夫、大丈夫」というような女性をつけるわけです。そういう女性をつけた、つまり優しく勇気づけるエモーショナル・サポートのあるグループとサポートのないグループ、すなわちコントロールですね。それから専門観察と比べて、お産の時に、そういう積極的に「大丈夫、大丈夫」と言わないで、ただ見ているだけで、何か大きな事故が起った時だけ、手を貸すというような看護婦さんをつける。その3つのグループに分けて、その分娩時間を比較してみると、エモーショナル・サポートがつくと7.4時間で済んでしまう。ところがついていないコントロールでは9.4時間もかかる。そして、専門観察では8.4時間、ちょっとはいい。

オキシトシンは、陣痛を強める薬です。それを使う率もエモーショナル・サポート・グループで17%で、コントロールは43%、2倍以上ですね。そして専門観察は23%。お産の後に感染症を起こす率も、エモーショナル・サポート・グループ1.4%なのに、コントロールは10%、専門観察は7%というデータです。生まれた子どもについても、問題があって長期入院する率はエモーショナル・サポート・グループは10%なのにもかかわらず、コントロールは24%、2倍以上ですね。専門観察は17%。新生児が感染症を起こす率も4%、こっちが14.7%、真ん中は9.5%なんですね。

優しく世話することによって、お産が軽くなるばかりでなく、お産の合併症も減るといこの研究は、ケネルが報告したんですね。先ほど冒頭の母子相互作用でお話したクラウスとケネルのケネルです。優しさというものが、どれだけ医療行為の中で意味があるかを示す研究で、アメリカのテキサスの病院で行ったんです。医療でも、いかに優しさが重要かが、お分かりになるとと思います。

更に、エモーショナル・サポートのついたグループとつかないグループで、生まれた直後、産まれた赤ちゃんを、お母さんのそばに置くんです。そうし

て、お母さんが、どういう行動をとるか調べたんです。それは、エモーショナル・サポートは、分娩後のお母さんに、どう影響するかを調べた研究です。そうすると、お母さんが、そばに置かれた我が子を撫でる、微笑みかける、語りかけるのは、エモーショナル・サポートのついたグループで多いんですね。つかなかったグループは、低いというデータが出たんです。ということは、お産の時に、優しい勇気づけをする人がつくことによって、お母さんの子育て意欲、子どもに対する愛情というものが、強く働くようになることを示しているんですね。これは重要な論文だと思います。

この様な現象をどう説明するかというと、どんなお産でも初めての場合は特に、お母さんは不安になりますね。不安になると、血液中にアドレナリンが増える。アドレナリンが増えると、子宮収縮力が落ちる、したがって分娩時間が延びる。また、アドレナリンが増えると、子宮に流れる血液が減る。したがって、子宮から胎盤に流れる血液も減る。その結果、胎児にも問題が起こると説明されるのです。

私がこの論文を読んで、大変重要だと思いました。産婦人科のことですから、小児科医が大きなことを言っただけで済まないとはいえませんが、関係した「周産期医学」という雑誌、つまり赤ちゃんが生まれてくる時は小児科と産婦人科の先生が一緒になってチームを組もうという趣旨の雑誌です。そこで、ケネルの論文を取って紹介し、お産にエモーショナル・サポートが重要といくら強調しても産婦人科の先生は乗らない。何でかということ、保険点数にならないからだ。ただ、最近、事故を起こすと患者さんから訴えられるものから、少しは考えるようになってきたと思います。

80年代の始めくらいに、私はこういう論文をいくつか出して、キャンペーンをしたんですが、なかなか乗って下さらず非常に残念と思いました。社会というのは、そういうものだと思います。偉い大教授でさえも、ちょっとくらいのエモーショナル・サポートで、良くなるはずはないとおっしゃるんですね。日本では、こういう論文はなかなか出てこないですね、残念なことに。先ほどのケネルの発表したのは、アメリカ医師会雑誌の論文なんですけれども、堂々とそういう論文が出ることは、さすがにアメリカだなと思うわけです。

## 【優しさの力】

「優しさ」にどういう力があるか、整理してみましょう。もちろん、あなた方は、お友だちとのおつき合いや、お父さんやお母さんとの関係や、さらにご夫婦の関係を見ていて、よくおわかりのように、優しさというのは「人間関係」を作る力がある。これは、どなたも賛成すると思うんですね。それから、前に申し上げたように、子どもの「育つ力」を強くする力もあると思うんですね。しかも「成長ホルモンの分泌」だとか、「免疫力」などを考えると、生理機能も強化する力もある。さらに、お産を軽くする力もあるわけですね。生命のバトンタッチに重要な力を発揮しているんです。

生命のバトンタッチにおける、女性の助け合いを研究している人にですね、ダナ・ラファエルという医療人類学者がいます。マーガレット・ミードのお弟子さんで、文化人類学を勉強した彼女は、コロンビア大学で、学生結婚して赤ちゃんが産まれたんです。何とか母乳で育てたいと考えた。ところがいくら頑張ってもおっぱいが出ない。そういう経験をしたので、大学を出てからも、いろいろ調べたんですね。アメリカの社会ばかりでなく、フィリピンの山の中だとか、ポリネシアの島で、アフリカの砂漠で。そうすると、どんな伝統文化の社会でも、女性が妊娠、分娩、子育てをする生命のバトンタッチには、女性同士の助け合いのシステムがあることを見つけました。それがあからさまに、人類は、これまで医学も何も発達していなかった時代から、生命のバトンタッチを続けることが出来たと言えるんですね。そういう考えは重要だと思うんです。

母乳が出ないで困ったということを経験して彼女は“Breastfeeding, Tender Gift”という「母乳、自然のやさしい贈り物」というタイトルで本を出したのです。僕が訳したものですから、そういうタイトルにしたんです。その本以来、彼女といろいろおつき合いが出来ました。学んだことは、文化人類学的手法、つまり生物学を超えて、人文科学の発想も組み合わせるという考え方に、感銘を受けたのです。それがあからさまに言う、「赤ちゃん学」、「子ども学」の発想にもつながっているわけですね。ラファエルさんはそういった意味で、「医療を人間化」という考え方をもち込んだ、大変立派な学者だと思うんです。こういうことを、ちょっと気をつけるだけでも、医療の質はぐんとよくなるし、そ

して生命のバトンタッチもうまくいく。

彼女はコロンビア大学の学生の時代に、アメリカに移民してきたギリシャの友だちの家に行って、得々と妊娠、分娩、育児の時には優しく、新しくお母さんになったお母さんを世話するということが重要なんだと友だちに話したんですね。それは、彼女の卒論だったのですけれども。そうしたら、そこにいたギリシャ人のおばあちゃんが、暖炉の前でロッキングチェアに座っていて、それを聞き、それは「ドゥーラ」“doula”だと言ったんですね。ギリシャではそういう、妊娠、分娩、出産、育児する女性をサポートする女性をドゥーラと呼ぶんだそうです。ドゥーラという言葉自体は、奴隷というような意味なんですけど、ギリシャでは、女性のドゥーラは大切にされるそうです。私は、日本で言うと、お産婆さん、昔いたでしょう。僕なんか、子どもの頃、お産婆さんが黒い革のかばんを持って、お産が始まると妊婦さんの家に入っていく姿を思い出しますけれども。そういうような人だったと思うんですね。

しかし、ラファエルさんが言ったことは、何が重要かということ、どんな文化でも、どんな僻地でも、必ずそういう女性の助け合いシステムがあるということです。逆に、先進社会ではそれが無くなったために、いろいろな問題が起こるのだとも言っているのです。日本の産科医療も、昔はお産婆さんが中心だったわけです。しかし、それが西洋医学の助産師さんと産科の先生の医療に変わって、ある意味では一つの良い面をつぶしてしまったかもしれないんですね。もちろん、お産のすべてが安全ではありませんから、西洋医学の産科医療によって、命が救われる場合も沢山あるわけです。西洋医学の時代に入る時、なぜそういう人間的な優しさを日本では持ち込めなかったか、というところにむしろ問題があると思うんです。

### 【なぜ人間は「優しい心」を持ったか】

それでは、なぜ人間は優しい心を持ったかを考えてみましょう。つまり「心の進化」、裏を返せば「脳の進化」の話ですね。

人間の脳の原型というのは、脊椎動物になってからできた。それは、5億年前に魚類、3~4億年前が両生類や爬虫類、それから1億年前に鳥類が分かれて進化して行って、それから7,000万年くらい前から哺乳類、1400万年前に我々の遠い祖先の霊長類のラマピテクスに進化したというのです。

もちろん現在の霊長類のチンパンジーの行動を見ることによって、私達の心の進化を考えることができるわけですね。その他に、心の進化はどうやって調べるかと言うと、古いところを掘り返してですね。人類の化石を探して、その周りにどんなものが残されているかを見ることによって、ある程度わかります。脳は軟らかくてすぐ腐ってしまい残りません。もちろん、頭蓋骨を見れば、脳の形や大きさがわかりますし、そして残されたものから人間はどんな心を持ったかということが分かるわけですね。そういう研究によって、私たちは現代の私たちの理性や知性を持った脳にどうやって進化させてきたかということ学ぶことができるわけです。

だいたい、500万年から700万年くらい前に、チンパンジーの祖先と人類の祖先は別れたと考えられています。そしてチンパンジーは、200万年くらい前に、ボノボという小型のチンパンジーと皆さん御存知の大型のチンパンジーに分かれ、人類の方は猿人、原人、旧人、新人、現代人と進化したと考えられているのです。ですからこのチンパンジーを調べるということは、我々がどういう心を進化させてきたかを考える大きな材料を提供するわけです。

面白いことにですね、我々が知っている大型のチンパンジーは凶暴で、オス優位の社会、ところがボノボという小型のチンパンジーは、優しくメス優位の社会なんです。ということは、私たちが優しさという心を持った始まりは、おそらく同じ時点からでは無かったにしても、人間に進化していくうちに平行して「優しい心」を持ったと考えられると思うんですね。

それは森林の中に住んでいたチンパンジーとの共通祖先から分かれてサバンナに出てきて、そして人間進化の中で、集団を作って生活しない限り、大型動物をとらえて食料にするとか出来ず、生き残ってこれなかったのです。そのような人間関係を結ぶために、人間はボノボと同じように、知性、理性と結びつけて、優しさの心を進化させたと考えればいいと思います。

人間にとって大切な言葉は、チンパンジーと分かれてから二足で歩くようになって、まだまだ言葉は十分ではなかったようです。ジャワ原人とか北京原人とか、80万年とか50万年くらい前の原人になって、やっと言葉を発し始めたと考えられています。そして、進化とともに前頭葉が発達して、人間の脳になるわけです。

ネアンデルタール人というのは、ドイツのネアンデルタール渓谷にいたと考えられる人類ですが、会話をする能力はまだ十分ではなかった。しかし、情感豊かで、死者を弔い、花をたむけたと考えられているのです。つまりその骨の近くの土を調べると、まいた花の花粉が出てくるんですね。更に、勇者を敬い、好ましきを愛し、悪を憎み、強いものには畏敬する心ももっていたようです。しかしこのネアンデルタール人は、クロマニヨンに滅ぼされたというんですね。

クロマニヨンは、狩猟、採集を行い、彫刻、絵画も残している。出産を祈るために、女性の像を飾ったりしたのです。宗教的な儀式も残しました。さらに、歌や音楽演じ、言葉を使って仲間を作り、集団生活をしていました。そして現代人は、このクロマニヨン人から進化したと考えられているのです。ですから、もう10万年くらい前から死者を弔うというような気持ちを持っていたことは、優しさの心の芽生えは早くからあったと考えられるのです。

ですから、私たちの脳の進化は、魚や爬虫類の生存と運動のためだけの体のプログラム中心の「生存・運動脳」から出発したのです。今の私たちの脳で言えば大体脳幹とか間脳に当たるところですね。呼吸、循環、消化、代謝、運動、バランスなど生命に関係する体のプログラムを集めた脳によって、エイが大きな口を開けて、海の中で小魚を取っている姿がテレビに出てきますけれども、そんな生き方をしていたんですね。

それが古い哺乳動物の祖先になると、本能、つまり体を作るための食欲だとか、子孫を増やすための性欲だとか、そして情動、喜びとか怒りとかというような感情、そういう心のプログラムを持つ古い皮質（辺縁系）が、体のプログラムを強く働かして、たくましく生き、存在を確かにする、そういう「本能・情動脳」ができ上がって来たんです。この古い哺乳動物は、カンガルーの祖先みたいな動物の脳と考えればいいと思います。そういう動物の集団生活は、優しさの心がなければ出来なかったし、生き残りのために戦うためには、怒りによる攻撃の心もなければ生き残れなかったのです。

そして犬や羊なんかの高等哺乳動物の祖先になって、やっと知性・理性の複雑な思考や、精神機能などの心のプログラムが存在する新しい皮質が本脳・情動脳をカバーして、人間の脳の原型である「知性・理性脳」に進化したと考えられるのです。ですから

我々の脳は、真ん中に生存・運動脳、それに本能・情動脳がカバーして、そして更に新しい知性・理性の脳はカバーしてでき上がったと考えればいいと思うのですね。

ボノボとチンパンジーを比較すると、割合きれいに優しさの有る無し強弱がはっきりしますけれども、我々の脳ではその両方が古い皮質の中にあるわけですね。本能・情動脳の中に攻撃をする、激しい怒りだとかいう心のプログラムと同時に、人間関係を保つような優しさの心のプログラムがあるため、私たちは複雑な仕組を持っているのです。戦争なんかを見ると、やめたほうがいい、と思います。しかし、今だに中近東では戦争が行われ、いろいろな問題が起こっているのは、そういった人間の脳の三層構造にも深く関係していると、考えなければならないと思うのです。

ですから情動の心のプログラムを考えますと、「快」とか「不快」とかの原始的な感情がまず進化し、この快を中心にして喜びとか親しみとかの感情が進化したと思うんですね。攻撃的な感情は不快から出てくるもので、恐れ、怒り、悲しみ、憎しみ、不愉快だとかが関係したと考えていけば整理ができると思うのです。ですから、人間は、残念ながら、ボノボとチンパンジーのようにきれいに分かれなかったので、いろいろ問題が出てきているのではないのでしょうか。

## 【なぜ社会に「ガタ」が来たか】

そのような考え方をした時に、我々は現在のいろいろな社会問題をどう考えたらいいでしょうか。今度の東日本の大震災が起こるまで、何か日本の社会が悪い方に、悪い方へと向かっているように思っていました。ですから、今東日本のことで、日本人は水をかぶせられたような感じで、みんな心を大切にしなければいけないと思い始めていると思うんですね。ですから東日本の出来事は、我々がもう1回、社会のガタを取り戻すために、いいチャンスじゃないかと思っています。

第2次世界大戦終戦の時に、私は広島原爆による裸の街を横切って、なかなか汽車に乗れなかったのので、貨物列車の石炭の上に乗って、東京に帰ってきたわけです。その時は、もう通る街、みんなアメリカの爆撃による焼け野原、ちょうど、津波で何もなくなった町と同じですよ。今度の東日本大震災は東北がやられただけで、経済力も大分落ちたかもし

れませんが、第2次世界大戦が終わった時には、全く裸になったわけで、経済力なんかほとんどなかったのです。しかし、これだけ持ち返したことは、持ち返す力を持っていたわけですから、私はもう1回この機会に考え直して、もっと良い社会を作る工夫をしたらいいかと思うんですね。

物質的に豊かな社会というものは、どうしても物質万能主義になったり、拝金主義になったり、そして意識するしないにかかわらず、優しい心だとか、思いやりの心、助け合いの心というものを使わなくなってしまう。それで、せつかく進化してきた、そういう心を使わないために、人間関係は希薄になって、社会も乱れ、その上行き過ぎた個人主義によって、いろいろと問題が出てきたと思うのです。

## 【まとめ】

まとめに入りたいと思います。何が一番重要かという、やはり、子どもたちに生きる喜びいっぱいになるように、社会のすべてのモノやコトをデザインし直すということだと思うんですね。それを私は「チャイルドケアリング・デザイン」“child-caring design”とよび、子どものことを気にかけて（careして）デザインするという意味です。それは音楽だとか、漫画だとか、映像だとか、教科書だとか、教具だとか、遊具だとか、学校だとか、保育園だとか、公園だとか、さらには都市まで、さらに法律まで、子どもに関わるモノやコト全てを、そういう考え方で作り変えていかなければならないと思うのです。

ケアリングとは、子どもを「気にして」、「心配して」という意味です。「チャイルド・ケア」というと「保育」になるわけですね。ケアという言葉には心配するとか、気にかけるとかいう意味があることは皆さん方ご存じだと思います。

日本で、チャイルドケアリング・デザインを考えさせられた最近の出来事は、2004年の六本木ヒルズの事件ですね。あのビルの回転ドアで、ひとりの子どもの死亡事故が occurred。それはなぜかという、ああいう人の集まる場所には、子どもが来ても不思議はない、しかし来ることを考えてない、大人だけの発想でデザインして事件が起こったわけですね。ですから、チャイルドケアリング・デザインは重要だと思うんですね。

しかし、そういう考え方は、70年代末、すでにギリシャのアテネで「都市と子ども」という国際シンポジウムが開かれていますし、81年、私が国際小児

学会の会長の時に、「子どもと都市」というシンポジウムを東京でやりしました。ですから、そういう考え方も、なくはなかったんですけども、建築関係の方々やっと最近になって、そういう考え方を持ち始めました。だから子どもに関係する、あなた方が大きな声で「子どものことを考えましょう」と言わないといけない。世の中が良くなならないわけです。

そのチャイルドケアリング・デザインをするためには、これも申し上げましたように、「子ども学」という発想が重要です。その柱のひとつは、「子ども生態学」、「チャイルド・エコロジー」“child ecology”という考え方ですね。また、子どもの心の問題にしる、体の問題にしる、脳がすべての中心ですので、「脳科学」の知識も持たなければいけないと思います。「子ども学」という発想は、学際的、環学的、すなわち“multidisciplinary”、“transdisciplinary”という言葉で言い表せますが、自然科学と人文科学を融合する新しい科学として、体系づけなければならないと思います。

その体系づけは大変ですが、少なくとも話し合いの場だけは作らなければいけないと考えて、私は「日本子ども学会」を作り、その前には、「赤ちゃん学会」も作りました。しかし、いろいろな意見があります。例えば、日本には「日本小児保健学会」というのがあるのに、なぜ「子ども学会」を作ったんだとか、ですね。小児保健でいいじゃないか、もちろんいいと思います。しかし、小児保健というと、小児科の先生の学問という考えが、どうしてもあるじゃないですか。児童学でもいいじゃないか。だけど児童学というと、教育の偉い先生の顔が出てくるじゃないですか。私はそういうものが一切出てこないような新しい学問という意味で、「子ども学」、そして「チャイルド・サイエンス」“Child Science”という英語も作ったわけですね。それは、子どもの「人間科学」、「ヒューマン・サイエンス」“Human Science”という意味でもあります。人間を考えるためには、人間の生物学的な側面と社会的・文化的な側面の両方を合わせて考えなければいけないし、一つの学問だけでは問題を解決できない。関係するいろいろな学問が統合する必要があります。昔は、それぞれの学者、先生が研究をしていれば、それなりの業績が上がり、ある意味では済んでいたかもしれませんが。しかし、今は情報の技術も発達して、お互いに融合することも、簡単にできるのです。

日本子ども学会は、みんなで子どもの問題を話し

合いましょうという会です。そして、子どもたちに良い社会を作りましょう。社会の子どもに関係するモノやコトのチャイルドケアリング・デザインを考えましょうというのが趣旨になるわけです。

子ども学の柱になる「子ども生態学」ですけれども、社会・文化的な因子、人間的な因子も生態因子として考えなければなりません。普通の生態学では、大気汚染の問題だとかが中心になってしまいますけれども、子どもを育てるためには、子どもの心と体のプログラムを働かせる情報が、社会文化的な因子の中で大きいと思うんですね。そのために私はチャイルド・エコロジーという考え方を、ノルウェーのベルゲンに呼ばれて特別講演をしたのです。その当時は、そういう発想は珍しかったわけですね。社会文化も取り込んで、それを乗り越えていくような新しい発想というのが、すべての始まりなのです。

最後に「子ども生命感動学」という考え方をお話したいと思うんですね。先ほどの脳の構造の3つの話をいたしましたけども、あの考え方を柱にしていくと、子どもを生きる喜びを一杯にする、生命を感動させる方法を考えることが出来ます。つまり、パパに高い高いをやってもらって、子どもは声を上げて喜び一杯になり、心臓はドキドキし、呼吸も早くなっている。そのような状態にする方法はどう考えたらいいか。それは、われわれは、経験の中で学んできたのですが、今のようにいろいろなモノが発達している社会で、子どもの遊び場も問題になっている時代に、子どもにとって良い社会をどうデザインするかを脳科学的に考えなければなりません。それには、子ども達が喜びを感じられるような社会を作る基盤になる「子ども生命感動学」が重要と思っています。

どうも、まとまりのない話をいたしました。私の申し上げたいことは以上であります。ちょうど時間になりました。千葉敬愛短期大学に総合子ども学研究所ができて、大変うれしく思いましたし、今日お招きいただいて大変うれしく思います。20世紀は「子どもの世紀」と20世紀冒頭に言われましたけれども、戦争や何かでそうは行かなかったのです。子どもたちを、ちゃんと育てられる社会を作れば、確かに21世紀は本当に子どもの世紀になるでしょう。ぜひ、今日お集まりの皆さん方は、そういう考えで勉強して下さい。そして、そのために社会に「子ども学」をPRしていただければと思います。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)もしご質問

があったらどうぞ。

**所長：**小林先生、どうもありがとうございました。本学が目指しておりますトータルな子ども観を持つ教育者、保育者の養成という点からも多くの重要なご教示をいただくことができました。また、教育保育の現場でご活躍の先生方、子育てに奮闘されている皆様にとりまして貴重なご示唆をいただけたかと存じます。それでは先生からご質問というお言葉がありましたけれども、どなたかいらっしゃいますか？

**学生(2年男子)：**質問させていただきます。教育者、保育者は育児をする保護者もサポートするという話をうかがったのですが、教育・保育を教師や保育者が頑張っても、僕は正直、子どもがどんな子に育つというのは結構、親が大事だと思っていて、先生のお話にもそれがうまくいくように保育者、教育者が親をサポートとおっしゃっていたのですが、先生のお話にも、親が自分が子どもの頃に愛情をもらっていないければ子どもに愛情を注げないというお話があったのですが、具体的にそういう親にはどのようなサポートをすれば子どもの成長にいい影響を与えることができるのか、先生のお考えをうかがえたらと思います。

**小林先生：**非常に良い質問、ありがとうございます。子どもの虐待という問題を1つのモデルとして考えますと、「世代間連鎖」という言葉があります。虐待された子どもが大きくなって親になると、また子どもを虐待するという深刻な問題ですよね。しかし、よく調べてみると、虐待された子どもが全部親になったら子どもを虐待するかというと、これはいろいろな報告によると、多くても50%、少なければ30%なんですね。ということは、残りの50%なり、70%の親はちゃんとした優しい親になっているんです。

あるところで、虐待された人が、立派なお父さんになっている人に、私も会ったことがあるんですね。その人は、父親に虐待されたのですが、お寺に行って僧侶になろうと勉強していました。そうしたら、すばらしい女性に出会って、彼女を追っかけて行って結婚して、そこで立派なお父さんになったという人がいらっしゃる。ですから育つ家庭、生活する家庭の中で、優しさの体験によって戻れる人は戻れる。そう考えていくと、優しさを体験すること、そういう機会がなかった人には、特にそういうものを積極的に体験する機会

をつくるように、しなければいけない。子どもはひとりなので、保育者も教育者も場合によっては、親に代わって重要な役を果たせると思います。

もう 30 年くらい前にノーベル賞をもらった有名な研究があるんですね。生まれたばかりの猫の片目のまぶたを縫い合わせる、そうすると光が入りませんから、その光を感じる脳の後頭葉の発達が悪くなるということが証明されたんです。つまり 2 週間くらいまぶたを縫い合わせておいて、2 週間後に切って光を入れても視力障害は戻らない。また、ネズミのひげってあるでしょう。あのネズミのひげというのは、触るとこれは金属だとか、これは紙だとか、分かる。それは、ひげ 1 本 1 本関係する神経細胞の固まりが脳にあるんですね。ヒゲにきた触覚の情報を分析して分かるようになっていっているんです。そのヒゲを切って育てるとその神経細胞が育たないという研究もあるんですね。

それはネズミだとか猫の実験ですけども、人間はそれほど綺麗にはいかないかもしれません。問題あった人であっても、生まれてから後の体験によって、少しでも残っている心のプログラムがあれば、優しさによって、優しい心も育ち、良いお父さんになるし、さらに知性・理性で考えることができれば、虐待する心もコントロールすることが出来るようになると思うのです。知性・理性というのは、体のプログラムの働きを良くするために、また情動だとか本能だとかいう心のプログラムでコントロールするわけです。人間の脳は進化した最たるものですから、そういう知性や理性をうまく働かせることによって、ある程度は戻れるものだと考えられると思います。そう考えれば、今の質問に対する答えが出てくるのではないかと思いますけれど、いかがでしょうか。保育者も教育者も親に代わって、子どもを立派な大人に育てる可能性は全くないとは言えないと思います。それが必要な子どもも少なくないのです。

**学生（2年男子）：**ありがとうございます。

**所長：**お時間の関係で、学生の皆さんは何かあればレポートに書いてもらえればと思います。それではここで、本学の学生代表よりお礼の言葉を述べさせていただきます。

**学生代表：**学生を代表して、感謝を申し上げます。本日は私たちのために千葉敬愛短期大学にお越しくだ

さり、またこのようなご講演をどうもありがとうございました。私は先生のお話を聞いて、優しさというものがどれだけ大切であるかということを考えさせられました。教育者や保育者を目指す私たちこそ、優しさを持って子どもたちに接していかなければと思います。またそうすれば子どもたちにも優しさが育つのではないかと思います。子どもたちが生きる喜びいっぱい明るい社会にするためにも優しい心は忘れてはならないものだと思います。また私は教師を目指す学生である一方、子どもを持つ母でもあります。お産と優しさは関係があると先生のお話にありましたが、私はすごくお産が軽かったので、たくさんの人からサポートを受けていたのだと、改めて家族に感謝しました。また、娘は今 3 歳なので、心や体の発達がとても活発な時期であります。たくさん子育てについて悩みもありますが、細かいことに悩むよりも優しい心を持ってたくさん愛情を持って育てていければいいかなと思いました。本日は本当にありがとうございました。（拍手）





## 第5回

「子どもの心に寄り添うとは」

(2011年12月7日)

柴田愛子先生

「りんごの木」代表

## 第5回「子どもの心に寄り添うとは」

柴田先生： 今日、「子どもって面白いよ」ということを皆さんにお伝えできたらいいなと思っておしゃべりさせていただきます。今、私は63歳です。皆さんのおばあちゃんに近い年代ですね。でも、私だって皆さんと同じように若い時があったんです。

(笑) 私は高校生くらいの時から幼稚園の先生になりたいとすごく思っていました。それで、皆さんと同じように学校に入って、めでたく免許を手にして、いよいよ幼稚園の先生になりました。でも、就職したら、どうしていいかわからないことだらけでした。もちろん、学校で勉強してきたんだけど、幼稚園の先生になったとたんに、どうしていいかわからないということがすごく多かったのね。

1つの例をお話しすると、最初に私が担任したのは4歳児のゆり組で、36人の子どもがいました。私は、自分が先生だから私の言うことに子どもは従ってくれるはずだとどこかで思っていました。ある時、「今日は絵を描きましょうね」と言って、画用紙を子どもたちに配ったら、たけちゃんという子が画用紙を下に落としちゃったんです。「えっ、たけちゃん、あんなことやってる。どうしよう。」と思って「たけちゃん、何やってるの?」と言ったら、今度は画用紙を踏んづけちゃったのね。もう、どうしていいかわからない。学校では、「言うことに従わない子がいた時にはこうしましょう」なんて教わってこなかったじゃないですか。「先生である自分の言うことを子どもは聞いてくれるはず」と思っていたら聞いてくれない子が現れた。そうしたら、「たけちゃん、何するの!」と怒るしかないわけですよ。でも、そうすると、たけちゃんももっと怒っちゃってね。画用紙をびりびりと破いちゃったのよ。もうお手上げ。たけちゃんをどうやって鎮めていいかわからないわけ。こういう子が目の前にいる時に、皆さんだったらどうします?実は、お母さんがよく使う手なんだけど、もうその子を見たくないわけね。それで「たけちゃんはもう外に出てなさい!」と言って、保育室のドアをがらがらと開けて、たけちゃんを出して閉めちゃったのね。そうしたらたけちゃん、廊下で「わあ〜っ」と泣いたの。それで、はっと我に返ったわけですよ。どうしようって。クラスの子どもに廊下で泣かれたら他のクラスの先生にバレバレ

じゃない?(笑) まずいと思って、ドアを開けて、「たけちゃん、描きたくないんだね?じゃあ、描かないでいいから中にいなさい!」って言うしかできなかったんです。

また、こんなこともありました。私が最初に勤めた幼稚園の制服は、女の子が紺のプリーツのスカートに短いハイソックスで、ちょっとしゃれてたんですね。でも、プリーツスカートって、しゃがむとスカートの裾が広がって泥んこになっちゃうのね。今でも忘れられないんだけど、ゆりちゃんという、泥んこ遊びがとても好きな子がいました。お母さんが迎えに来て「さようなら」って門を出たとたんに、「どうしてこんなに汚すの」ってピチッとひっぱたかれちゃったんです。「えっ!あーどうしようー」と思うんだけど、怖くてお母さんに「たたかないでください」とは言えなくて。私は決していい先生ではなかったですね。本当にぼろぼろな1年目、2年目だったんです。でも、頭の中ではどこか、私はちゃんとした先生になりたい、きちんとした教育をして、きちんとした子どもを育てたい。正しい教育をすればきちんとした子どもが育つはずと思っていたのね。

それで、正しい教育をするにはどうすればいいのかと考えてもわからない、だから、勉強しようと思いました。たまたま私の家の近くに夜間の幼児教育科のある大学があったのね。そこの教室に入って、座って授業を受けさせてもらってました。いい時代だったかもしれないですね。もう免許は持っているし、今更、月謝は払いたくないし。(笑) だから黙って座っていた。そうしたら一人の教授が、かわいくなってくれてね。同好会にも入れてくれて、いろいろな研究会にも連れていってくれたのね。その頃、私は20代で、10の研究会に属して、1週間に3回位いろいろな研究会に顔を出していました。でも、勉強すればするほど、どうしたらいいのかわからなくなってきたのね。絵1つとっても、自由にのびのび心の解放が大事というグループもあれば、子どもの絵を持ち寄って心理分析するグループもあるわけですよ。何色を使って描いているからどうこうって。歌も然りで、自由にのびのび音程が外れたっていいじゃない、心が解放されることが大事というグルー

ブもあれば、童唄があって、リトミックがあって。もう全部に出ていたら訳が分からなくなっちゃってね。子どもを前にして私は一体どうすればいいんだろうって、幼稚園に行くのがだんだん苦しくなっちゃったんですね。

こんな、何が正しいのかわからない世界からは足を洗おうと思って、5年目にその幼稚園をやめました。やめてOLになって事務の仕事をしました。最初は面白かったんだけど、毎日同じことの繰り返しで、だんだん飽きてきちゃって、結局また別の幼稚園に5年間勤めたんですね。

私は正しいものを求めた。正しい教育、正しい子育てを求めて、いい先生になろうと思ったけれども、どうやら正しいものはないのかもしれないという結論に至ったんですね。

いろいろ悩んで分かったことの一つ目は、教育というのは時代によってずいぶん変わってきているということ。

二つ目は、国や地域によってもずいぶん違うということ。

三つ目は、いろいろな分野の専門家がいて、同じことを相談しても専門分野が違っていると答えが違ってくるということ。

そして、四つ目は、発達段階はあくまでも平均値でしかないということ。それより早い子もいるけど遅い子もいるのね。

結局、私が10年間勉強して分かったことは、正しいものを模索していたけれども、どうやらそれはない。そして、今の社会が、大人たちが、保育園・幼稚園・小学校が、それから親たちが、どういう子をいい子と思うか、どういう子を望んでいるか、どれもこれも大人の思いばかりが前面に出ているという気がしたんです。子どもをいい子に育てたい、そのいい子っていうのはつまり、大人にとって都合のいい子、大人に評価される子のことなんじゃないか？それを正しいとしてしまっているんじゃないかということが分かった。

私の心の中には、いつも「子どもは健やかに育てほしい」という強い願いがあります。人の子として生まれてきた以上、生まれてきてよかったという人生を歩んでほしいという願いを、私はなぜか高校生くらいの時からもっていました。でも、それを実現したいと思って、私がいろいろと話を聞いた相手はやはり大人ばかりだったんですね。

そこで、ハタと気づいたんです。さて、ご本尊の子どもはどうなの？ 子どもは何も感じていないの？ 何も考えていないの？ そんなはずはない。自ら大きくなろうとする力、生きる力をもっているはずよ。原点に戻って、子ども自身をもっとよく見てみよう、子どものことは子ども自身に聞いてみよう。子どもがわかりたい、そのために私がやったことが「子どもの心に寄り添う」ことなんです。具体的には、子どもを見て、たぶんこう思っているんじゃないの？ということ言葉をしてみるということなんです。

例えば、泣き虫の子っているじゃない？私もそうだったんだけど、泣いている子がいると、大人は放っておけないんですね。これは、保育者も親もそうです。3歳、4歳、5歳くらいの子が泣いているとね、「あら、どうしたのかしら？」って思うじゃない？だから近づいて行って、「どうしたの？」って聞く。でも、泣いている子どもは、どうしたのかなんて言えないわよ。泣けちゃってしょうがないんだものね。皆さんだって時々泣くことあるでしょう？その時に、なんで泣いているの？と聞かれてすぐに、実はこれこれしかじかでって説明できますか？大人は言える時もあるかもしれない。でも子どもはまず言えませんよね。それなのに大人は「どうしたの？」って聞いて、子どもが「え～とね、え～とね、え～とね」としゃくりあげながら言うのと「え～とじゃないですよ。泣いているだけじゃわからないから、ちゃんと泣き止んでお話ししてごらんなさい」って言う。(笑)子どもは、感情の方があふれ出て言葉にならないから、「う～ん、う～ん」って言うのと、「何のためにお口がついているの。ちゃんとお口で言ってごらん」というように、大人の方がどンドンどンドンエスカレートしていってしまうから、余計に子どもが「わ～ん、わ～ん」と泣いて、関係がますます悪くなってしまふのよね。

最初は、子どもが泣いているから、どうしたのかしらって心配して、子どもの気持ちに寄り添うために、近づいていったはずなんです。ところが大人はどうしてもはっきり訳を知りたいという気持ちが強い。だから、その訳を言葉で要求する。これは、言い方を変えると「あなたが泣いているから、私は心配で来たんだけど、泣いているだけじゃ訳がわからないから、私に分かるように言葉という形にきなさい」と要求しているわけよね。これは、子どもに寄り添っているように見えて、実は子どもを寄り添わ

せているだけなのね。

本当に「子どもの心に寄り添う」ためには、例えば、子どもが泣いていたら、近づいていってまずは泣いている様子をよく見る。怒って泣いている時もあるし、悲しくて泣いている時もあるし、甘えて泣いている時もあるし、体調が悪くて泣いている時もある。とにかく子どもをよーく見て、たぶんこれは怒って泣いているんじゃないかなと思ったら、「怒っているんだよね」と言ってあげることが心に寄り添うこと。なんで怒っているのか知りたいのは山々だけれど怒っている子どもを見てまずは「怒っているんだよね」と言うこと。子どもがたぶん感じているであろうことを、言葉にして返していくことが、子どもの心に寄り添うための第一歩なんですね。

もう1つ例をお話すると、子どもって歩くの下手なんですよ。特に坂。子どもがとととととと行くと、だいたいお母さんとお父さんは、保育者もそうですけれど、後ろから「危ない、危ない、そんなに急いで走ると転んじゃうよ」と言う。そうすると、だいたい転んじやうのよね。そうするとだいたい「だから言ったでしょう。ママの言うことを聞かないから。さっさと立ちなさい」というお母さんが圧倒的に多い。でも、子どもは自分が転んでいるのに「だから言ったでしょう。ママの言うことを聞かないから」なんて言われて、「あ～、ママの言うことを聞いていればよかった。さっさと立とう」なんて思うと思います？ 子どもは何て思っていると思う？ 転んだ時は、そう、痛いよ。だから「痛いね。痛かったよね」と言ってあげることが、なにより子どもの心に寄り添ってあげることなのよね。子どもって血を見ると倍痛くなっちゃうのよ。それなのに、お母さんは「あら、血が出ちゃったわね。」なんて言って、抱っこすると自分の服に血がついちゃうから、抱っこもしてあげない。(笑) 子どもは泣いているのに「お家に帰ったら、絆創膏貼ろう」とか言っている。子どもは痛いよ。血が出てるんだから。みんなだって転んだら痛いでしょう？ いくつになっても痛いよね、血が出たら。だからちゃんとうなずきながら「痛かったよね、痛かったよね。」って言ってあげる。

怒ってる時には「怒ってるんだよね」。悲しそうな時には「悲しいよね」。「キヤッキヤッ」って言う時は「わあー、面白いよね」。そういうふうに寄り添ってあげることしたら子どもがよーく見えてくるようになったんです。

私は今、横浜に「りんごの木」というのを作って、2歳から就学前の子どもの保育をしています。夕方からは、小学生のいろいろな活動をやっています。あとは、保育者向けのセミナーや、親向けの講座を開いたり、本を書いたり、トータルな子どもの仕事をしています。私なりの仕事の基準は、子どもの足しになることをやる。足しにならないことはやらないということです。そして、一度関わった子どもたちは一生の付き合いをしたいと思って、毎年キャンプをしています。今は、小学校1年生から26歳までの子が集まってくれています。もうお母さんになった子もいるし、就職している子も休んで来てくれたりしています。

4月に2歳のあつ君という子が入ってきました。朝、私がお母さんから抱き取って、あつ君が泣いているので、「ママ、行っちゃったね。悲しいね」と言ったの。悲しい時に「大丈夫、大丈夫」と言わないのよー。「悲しいね。ママ行っちゃったから悲しいよね」と。そうしたらあつ君が「あっち」と言ったの。ママがあっちに行っちゃったって言うのね。だから「あっちに行っちゃったね」と言ったら、さかんに「あっち、あっち」と言うから「あっちにママを探しに行こう」と言ったら「うん」と。あつ君、お水だよ、お水。お水があるよ」と言ったら、「お水だ、お水だ」と。遊んでいる間は忘れてるんですけど、しばらくするとまた思い出しちゃって。「あっちー」と。しょうがないから一緒に空き地の所まで来たら、そこが泥んこだったんですよ。雨上がりであつ君がちょうど長靴履いていたからね。一緒に「ここ、泥んこで、面白いね」としばらく遊んでたのね。そうしたらあつ君の気持ちがだんだん落ち着いてきて。「あつ君、どんなリュック持ってきたのかな？ 見たいなあ。りんごに帰ろうか？」と言ったら、「うん」と。「どんなリュックかな。ママが作ったのかな」とか言いながら帰って、「これがあつ君のリュックね。見せて。中にお弁当が入っているんでしょう。ママが作ってくれたんだね。今日のお弁当どんなのを見てみようか？」って。お弁当を開けると、ちっちゃなおにぎりと、卵焼き、タコさんウインナー。「あつ君、おいしそうだね」と言ったら、あつ君は「うん」と言ってね。卵焼きを手にしたんです。食べるのかなと思ったら、あつ君は何と私の口に入れてくれたの。これって「お世話をかけています。僕はあなたのことを信用しよう」と

思っています。よろしくお願いします」っていうことよね。だから、「モグモグ、フムフム。この卵焼きおいしい！」って。あっ君は、決して自分は食べなかったんですよ。こんな風にどんなに小さくても、子どもって、しっかり感じている。いろいろな思いを巡らしているということなんですね。子どもの心に寄り添ってみたらそんな風に子どもの気持ちに気づいてきた。子どもの「つもり」もあることがわかってきた。

もう1つお話ししたいと思います。4歳で入ってきた、そうたつとこなつという双子がいたのね。ある朝、そうたつが、ぱーっと駅に向かって走る姿が見えたから、「えっ、帰っちゃうつもり？」と追いかけてよとしたら、前を担任と同じクラスの子どもたちがぱーっと追いかけていったのね。私も後ろから一生懸命追いかけていったら、駅に近い陸橋の上でみんなで円陣を組んでいて、その真ん中にそうたつが怒ってひっくり返って「わあ〜っ」って泣いているのよ。担任に、「私に任せてくれない？みんなはりんごの木に帰って」と言ってみんなに帰ってもらった。そこで、そうたつに、「怒ってるんだよね。すごい腹立っているよね」と言うと、「そうだよ〜っ」って。「そうだよね。カンカんだよね」。そうたつが怒ってるから「怒ってるんだよね」って言うだけなのに、子どもなりにこの人は分かってくれると思うものなのよね。ひっくり返って泣いていたのに、起き上がったわけ。だから2人で並んでしゃがんで「怒ったのよね」。「そうだよ、まゆみに」。まゆみってというのは担任の名前なの。「そうか、まゆみに怒っているのか」と言ったら、「まゆみはね、僕のことを無理やりママからもぎ取ったんだよ」と言うのね。「そうか、無理やりもぎ取ったのか。イヤなやつだなあ」って言ったら、「そうなんだよ。僕はママにもっとお話があったんだ」と言うから、「そうか、ママにお話があったのか」と言ったら、「そうだよ、お話があったんだよ」と言うの。「そうか、じゃありんごに帰ってママに電話をするのはどう？」と言ったら「ああ、そうする」って、そうたつはやっと普通に帰ったの。「じゃあ、りんごに帰って電話しようね」って言って、そうたつと手をつないだら、何とこなつが、ちゅちゅちゅと私の方に近づいてきて、私のもう一方の手を握ったのよ。そうたつとこなつは男の子と女の子の双子だから、いつも一緒に遊んでいるわけじゃないんだけど、片方に何かがあると、気になって近くにいる。やっぱり胎児の時から一緒っ

てすごいね。こなつは警戒心が強いから、その時点で私と手をつないだことはなかったのによ。こなつの手は「そうたつがこんなことになってしまいました。愛子さん、よろしくお願いします」と言っているのね。手つてもすごくものを言うんだから。さて、右手にこなつ、左手にそうたつというように3人で手をつないで歩いていたら、途中でこなつが「そうたつ、ママになんて電話するの？」と聞いたの。

「えっ、ママに話があるからだよ」「何のお話？」「大事なお話だよ」「大事なお話って何？」とこなつが聞いたら、ちょうどりんごの木に着いたんですけど、そうたつは「もういいや」と言ってそのまま遊びに行ってしまったのね。問題が解決したわけじゃないんだけど、心に寄り添ってもらうことによって、そうたつの気持ちが落ち着いて、そうしたら、もうどうでもいい問題に思えてきて、自分の遊びに向かっていた。でも、そうたつは、遊びながらも、まゆみをチラチラッと見る目が冷たいのよね。(笑)担任とそのクラスの子どもってこれからもずっと続くから、いい関係にしておきたいと思った。だから、2人を呼んで、「そうたつ、怒っていることをまゆみに言ったら？」って言ったら、「あのさ、無理やりママから僕をもぎ取ったでしょう」って。まゆみという保育者に「どうして無理やりそうたつをもぎ取ったの？」と聞いたら「だって今日、お母さんがいつもと様子が違っていた」って。毎日、保育をしていると、お母さんがこのまま家に帰るのか、何か用があって出かけるのかっていうのは、服装とかお化粧の具合で分かるのよね。それで、そのまゆみという保育者は、お母さんに「急ぎます？」と聞いたら、やっぱりお母さんは「急ぎます」と言う。なのにそうたつはグズグズしている。だけど私たちにだって分かるんだから、子どもはもっと気づいてるのよね。きっと朝から「お母さん、今日はいつもと違う。何かいい服着てるし、お化粧もちょっと違うぞ。僕たちが幼稚園に行ってる間、どこかへお出かけするんじゃないか？」と思ってるのよ。でも子どもって「お母さん、今日はいつもと身なりが違いますね。どこかへお出かけですか？」なんて聞かないでしょ。(笑)聞かない代わりに、その不安な気持ちがグズグズになるわけね。お母さんは子どもをさっさと預けて出かけた。子どもはそういう時に限ってグズグズグズグズするものなんです。

ここでね、ちょっと待てよって思うのね。これって、お母さんの「つもり」と保育者の「つもり」ば

かりが優先されてて、肝心の主役じゃなきゃいけないそうたつの「つもり」を、みんな聞いてないじゃないということなんです。確かに子どもって今しか生きていないから、子どもの「つもり」を尊重してばかりいると1日が全く回っていかないんですよ。でもね、そうたつのグズグズは、お母さんの様子がいつもと違うことを気にして不安になっているからなんだなと気づいたら、「お母さん、今日はちょっと用事があるとお出かけしてくるけど、いつもと同じ時間にちゃんとお迎えに来るからね」とか、「今日はお母さん用事があるって、もう行かないと間に合わないから行かせてね」という言い方もあったと思うんですね。こんな風に子どもの思いに寄り添うことで、大人の側にも子どもが見えてくるし、子どもも落ち着いてくれるんです。

あそびに関しても、取りあえず子どものやりたいようにやらせてみよう。よっぽどのことじゃなかったら、まあいいかって見てみよう。子どものやりたいことを保証してみちゃおう。それが、子どもを分かっていくってことになるかもしれないと思ったんですね。

ある時、3歳のありさちゃんという子が、おままごと置いてあったおろし金で、クレヨンをおろし始めたのね。そうするとクレヨンが粉になるでしょう。それを見て、ありさちゃんが「きれい」って言うのよ。確かにきれいな。そして小麦粉粘土に、このクレヨンの粉でトッピングし始めたのね。そういうのはすぐ流行るの、子どもたちに。みんなゴリゴリ、ゴリゴリやるようになったのね。(笑)クレヨンがどんどん、どんどんなくなっていくのよー。えー、これってどうなの？大人の価値観ではとんでもないことを子どもが始めたわけです。でも子どもは「面白いね」って。私は、すぐに禁止はしないで考えてみたんです。大人はクレヨンを画材として見る。でも子どもにしてみたらクレヨンは色の棒でしかない。これは絵も描けるけど、おろしにするとききれいということをありさちゃんは発見した。どうしてストップをかけようか、かけまいか悩んでいるんだろう？何が嫌なんだろう？と考えたわけです。そして、クレヨンは決して安くはない金額を出して買っている物であって、おろし金で次々とおろしてしまっていていいとは思えないからだ気づいたんです。そこで、私は「いらないクレヨンをください」という張り紙をしました。そしたら、どこのうちにも使

ってない、ちびたクレヨンってあるのね。たーくさん集まってきたんです。それで絵を描くためのクレヨンの缶と、おろしていいクレヨンの缶と2つに分けたの。そうしたら、子どもたちが、今度は、油粘土にクレヨンの粉を練り込んで、マープリングみたいにきれいにし始めてね。子どもは、常にそうやっていろんな発見をしながら、たくさんの無駄をしながら、怒られたりもしながら大きくなっていく。自ら大きくなっていく力を持っているというように私は思っています。

子どもと大人の一番違うところは、大人は言葉でコミュニケーションを取りますが、子どもは言葉だけのコミュニケーションではうまくいかないということです。こんなに豊かな文明の進んだ時代になっても、太古の時代からヒトの生まれ方は変わっていませんね。赤ちゃんは「おぎゃあ」と生まれるんです。「おはよう」と言って出てきた子はいないんです。環境によってだんだん言葉を学習して行って、4歳ぐらいになって、言葉と感情や意思とが結びつくと言われています。だから言葉にすることだけを要求していると、子どもの気持ちや言いたいことは見えてこないと思いますね。その子の表情や動きをよく見る以外にない。子ども同士は、表情でコミュニケーションすることの方がはるかに多いんですね。

りんごの木に、3歳のコリアというドイツ人の子がいたんです。コリアはものすごくめっちゃめっちゃ子なの。わんぱくぼうずなのね。みなさん、ガーガー車って知っていますか？三輪車に乗る前の子どもが乗る、またがって足でこぐ車のことです。コリアはりんごの木にある赤いアンパンマンがついたガーガー車が大好きで、完全に私物化してたのね。誰にも使わせないで、いつもそれに乗っている。ある時、コリアが、砂場に穴を掘って池を作っていたんです。その時に、しゅうちゃんという子が、砂場のそばに置いてあるコリアのガーガー車に乗りたいと言ったのね。しゅうちゃんは、3才になったばかりですが、大人の中で育ってるから口が達者で、学者肌タイプというか、おとなと言葉でコミュニケーションができる子でした。そんなしゅうちゃんからすると、はちゃめちゃんコリアは、動きがすごく速くて、予想できないことをするし、怖くて、怖くてしょうがないのね。しゅうちゃんのお母さんが、「あの、うちの子、帰ってくると毎日『コリアが怖い、コリアが怖い』って言うんです」って言ってました。だ

から、私が「しゅうちゃんとコリアは全く接触していないから、きっとしゅうちゃんは遠くからコリアを見て『怖いな、怖いな』って思ってるんですね。でも実際にコリアに怖いことされているわけじゃないから大丈夫ですよ」と言うと、お母さんも安心して「そうですか」と。そのしゅうちゃんが、コリアのガーガー車に乗りたいと言った。私が、「じゃあ、『貸して』って言うてみたら？」と言うと「うん、分かった。行ってくる」って。かなり離れた所から「貸して」と声をかけたけど、コリアが「だめ！」って言ったのね。戻ってきて「だめだった」って。私が「あ～、残念だったね」って言った。しばらくするとまた「でもやっぱりあのガーガー車に乗りたい」って言うのよ。だから「じゃあ、もういっぺん言うてみたら」と言うのと「分かった」ってまた行ったの。しゅうちゃん、さっきよりはコリアに近づいて「貸して」と言ったら、またコリアに「だめ～っ」って大きな声で言われて、「あ～ん」と今度は泣いて帰ってきた。私もまた「あら、残念だったわね」って遊んでいたんだけど、私ね、ハタと思ったの。しゅうちゃんには、欲しい物は奪い取ってでも自分の物にするというパワーがない。3歳児は、みんな結構自分勝手に、わがままなのにね。しゅうちゃんは、自分の欲しい物を自分で奪い取ってくるという方法を知らないんだなと思ったのね。それで、「よし、私がやってみせてあげよう」と思って、私がコリアの所に行って「これ貸して」と手にしたら、コリアが「だめっ」。「今使っていないんだから貸して」と言っても「だめ～、だめ～」って。「今は、池を作ってるんでしょう。ガーガー車、今は使っていないんだから。」と強引に取ろうとしたら、コリアが泣き始めて「だめ～、だめ～」と言うのよ。もう泣いている子から奪い取るって本当に気持ち悪いわよ。(笑) だけど乗りかかった船だしもう途中で止められないわよ。だから「後で返すから貸して」と言ったら、コリアは「分かった」と言って手を離れたのね。わざわざ奪い取ったんだから使わない訳にはいかないじゃない。しょうがないから、私、車にまたいで足で地面をけてガーガー、ガーガー、一回りして、しゅうちゃんのところに行って、「しゅうちゃん、これ貸してあげる」と言ったのね。そうしたら、しゅうちゃん、びっくりしたような困ったような顔をしながら、「うん」と言って、2秒ぐらい乗ったんだけど、すぐ立って、何とガーガー車を持ってコリアのところに行ったのよ。そして、コリアに「もういい」

って言って、返してきたの。え～、せっかく私が奪い取ってきてあげたのに、やっぱり大人がしゃしゃり出る幕じゃなかったのかなとか、私はいろいろ思ってたんですね。そしたら何と今度はコリアがガーガー車を持ってしゅうちゃんのところに行ってきて「順番いいよ」って置いたの。そしたらしゅうちゃん、ニコッと笑って、コリアもニコッと笑って、2人の心がミリミリッとつながった感じ。それで、しゅうちゃんは大喜びでガーガー車に乗ったんですね。子どもの心と心が結びつく時って、これは言葉じゃないです。それから、しゅうちゃんはコリアとすごく仲良くなっていくのね。そういうドラマが見られると、保育ってすごく面白いなあっていつも私は思います。

もう一つ、お伝えしたいのは、「貸して」「どうぞ」「入れて」「いいよ」「ごめんね」「ありがとう」っていう言葉を早い時期から教えようとするのがありますが、子どもって体験する前に言葉を教えてしまうと、言えるようにはなるけれど、本当の意味は分からないで記号のように使ってしまうんですね。例えば、よく噛みつく子が、「噛んじゃだめ、噛んじゃだめ。やさしく、やさしく、噛んじゃだめ。」と唱えたりするのね。これは、噛んじゃいけない、やさしくしなくちゃいけない、って分かっているのではなくて、自分が噛みついた時に聞く大人の言葉がインプットされてるだけなんですよね。言葉が言えるからって心は育っているわけじゃないのね。子どもの気持ちを知りたいと思ったら、言葉に頼りすぎない方がいいと私は思っています。

子どもって本質的にみんな大きくなりたいと思っています。その大きくなりたい先は、幼児の場合、オリンピック選手なんかじゃありません。ノーベル賞でもありません。自分の手が届きそうなところの目標を、もう少し勇気を持って頑張ればできそうな、キラキラ輝いて見えることにくらいついていくんですね。

ゆうきという男の子がいました。勇気のないゆうきな。何でもやってみればいいのに、何にもしないで見ているだけなんです。石橋を叩いて渡れないタイプね。慎重なんです。お母さん、お父さんはスポーツマンだから、親子でタイプが全然違うわけね。そのゆうきがプールに行った時に、プールサイドにしがみついて手を離そうとしないのね。「ゆうき、手を持ってあげようか？」と言ったら「いいの、い



いの」と言うから、「そう」と放っておいたのね。そうしたらゆうきが水面にあごを「ちっ、ちっ」とつけているのね。自分も大ちゃんみたいに泳げるようになりたい。そのためには、どうやら顔を水につけることが大事だって、彼なりに思ったんだと思う。「ゆうき、すごいじゃん。あごが水に入ってるよ」と言ったら、そのうちに口の上までいったから、今度は「ゆうき、すごい。口まで入れるなんてすごい」って。何気なく見ていて、変化があったらすかさず声をかけるだけなの。やがて鼻の穴までいったのよ。「ゆうき、すごい。口と鼻、両方はすごい」と言ったら「うんうん」って。ゆうきにとってはものすごい勇気があることなのね。そしてその日のうちだったかな。ゆうきが、顔をガパッとつけ始めて。それに気づいた他の子たちも「ゆうき、すごい、すごい。顔をつけられるようになったね」って大騒ぎ。すると、次にゆうきは、他の子の泳ぎを眺めながら、ちょっと体を伸ばしてみようかなっていう風になっていくわけですね。結局、ゆうきは、その夏のうちに泳げるようになりました。そんな風に子どもは自分の目標を身近なところで見つけていく。そしてそれに夢中になって、頑張っ、できるようになっていくんですね。

例えば、3歳の子は自転車に乗れるようになりたいとは思わないです。3歳の子は三輪車に上手に乗れるようになりたいと思う。そして、4歳の子は、補助輪付き自転車が乗れるようになりたいわけよ。でも補助輪付きに乗っているうちに「〇〇ちゃんは、補助を外して、カッコいいな。僕も外してみようかな、どうしようかな」っていうように、いつも子どもにとって大きくなりたい目標が周りの子どもにある。だから集団教育が必要。自分の周りに、自分のちょっと上やちょっと下のいろいろな子がいることで、自分の目標を見つけていくこともできるし、自分が他の子の目標になることもできるということですね。

ゆうきは、次に、そろそろ補助輪を外したいと思っているなど私には見えたから、お母さんに「ゆうきが『補助を外す』と言い出すまで、やらないでね」と言ったら、お母さんが「え〜」って。「ゆうきは、自分の準備が整ったら自分から言える子だから、それまで勝手に外さないでよ」と言ったら「分かったわ」って。皆さんは、自転車の補助輪を外した時のこと覚えていますか？子どもが一生懸命漕いで、大人は後ろの荷台の所を持って一緒に走って、子ども

は絶対手を離さないでよって言ってるのに、途中で大人は黙って手を離して、子どもは知らないうちに一人で走れているっていうやり方をして乗れるようになった人が多いんじゃない？だけど、私は、ゆうきのお母さんに「あの嘘をつくやり方はやめてくれる？ゆうきにはそのやり方は合わないと思う。ゆうきには『ママは嘘をついた』っていうことの方がずっと応えてしまうから。だから何もしないで。見てるとどうしても口が出ちゃうから、家の中にいてね」と言ったの。やがてゆうきが「補助を外す」と言い出して、お母さんは「ああ、また転んだ」「ああ、ひざから血が出ている」「もうこれで絶対乗らないことになるわ」って思いながら黙って見ていたら、何と3日で乗れるようになったんですね。その時、お母さんが言ってました。「子育てって、子どもの前に立って、子どもを引っ張っていくことじゃないんだね。子どもの後ろから子どもを見ていくことなんだね」って。私は、お母さんに「いいことを見つけたね」って言いました。私は、保育も同じだと思っています。保育も、子どもの前に立って子どもを指導することばかりではない。子どもをしっかり見て、子どもが今やりたがっていること、子どもが大きくなろうとしていることを援助してあげるのが保育者の役目かなと思っています。

言葉を通してのコミュニケーションが、4歳以降になってくると達者になってきます。そして5~6歳くらいで、言葉で考えるということができるようになってきて、すごくこだわってしつこくなる時期でもあるんですね。

この間、見事な喧嘩があったんです。りんごの木では、10月末に運動会をやるんですけど、4歳、5歳は自分たちで種目を考えるのね。自分たちがやりたいこと、そしてみんなができること、さらに見ている人が「頑張れ、頑張れ」と言いたくなるような種目を自分たちで考えるんです。そうすると、だいたい最初は30ぐらい出てくるんですが、どんどん淘汰されていって、20ぐらいになると一つ一つ実際にやってみるんですけどね。去年最後まで残った一つは、水一気飲み競争でした。何と走って行って、水をガブガブ飲んで、早く飲み終えた方が勝ちっていうものです。(笑)ところがやってみたら、カッカカッカカッって飲む時にコッコッコッって入っていく子とウッってつかえる子がいて。つかえる子がこれ苦しいから止めた方がいいって。それからもう

一つは、魔女競走というもの。ほうきにまたがって、いろんな三角の黒い帽子をかぶって、走る。図柄的に素敵でしょう？ちょっと面白そうでしょう？かなりの支持を得て、実際にやってみたら、男の子たちが「これだめだ。チンチン痛い」ってことになって却下されたのね。(笑) そんな風に子どもたちがいろいろな案を出して、種目を決めていくんですね。その話し合いをしていた時のこと。

あおい君という男の子、わんぱくぼうずでけんかっ早い、けんかの強い子なのですが、そのあおい君が、もうリレーをやりたくてしょうがないというオーラを出しているわけよ。それもアンカーをねらっているわけ。そのあおい君が「リレー」と言うから、

「ああ、そうだよ。あおいはリレーのアンカーねらってるんだもんね」と言いながら、あおい君の隣に私は座っていました。私のもう一方の隣にはまゆちんという女の子がいたのね。「じゃあ、まゆちは？」と言ったら、まゆちは「それって去年もやったし、それつまんない」とブツブツ、ブツブツ言っているの。それで、その隣にいたかなめちゃんという女の子にも「ねえ～」とか言っているのよ。かなめちゃんも「そうよね。去年もやったけど、あまり面白くなかった」とか、ゴチョゴチョ言っちゃって。私はカッときて、「あの、そうやって文句だけ言うのはやめてくれない？まゆちはもう運動会なんてなければいいのにと思っているの？」と言ったら、まゆちは「そこまでじゃないよ」と言うのよね。

「じゃあ自分たちも何がやりたいか考えなさいよ。新しいのを考えたらどうなのよ」と。そしたら、かなめちゃんが「じゃあ、飛び箱」とか言って、まゆちんと2人で「リレーなんてイヤよね～」って。それを聞いたあおい君がカッときて、「かなめはさっきから何も考えてないじゃないか」と言ったのね。どうしてまゆちんじゃなくて、かなめに食ってかかったかという、あおい君はまゆちんにはまだ少し遠慮があるんです。かなめちゃんには遠慮がない関係なの。けんかってけんかができる間柄じゃないと起きないのよ。あまり知らない人とけんかは起きないんです。気心知れているからけんかになるの。だから兄弟げんかが一番多いのよね。

そうしたら、かなめちゃんは「あたしだって考えてたね。だいたいどうして私のこと『考えていない』』とか言うのよ。どうしてそんなことがあなたに分かるのよ」って。それで、あおい君が「顔を見れば分かるよ。お前は考えてない顔してる」と言ったら、

かなめちゃんは「あたしの顔なんですから。考えているか考えていないかは私が分かるんです。あなたに分かるわけない」と返したわけね。もうすごいバトルが繰り広げられて、私もびっくり仰天して興奮して見ていたから記憶が定かではないんだけど、そのうちにあおい君が「だいたい大きい人に向かって、かなめは小さいくせにそんなことを言うな」って言ったわけよ。あおい君は体が大きいのね。「大きい人に向かって小さい人はそんな風にリレーのことを言うな」って言ったわけ。そしたらかなめちゃんが「大きいとか小さいとか関係ないね。おんなじ人間なんだから」って。私も「それはそうだよ」って。2人でものすごくワーワー言ってるんだけど、私はどうしても今日、種目を決めたかったのね。「あのさ、ずいぶんけんかが長くなってきたので、ちょっとけんかの気持ちをたんまして種目のことを考えるのはどうでしょう？」と言ったんだけど、二人は「だめっ」「だめっ」って言うわけね。「じゃあけんかは後で続きをやるのはどう？」って言っても、「だめっ」「だめっ」って。「口げんかだからなかなか終わらなくて長いよ。体のけんかに切り替えたらどうでしょう？体のけんかだと早く終わるし、早くすっきりします」と言っても、かなめちゃんは「だめっ、口で」って言うのよ。あおい君も立ち上がらないで「口で」って。偉いよね。それでまたバトルがワーワー、ワーワー、始まったのね。そしたらそのうち、かなめちゃんが泣いているのよ。泣いて椅子の上にひざを抱えて、「もう、りんごの木なんかやめてやる」と言ったのね。「もう明日から、りんごの木なんて来ない」って泣いているわけ。そしたらあおい君がなんと、「あ～、やめろ、やめろ。お前が来なかったらすっきりする」って言ったの。そしてまたかなめちゃんが「わあ～」って泣いて。私は「えっ、やです。かなめもあおいもやめたら私は悲しいですから。やめるようなことはない方がいい」と言っていたのね。そしたらそこにもう一人、あお君という男の保育者、その彼はあおい君と取っ組み合いの喧嘩を何日か前にしたことがあって、そのあお君という保育者があおい君の顔をまっすぐ見て、「あおい、体のけんかをする時、椅子とか道具とか持ち出すのはなしだろ。今お前が言っていることはそういうことだと思うよ。口で言っちゃいけないことまで言っていると思う」と言ったのね。「あ～、やめろ、やめろ。お前がいないとすっきりする」。この言葉を聞いた時、あお君はすごく悲しかったって。それで「それはもう言っ

やいけない言葉だよな」とあおい君をまっすぐ見て言ったんですね。私はそれが針のように感じました。そしたらあおい君もシュンとなったのね。それで私も「もう今日はお腹もすいてしまったので、お昼にしましょう。お昼を食べてお腹が膨らんでくると気持ち少し穏やかになるから、もうご飯にしよう」と言って、私が立ち上がったら、あおい君がすっと立ち上がって、かなめちゃんの後ろからかなめちゃんの肩に手を載せて「かなめ、ごめんね」とのぞくようにして言ったの。そしたらかなめちゃんが「わあ〜っ」と泣いて、「いいよ。私の方こそごめん」と言ったんですね。私も「わあ〜っ」と泣けてしまって、周りの子どもみんな「よかった、よかったね」とって。もう4歳児なんて、ドキドキしながらけんかを見ていて、この緊張感に耐えられなくて、時々おしっこに行ったりしながらじっと見ていたのよ。あのしゅうちゃんも「よかったね、よかったね」とって。みんなで「よかったね、よかったね」とって。「じゃあ、お昼にしようね」と言ったら、あおい君が座った隣に、かなめちゃんが椅子を持ってきてウロウロしているわけね。そしたら、あおい君が手招きして。声はかけないのよ。かなめちゃんは真っ赤に泣きはらした顔して、2人で隣に座ってすごい楽しそうに「キャッキョ、キャッキョ」とって、お弁当食べたんですね。

子どものけんかは大人と違って、本当にまっすぐです。そして、気持ちと気持ちがぶつかり合った後に溝ができません。ほとんどの場合、前よりももっと仲良くなっています。子どもは日常茶飯事にけんかをします。物の取り合いの時もあるし、誤解の時もあるし、こんな風にもものすごい言い合いをする時もあるし、それから友だちになりたくてちょっかいを出すこともあります。子どもは言葉じゃなくて、体全部で、行動を通してものを言っています。そしてそのことを子どもはまっすぐ受け止めます。だから大人のように恨みつらみで起きるけんかというのは、ほとんどないですね。そして、けんかをした後、しこりになるということもないですね。だから私は、子どもはけんかをしていいと思っています。子どものストレートな思いをストレートに相手に伝えること。それは言葉以前に大事なことで私は思っています。そしてそのことを通して、子どもは自分の気持ちと同時に人の気持ちも分かってくる。人と人の気持ちを練り上げながら分かっていくというのかな。そんな風に思っています。

けんかは、何かを持っているから大きな怪我になるけれども、素手でやったら、体力に見合った程度の怪我しか起きないんですよ。だから素手で、一対一で堂々とやるんだったら、けんかをよしとしています。だから、りんごの木では5歳児でけんかが始まると周りの子が、「顔なし」「顔なし」と言うんですね。つまり、顔は攻撃してはいけない。傷が残ってしまったら、本人はもちろん、けがをさせてしまった子もずっと心がうずく。だから、「顔抜き」というルールができてきたんですね。「顔なし」「顔なし」とって一生懸命に声をかけたりしています。そんな風に子どもの生の現場って、子どもに関わり始めた最初の頃の私のように、意気込んでいるとなかなかうまくいきません。私に何かをしてあげられる。私が何かをしなくちゃとばかり思っていると、すぐに挫折してしまうけれど、子どもってどんなふうに感じているの？私が子どもの時はどんなふうだったかな？そんな風に子ども自身を、子どもの心を見ようとし始めた時からたくさんものが見えてくるんだと思います。そして、私、子どもだけが輝いて先生がくすんでいるというのはありえないと思うの。やはり保育者も輝いてこそ子どもも輝く、共に輝いて育ち合っていく。共に育つ共育。教えて育つ教育という字を大抵は使いますが、そうじゃなくて共に育っていく共育ができればいいなと思っています。

私が幼稚園の先生になったばかりの時に1つ自分に対して決意したこととか、覚悟したことがあったんですね。それは、子どもは分かりやすい子、分かりにくい子、いろいろいます。教育実習でも、「大嫌い」とか「バカ」とか言われることもありませぬ。でも子どもって、先生に興味がある、気になるということが「大嫌い」や「バカ」という表現になったりするのね。言葉と心は決してイコールになっていないことがあります。だから、そんな言葉の表面だけをとらえて傷つかないでほしいなと思っています。私は先生になったばかりの時、未熟なために、たけちゃんにしてしまったようなこともあったんですけど、私が自分自身に誓ったことは、「今から出会うどの子も愛してみせる」ということでした。「どんなに自分が未熟でも子どもを愛おしいと思うことはできる。どんな子であっても愛してみせる」という覚悟をしました。あなたたちが親を選べなかったように子どもは担任を選べません。そして、あ

なたたちがかけがえのない親に愛されたい、好かれたい、評価されたいと思っているように、子どもたちも、先生に好かれたい、愛されたい、喜んでほしいと願っています。そのことを忘れないでほしいなっています。

私は、子どもと実際にあった出来事を絵本にしてきて、最新作は『バナナこどもえん ざりがにつり』という絵本です。今日は、最初に作った絵本で、日本絵本大賞という賞をいただいた『けんかのきもち』を読ませていただきたいと思います。これも実話です。

『けんかのきもち』

柴田愛子 文、伊藤秀男 絵。ポプラ社刊。

これは、こどもたちのあそびば、「あそび島<sup>じま</sup>」のおはなしです。

「あそび島<sup>じま</sup>」には せんせいもいて、まいにち たくさんのこどもたちが あそんでいます。

ぼくは たい。  
うちのとなりの「あそび島<sup>じま</sup>」で  
まいにち あそんでいる。  
いちばんのともだちは こうた。

なのに、こうたと すっごい けんかした。  
けり いれた。  
パンチ した。つかんだ。  
とびかかった。

でも こうたはつよい。びくもしない。  
ぼくより すごい けり いれられた。  
パンチ された。  
つかまれた。  
たおされた。

「もう いやだ」  
ぼくが いうと、  
「おわりにする！」  
そういつて、こうたが ぼくのかたを どついた。

ぼくは しりもちをついた。  
「ううう……うわあ～～」  
ないた。くやしかった。

なきながら はしって うちにかえった。  
おかあさんにくっついて もっと ないた。

ないても ないても  
なきたいきもちが なくなるらない。

あいこせんせいが、  
いきなり げんかんをあけた。  
「たい、おやつ いっしょにたべよう。  
さっき みんなでつくった ぎょうざだよ。  
へんじなんか してやんない。  
「おかあさんも いっしょに どうぞ」  
いくもんか、ぜつたい いてやんない。  
おかあさんだつて いかないにきまっている。

ぜつたい いかないと おもつたのに、  
おかあさんひとりで いっちゃつた。  
なんでだよ！ なんでだよ！  
なんでなんだよ！

「おかあさん かえつてきて！」  
げんかんをあけて さけんだら、  
みんなが みえた。  
「たい！ おいでよ！ いっしょにたべよう」  
「おいしいよ！」  
わつ！ やだ！ いくもんか。そのとき、

「ごめんな！」  
こうたの でっかいこえが した。  
なんでだよ！ なんでだよ！ なんでだよ！  
なんで あやまるんだよ！

なみだが だた。  
いそいで げんかんのとを しめた。  
そんなこと いうな。  
けんかのきもち  
おわつてない！

「うわあ～ うわあ～ うわあ～」  
おかあさんが ぎょうざをもつて かえつてきた。  
20こ あつた。  
こうたと つくつた ぎょうざだ。  
ひとりで たべた。ぼくぼく たべた。  
もう なみだは とまつた。

けんかのきもちが おわつた。  
「おかあさん おさら あらつて」  
「あそび島<sup>じま</sup>」のにわに はいる かいだんを  
のぼりながら ときどきした。  
おさらをもつている てに  
ちからがはいつて がちがちになつた。

2 かいのまどに こうたが みえた。

「ごめんな！ さっきは ごめんな！」  
こうたが いった。

「へへへ…」

ぼくは ちょっと てれた。

でも、こんどは きっと ぼくが かつ。

おしまい（拍手）。

ありがとうございました。こんなふう子どもたちはぶつかり合いながら、ちゃんと育っていきます。このお話では、こうだけが「ごめんな、ごめんな」と言っていて、たいは一度も「ごめん」を言っていないんです。けんかのお話って、なぜけんかになったかが書いてあって、最後に互いに「ごめんなさい」「ごめんなさい」って握手して仲直りするというのがパターンとして多いんですけど、実際の子どもたちはそんな風にはならないです。子どもはとてもシンプルです。泣いた方が負け。強い方が弱い方に歩み寄る。人間としてとても大事なルールを、もうこの子どもたちは知っているんですね。言葉として出さないけれど、ちゃんと分かっています。その姿はとても格好良いし、なかなか大したものです。たかが子ども、されど子ども。皆さんは本当にいい仕事をねらっていますよ。こののまま目標を貫いて、現場に出て、子どもたちとよい時間を過ごしてください。それが自分自身を育てること、豊かになることにつながっていくと思います。今日は、真っ暗になるまで聞いてくださってありがとうございました（拍手）。

**所長：**柴田先生、どうもありがとうございました。本日は、これから本格的な実習が始まる1年生と、4月から教育者や保育者として子どもたちの前に立つ2年生が、一緒に先生のお話を聞かせていただきました。こういう節目の時に、先生のお話を聞かせていただけたことを、とても幸福に思っております。それではここで、本学の学生代表よりお礼の言葉を述べさせていただきます。

**学生代表（1年女子）：**本日はお忙しい中、お越しいただきありがとうございました。私たちは、普段授業の中でりんごの木のVTRを見たり、事例に沿ってそれぞれの意見を出し合ったり、『ぜっこう』などの

絵本や『保護者とのつきあい方50のコツ！』などの本も読ませていただいたりしていたので、実際に今日、先生にお会いできることをとても楽しみにしていました。私たち1年生は2月から本格的に実習が始まるのですが、今回柴田先生から学ばせていただき、今までの自分の考えを見直すことができました。それぞれが目指す保育者になれるよう、たくさんのことを吸収し、保育の仕事は素晴らしいと誇りを持って言えるよう、日々を大事に過ごしていきたいと思いました。本当にとても楽しくあっという間でした。貴重なお時間をありがとうございました（拍手）。

**柴田先生：**ありがとうございました。日頃から、私の絵本や本を読んでもらっているんだなと思って、もっとうれしかったです。りんごの木で制作しているホームページにも、保護者の方々のいろいろな相談が載っていますので、是非見てみてください。よかったら、遊びにいらしても結構ですよ。お互いに日本の子どもたちを大事にしていきたいと、お金ではなくて、手をかけ、心をかけて子どもたちが健やかに育つことを応援していきたいなと思っています。お礼の言葉をいただいて、ありがとうございました（拍手）。

「現代子ども学」公開講座  
講演集録  
第1号

---

発行日 2012年3月15日

発行 千葉敬愛短期大学 総合子ども学研究所  
〒285-8567  
千葉県佐倉市山王1-9  
TEL 043-486-7111 (代表)

印刷 株式会社テーオー印刷  
〒285-0025  
千葉県佐倉市鎗木町1137-4  
TEL 043-484-0321

